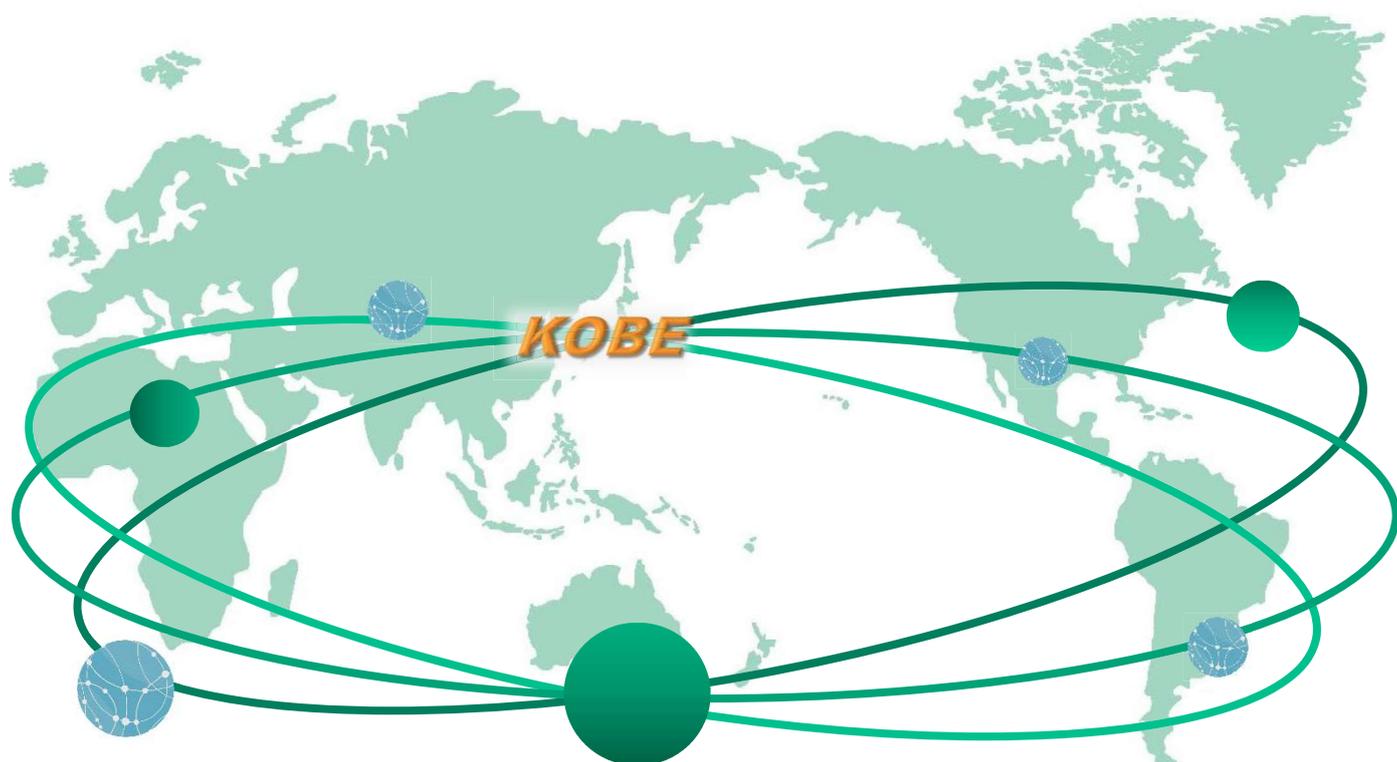


令和2年度
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業

研究報告書

第2年次 令和3年3月



神戸市教育委員会

拠点校

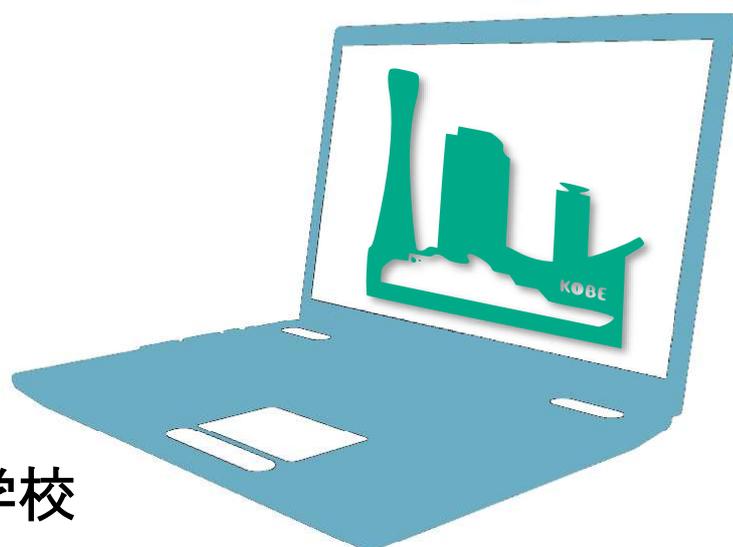
神戸市立葺合高等学校

共同実施校

神戸市立科学技術高等学校

神戸市立神港橘高等学校

神戸市立須磨翔風高等学校



2020-2021

「令和2年度 WWL 研究開発報告書」刊行に寄せて



神戸市教育長
長田 淳

「令和2年度 WWL 研究開発報告書」の刊行にあたり、日頃より神戸市立高等学校 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業に、一方ならぬご尽力をいただいております皆様に厚くお礼を申し上げます。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策による一斉休校や分散・時差登校などにより通常の授業開始が遅れ、授業を平常通りに開始することができたのは、6月半ばのことでした。そのような中で、7月上旬に「WWL International Conference Online 2020 at Fukiai」をオンラインで開催し、オーストラリア、スウェーデン、台湾、フィリピン、ドイツの高校生たちと国際会議を実施しました。慣れないオンライン会議ではありましたが、参加した教員・生徒全員が協力し、素晴らしい会議となりました。12月には課題研究や探究活動に取り組んでいる高等学校が互いに発表し学び合う「WWL 課題研究交流発表会」についても無事開催することが出来ました。また、本年度より、神戸市立六甲アイランド高校とカナディアンアカデミーが連携校に加わりました。これにより WWL コンソーシアムに神戸市立全日制高校5校全てが加わることとなりました。

今後は、「Neo MAKS」の育成や「学際的な学び」に向けて、WWL 事業拠点校である葺合高校や共同実施校である科学技術高校、神港橋高校、須磨翔風高校、連携校である六甲アイランド高校による神戸市立高校のコンソーシアムを活用するとともに、国際機関や国内外の事業連携校、大学などと連携したAL (アドバンスト・ラーニング) ネットワークのより高度な構築を図ってまいります。その集大成として、令和3年7月には国際会議である「WWC (ワールド・ワイド・コンファレンス)」を開催する予定です。

神戸市教育委員会といたしましては、今まで以上に「Society 5.0にとどまらず、その先にある Society 5.2の世界を見据えることができる超未来型グローバルリーダー育成」を目指して当事業に取り組んでまいりますので、引き続き温かいご支援をいただきますよう、よろしく願いいたします。

令和3年3月

目次

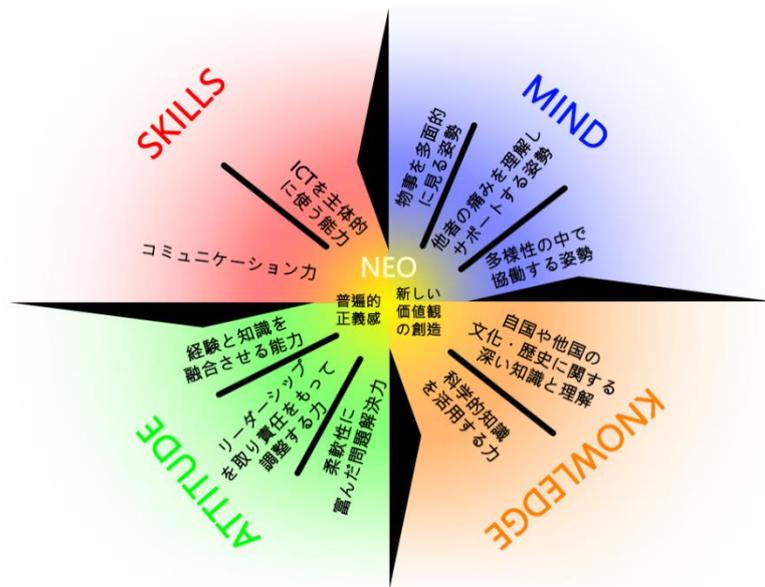
	巻頭言 WWL 構想図 1年の軌跡 メディア報道	1 2
I	令和2年度研究開発完了報告書	5
II	令和2年度年度研究開発の概要	22
III	ALネットワークの発展 1 WWL International Conference Online 2020 2 WWL 課題研究交流発表会 3 第2回 WWL フォーラム 4 全国高校生フォーラム 5 AI 翻訳プロジェクト～産官学連携～ 6 共同実施校の取組1 神戸市立科学技術高等学校 7 共同実施校の取組2 神戸市立神港橘高等学校 8 共同実施校の取組3 神戸市立須磨翔風高等学校 9 共同実施校の取組4 神戸市立六甲アイランド高等学校 10 共同実施校の取組5 Canadian Academy	25 27 29 31 32 33 35 36 37 38
IV	学際カリキュラム開発 1 学際的科目における学びの特徴 2 学際国語 3 学際リサーチ 4 家庭基礎 5 情報の科学 6 グローバルスタディーズⅠA (GSⅠA) 7 グローバルスタディーズⅡB (GSⅡB) 8 グローバルスタディーズⅡC (GSⅡC) 9 グローバルスタディーズⅢC (GSⅢC) 10 第1学年 総合的な探究の時間「探究の日」 11 第2学年 総合的な探究の時間	40 41 43 45 47 49 51 54 57 59 61
V	高度な学び 1 本年度の取組概要 2 WHO 神戸センター オンライン講演 3 OPTiM の AI イノベーション戦略 ～第4次産業革命に向けて～ 4 リスクマネジメント講演 5 2学年 オンライン講演会 スポーツの光と影 6 学際講演 外国ルーツの子供たちの現状と望む未来 7 学際リサーチ講演 プラスチック削減に向けて 8 学際リサーチワークショップ 移民・難民について 9 2年国際科 課題研究への助言 10 海外の大学との連携 アテネオ デ マニラ大学	63 64 65 66 67 68 69 70 71 72
VI	オンラインによる参加 1 オンラインによるプロジェクト参加 2 オンラインによる課題研究発表会参加 3 イオンワンパーセントクラブ アジアユースリーダーズ 2020	73 75 78
VII	成果と課題 1 WWL プログラムの検証 ～質問紙調査～ 2 令和2年度 WWL 事業取組の進捗状況の検証	81 85
資料	1 第2回 WWL フォーラム授業指導案 2 2020年度 WWL 取組一覧表 3 課題研究ポスター 4 運営指導委員会(2回)記録 5 検証委員会記録 6 文部科学省意見交換会記録 7 令和2年度教育課程表	86 95 99 100 108 110 112

WWL KOBE 構想図



WWL が育成を目指す
超未来型グローバルリーダーとは
ゆるぎない
「Neo MAKS」を持った人材

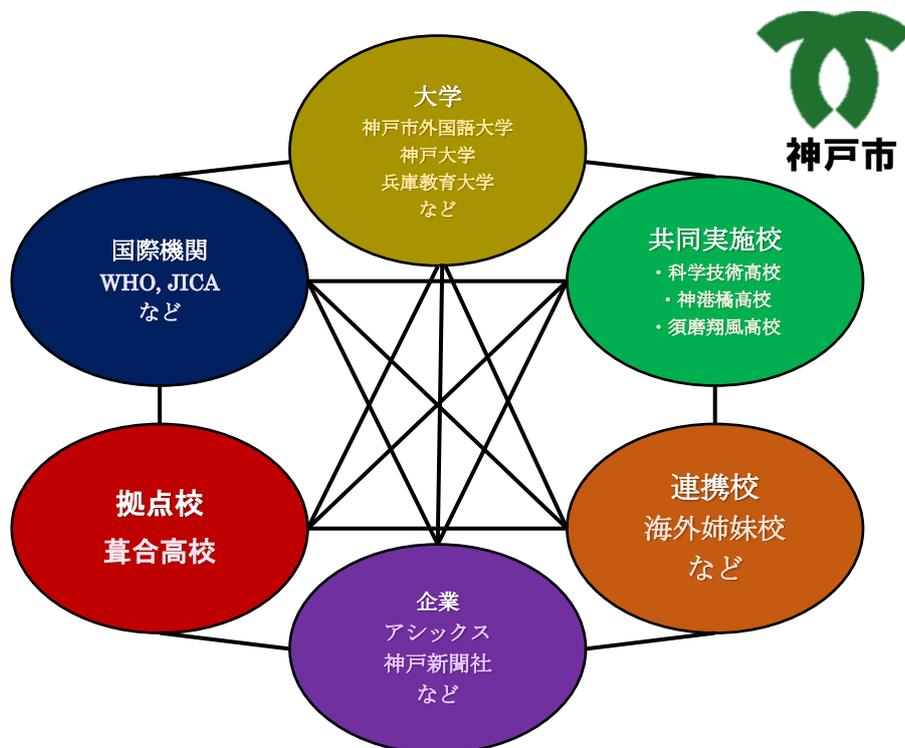
Neo MAKS 12 の力



3つのアプローチ

- 学際的学び
- 高度な学び
- 協働創造活動

AL ネットワーク図



1年の軌跡

6月

WHOオンライン講義



Global Health Development and COVID-19 Pandemic

7月

学際リサーチ 講義



移民・難民問題について



プラスチック削減に向けて

7月

WWL International Conference Online 2020 (高校生国際会議)



家庭内暴力と子ども虐待問題について



感染拡大によるメンタルヘルス問題について



経済打撃と金融支援について



情報感染とリスクコミュニケーションについて



連携校生徒とオンラインで議論の様子



1学年の生徒が参加している様子

9月～3月

企業・国内外大学との連携



IoT・AI を使って実現する新しい未来像についての講演

神戸市外国語大学との連携



中嶋先生による講義「課題研究のホップ・ステップ・ジャンプ」



西岡先生による講義「リスクマネジメント」



Dr. Cornelio によるフィリピンからのオンライン講義



野村先生による課題研究に対する評価・助言



西出先生による模擬国連についての講演

12月

WWL課題研究交流発表会



ショートプレゼンテーションの様子



分野別(Communication)の議論の様子



分野別(Education)の議論の様子



閉会式(オンライン)の様子

1月

探究の日



「子ども食堂・子ども塾」について



「社会貢献を仕事にする」について



「SDGs から考える生理的貧困とジェンダー平等」について

WWLフォーラム



「eスポーツをオリンピック競技に導入すべきか」の議論



「男女ともに働きやすい職場とは」について



家庭生活と社会についての議論



学年を超えたグループでの議論の様子



コロナ禍における「家庭内暴力と児童虐待」について

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 兵庫県神戸市中央区加納町6-5-1
管理機関名 神 戸 市
代表者名 市長 久元 喜造 印

令和2年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年4月23日(契約締結日)～令和3年3月31日

2 拠点校名

学校名 神戸市立葺合高等学校
学校長名 大野 毅

3 研究開発名

Society 5.2の世界を見据える超未来型グローバルリーダーの育成

4 研究開発概要

SGHの成果を踏まえ、新たな資質・能力を加えた「超未来型グローバルリーダー」育成を目標とする。Society 5.0において、かつて経験のない課題と対峙する局面では、普遍的な正義感を抱きながら、新しい価値観を創造できる人材が必要である。その人材にはAIなどの最先端技術を駆使しながら、新しい発想に基づく産業などを創造する力が求められているのではないだろうか。本事業では、若竹のようなしなりを有し、受容・批判・主張に対して高度なバランス感覚を保ちながら、他者との協働をリードできる人材育成を目指すものである。そのために新カリキュラムとネットワークを設定し、国内外の各機関と協力し、それらを有機的に結びつける形でALを構築することを考えている。その集大成として、「ワールド・ワイド・コンファレンス(WWC)」を開催したい。目指すはSociety 5.0にとどまらず、その先にあるSociety 5.2の世界を見据えることができる超未来型グローバルリーダー育成の場である。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① WWL 運営指導委員会の開催						15日			28日		
② WWL 推進支援チーム(委員会事務局)による支援	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
③ WWL 担当事務補助員の雇用及び葺合高校への派遣	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
④ 帰国・外国人講師等の雇用及び葺合高校への派遣	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑤ 葺合高校への ALT 配当増	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑥ インターナショナル・コンファレンスに係る支援	→	→	7・8・9日	→	→	→	→	→	→	→	→
⑦ カリキュラムアドバイザー指導	→	→	→	6日	→	22日	5・6・12日	25日			
⑧ 副市長高校授業視察							6日				
⑨ AI 翻訳事業に関わる支援					→	16日	27日	11日	22日	→	→
⑩ ニュージーランド水泳オンライン交流事業に関わる支援				→	→	3・5日	→				
⑪ バルセロナ研修に係る支援				→	→	→	→	3日			
⑫ 全国高校生フォーラムへの支援					→	→	→	20日			
⑬ WWL 課題研究交流発表会に係る支援			→	6日	→	→	→	25日			
⑭ WWL フォーラムに係る支援			→	→	→	→	→	→	28日		
⑮ WWL 検証委員会の開催									29日		

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組むための「WWL 推進委員会」を毎月開催した。また本年度、連携校、協働機関との情報共有と連携を促進するために、担当者等を招集し「神戸 AL ネットワーク会議（仮称）」を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響による臨時休業もあり、実施することができなかった。そこで臨時休業とも合わせてオンライン会議を実施するためのアカウントを各校担当者に配布するなど、環境整備を行い、7月に5つの国と地域をつないで、国際会議を実施することができた。葺合高等学校において12月25日に開催される「第2回 WWL 課題研究交流発表会」の実施にむけて、8月6日に兵庫教育大学の西岡伸紀カリキュラムアドバイザー、共同実施校教頭、拠点校担当者等を招集し、「運営委員会」を開催した。運営委員会では、本年度の発表会の実施形態や、実施方法、各校からの発表グループ数などの検討・協議を行った。9月10日にカナディアンアカデミー学長と拠点校校長が連携校の締結をし、10月には神戸市立六甲アイランド高等学校が連携校に加わった。
- b. 毎月開催される神戸市立高等学校長会において、管理機関より拠点校と共同実施校における、WWL 事業の取組の進捗状況等の情報共有がなされた。また拠点校より、連携校等への情報を共有する体制を整備した。その成果として、12月に葺合高等学校を拠点として12校をオンラインでつなぎ「第2回 WWL 課題研究交流発表会」を開催し、拠点校、共同実施校、連携校、及び近隣のSSH指定校等が共に学びの成果を発表し、交流することができた。
- c. 学校教育課長を中心に構成した「WWL 推進支援チーム」において以下のような支援を行った。(1)文部科学省からの情報の提供、(2)文部科学省へ拠点校、共同実施校の取組に関する連絡、(3)他の神戸市立高等学校・中学校への拠点校、共同実施校の取組の広報活動、(4)WWL 運営指導委員会の開催および準備、(5)WWL 検証委員会の開催および準備、(6)拠点校、共同実施校の実践に関する助言、(7)令和2年度開催の「インターナショナル・コンファレンス」「World Date Viz Challenge 2020」に向けた準備・実施、(8)オンライン環境の整備を行い、拠点校、共同実施校の取組がさらに充実したものとなるよう支援を行った。拠点校の校長は、教員に対し WWL 事業の説明会や教育研究所特別研究員による授業改善の研修会などを開催した。
- d. 「WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業実施要項」における事業の運営に関して専門的な見地から指導、助言を求めることを目的として、令和2年度は「神戸市立高等学校 WWL コンソーシアム構築支援事業運営指導委員会」を2回(第1回10月15日、第2回1月28日)開催した。運営指導委員会において、(1)事業の内容及び研究方法に関すること(2)事業の研究成果と課題に関すること(3)その他事業の目的を達成するために必要な事項に関すること等について、神戸市立高等学校の取組がさらに充実したものとなるよう、運営指導委員から助言等を得た。また、事業の実施状況を検証することを目的として、「神戸市立高等学校 WWL コンソーシアム構築支援事業検証委員会」を令和3年1月29日に開催した。検証委員会において、(1)取組の進捗状況に関すること(2)評価検証のための観点・基準に関すること(3)取組の成果に関すること等について助言を受けた。その後、検証委員に報告書を作成して頂いた。
- 検証のために、拠点校では、Neo MAKS12 の力に関する4件法を中心とした調査を1年生対象に6月と2月、2年生対象に2月、3年生対象に12月に実施した。それぞれの取組の後には、生徒の振り返りの文章を記録として残している。

- e. 卒業生が近況報告のために母校を訪れることは度々あり、中にはアメリカやイギリスなど海外の大学に入学し、グローバルに活躍している卒業生もいる。しかし、管理機関がこういった卒業生の成長過程を追跡調査する仕組の構築にあたっては、個人情報に関する神戸市のセキュリティーポリシーと照らし合わせ慎重に対処する必要があり、その方法については現在も模索中である。
- f. 神戸市教育委員会は、外国人児童生徒及び保護者等を対象に、日本の学校制度や進学などの情報について、日本の学校への就学についての悩みなどの相談に応じる目的で、「外国人児童生徒にかかわる就学支援ガイダンス」を実施した。

【財政等支援】

- a. 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの事業がオンライン実施となったため、委託費費用を行った。そのため管理機関が自己負担額として、計画段階よりさらに計上する必要性は生まれなかった。
- b. 拠点校葺合高等学校に対して、令和元年度同様に ALT の加配を継続した。
- c. 国の委託終了後も事業を継続的に実施するため、「高校生国際会議」を実施するための海外姉妹校等生徒・教員招聘費用、また神戸市の姉妹都市バルセロナ市で開催する「World Data Viz Challenge」に参加するための渡航費用等を、神戸市教育委員会及び他部局とも協議しながら予算化に向けた調整を行っている。

【AL ネットワークの形成】

- a. 令和2年度は神戸市立高等学校における拠点校、共同実施校のコンソーシアムの強化・発展を第一目標とした。具体的には神戸市教育委員会 WWL 推進支援チームの下、「運営指導委員会」を2回開催し、令和元年度の取組内容を共有し、令和2年度の課題を明確にするとともに、令和3年度の方針を協議した。また、西岡伸紀カリキュラムアドバイザー、拠点校、共同実施校担当者等を8月6日に招集し、12月25日に葺合高等学校を拠点とする「第2回 WWL 課題研究交流発表会」のオンライン実施に向けた運営委員会を開催した。
- b. **【有効な事業実施】** および **【新たな共同事業】** について
 - ・ 12月25日に葺合高等学校を拠点に「第2回 WWL 課題研究交流発表会」をオンラインで開催し、共同実施校、連携校や近隣のSSH校等が参加した。普通科、国際科、商業科、工業科、総合学科という各校の特色に基づいた研究発表をすることにより教員と生徒の学びを深めることができた。
 - ・ 科学技術高等学校と葺合高等学校が、神戸市企画調整局つなぐラボと協働し、神戸市の姉妹都市バルセロナ市とオンラインで「World Data Viz Challenge 2020」に取組み、参加生徒はプレゼンテーション動画の視聴や意見交換を通してバルセロナ市のデジタルガバメントやオープンデータの取組について学んだ。
 - ・ 葺合高等学校が、神戸市企画調整局つなぐラボ、株式会社 NTT ドコモ、株式会社みらい翻訳と協働し「神戸市ドコモ AI 翻訳実証事業」に取組んだ。
 - ・ 拠点校、共同実施校、連携校の水泳部生徒が、神戸市文化スポーツ局国際スポーツ室と連携し、「東京オリンピック競泳ニュージーランド代表選手とのオンライン交流会」を実施した。

- ・ 科学技術高等学校が、神戸市企画調整局つなぐラボ、日本マイクロソフト株式会社、株式会社神戸デジタル・ラボ、株式会社NTTドコモと連携し、神戸市にある日本三大夜景に数えられる摩耶山掬星台における課題解決に取組み、探究活動を深めている。
 - ・ 科学技術高等学校が、「防災」の授業を通して神戸市消防局などの外部機関と、化学分析の分野においては神戸市内の酒造関係企業と連携した。
 - ・ 神港橋高等学校が、神戸市兵庫区役所と連携し「兵庫区未来会議」に参加し兵庫区の課題解決に取り組んだ。
 - ・ 神港橋高等学校が、ブレーンヒューマニティなどのNPO団体と協力し課題研究の授業充実を図った。
 - ・ 須磨翔風高等学校が、「教育」という教科の特長を活かし小学校や幼稚園との連携を図るなど、生徒のキャリア教育の充実を図った。
 - ・ 六甲アイランド高等学校が、神戸市東灘区との連携を図り探究活動へとつなげる構想である。
- c. 令和2年度は、IT企業のOPTiM、国際保健機関のWHO神戸センター、国内の大学やフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学、さらに多文化共生社会の推進を支援するNPOなどによる対面やオンラインの講義を提供することができた。生徒たちは、AIを効果的に活用する改革、新型コロナウイルスの世界への影響、SDGsが投げかける社会課題とその解決への実践を学び、社会の問題を自分ごととして考える機会を得た。令和元年度は、JICAのインターンシップやフィリピンでのフィールドワークを通して、視野を広げ考察を深めることの大切さを知った。自分のテーマをもって課題研究を進め、拠点校を中心とするALネットワーク運営組織が企画した高校生国際会議（5つの国と地域をつなぐ）で、海外の同年代の高校生と意見交換をし、自分たちができる問題解決への行動計画を作成した。拠点校の修了生たちは一連のプログラムに参加することで、国際的社会課題に強い関心を持ち、大学では国際関係、経済、法律分野を学び、将来はその専門分野を海外留学によって深めることのできる進路選択をしていると考えられる。令和2年度はコロナ禍のため、海外の大学を目指した生徒も大半は国内の大学への進学に変更した。令和2年度の修了生は、この完了報告書作成段階ではまだ進路が確定していないため、令和元年度の修了生（1・2年時SGH、3年時WWLの78名）を取り上げると、国内外のSG大学、並びに海外の大学への進学者数は34名（44%）であった。共同実施校においても複数名の生徒が、このALネットワークを介しての学びが、生徒の進路選択に大きな影響を与えたという回答を得た。
- d. 兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀氏をカリキュラムアドバイザーに委嘱し、拠点校及び共同実施校に対して定期的に研修・協議・指導助言を仰いだ。令和2年度から拠点校で開始された学際的科目「学際国語」と「学際リサーチ」への指導助言及び拠点校、共同実施校、連携校における課題研究の指導等の機会を設定した。
- e. 令和2年7月に行ったWWL International Conference Online 2020では、拠点校とスウェーデン、オーストラリア、台湾、フィリピンの姉妹校、カナディアンアカデミーの教員と生徒をオンラインで繋ぎ、「リスクマネジメント-新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた」をテーマに5つの分野に分かれてディスカッションを行った。その準備として、休校期間中の5月からメールやインターネットの掲示板を利用して、調査研究やプレゼンテーションの準備を進めた。オンラインの時間は2時間と制限があったので、プレゼンテーションは事前にMicrosoft Teamsを活用して6校間で共有した。2学期からは、会議で話し合われた解決策を具体的に行うAction Planを作成し、神戸市副市長が来校したときには、高校生による経済支援やDVの防止について英語で発表を行った。

- f. 令和2年度の拠点校、共同実施校、連携校の取組教員や生徒の間で学び合う機会を設定することと、連携機関に発表することを目的に1月に第2回WWLフォーラムを拠点校で開催した。5・6限目は学際的科目である、「家庭基礎」（1年）「情報の科学」（1年）「グローバルスタディーズIA」（1年）「グローバルスタディーズII C」（2年）、令和2年度から開始された「学際国語」「学際リサーチ」の計6科目の授業を公開した。7限目は探究活動の発表として、1年生は、総合的探究の時間の取組み、2年生は「グローバルスタディーズII B」「学際国語」「学際リサーチ」で取組んだ課題研究、3年生は国際会議の議論とその後の活動について、共同実施校3校と連携校1校も参加し、3つの発表の後はグループディスカッションを行った。令和2年度は緊急事態宣言下の開催のため、公開人数を限定して実施した。
- g. コロナ禍のため4・5月は学校が休校になり、令和2年度は国内外の大学・国際機関・企業・自治体・NPOなどに講義やワークショップを依頼できるか心配したが、学校再開直後の6月下旬にWHO神戸センターの茅野医務官に”Global Health Development and COVID-19 Pandemic”というタイトルで英語によるオンラインの講義をしていただき、生徒から予定時間を超えて質問が続いた。ALネットワークを継続発展させるために、IT企業（株式会社OPTiM）による講演会やオンラインワークショップ（Google主催）を実施した。令和2年度の講座は対面とオンラインを併用して、国際機関2講座、国内大学10講座、海外大学3講座、企業2講座、自治体5講座、NPO3講座の計30講座を開催することができた。さらに1年生対象には「探究の日」を設定し、グローバルな課題解決に取組み、国際機関、企業、NPOや自治体による対面やオンラインでの13講座を開講した。
- 拠点校が企画運営した高校生国際会議（WWL International Conference Online 2020）はオンラインで、5つの国と地域の合計175名の生徒が参加し、WWLフォーラムでは、共同実施校生徒も参加した。多様な分野の発表を聞き、考察を深めることができた。また、拠点校主催のWWL課題研究交流発表会の開催にあたっては、11校と事前の情報共有と綿密なりハーサルを行い、当日はインターナショナルスクールを含め生徒160名が、オンラインでの発表とディスカッションに取り組むことができた。今後もオンラインと対面のそれぞれの良さを活かしたハイブリッドのネットワーク運営の可能性を探っていきたい。
- h. ・神戸市は、国立大学法人神戸大学と連携協定を、甲南大学、神戸学院大学とは包括連携協定を締結している。
- ・葺合高校は、ウエストボーングラマースクール（オーストラリア）、グローブアカデミー（スコットランド）、サマミッシュ高校（アメリカ）、フェニックス高校（スウェーデン）、臺中市立臺中第一高級中等學校（台湾）と、姉妹校協定を締結している。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目												
拠点校	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
①学際的カリキュラム ・マネジメント 学際的科目実施 1年：探究・家庭基礎・ 情報の科学・GS IA 2年：探究・学際国語 ・学際リサーチ GS IIB ・GS IIC 3年：探究・GS IIC		授業開始		学際カリ キュラム 教員研修	探究講義 (1年)		リスクマ ネジメン ト講義(1 年) 学際カリ キュラム 教員研修		探究の日 (1年) WWL フ ォーラム (学際的科 目公開) 探究発表 (1,2,3年)			
②事業共同実施校・連 携校とのネットワー ク作り				課題研究 合同研修	カナディ アンアカ デミー連 携協定	六甲アイ ランド高 校連決定		WWL 課 題研究交 流発表会	WWL フ ォーラム 生徒発表			
③社会に開かれた高度 な学びのネットワー クの構築		国際機関 (WHO)オ ンライン 講義(2,3 年)			AI 企業講 演(2年) NPO 講演 (2年)	大学(兵教 大)リスク 講演 (1年) 神戸市 AI 翻訳プロ ジェクト	大学(兵教 大)課題研 究(1,2年) 大学(神外 大)課題研 究(2年)	NPO 講演(1年) 大学(神外 大)英語ス ピーチ講 演(1,2年)	探究の日 国際機関 企業 NPO 等 19 機関 (1年)	NPO 講演 (1年)自治 体 WS(1 年)	海外大学 (アテネオ デマニラ) 教授講義 (1,2年)	
④協働グローバル創造 事業 (全てオンライン)			IC(海外姉 妹校4校, 国内連携 校1校)				Focus(立 命館宇治 高校)6名	アジアユ ースリー ダーズ(イ オン)3名 WWL 課 題研究交 流発表会 (12校参 加)	神戸コミ ュニティ フォーラ ム (1,2,3 年)	Focus(立 命館宇治 高校)4名	探究甲子 園(関学)3 名 国内フォ ーラム(広 島県教育 委員会)3 名	
⑤「Neo MAKS」カ の検証(事業毎に振り返り)	調査(1年)							比較調査 (3年)	調査(1,2年) 分析・検証			

IC(インターナショナル・コンファレンス) WS(ワークショップ)

(2) 実績の説明

- a. 本事業では社会的課題全般である「リスク」を共通テーマとし、探究活動、学際的科目、国際ショナル・コンファレンス等でそれぞれテーマを設定した。特に令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大における「リスクマネジメント」が中心テーマとなった。7月に開催したオンラインによる高校生国際会議（WWL International Conference Online 2020）では「リスクマネジメント - 新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた」をテーマに「情報」「経済」「教育」「健康」「人権」の分野におけるそれぞれの国や地域の課題について情報共有し、個人、地域、政府、国際レベルで取り組むべき解決策について議論した。12月の第2回 WWL 課題研究交流発表会は「リスクマネジメント - コロナ禍における高校連携」をスローガンとし、ディスカッションのプログラムでは、「環境」「科学」「福祉」「教育」「ビジネス」「防災」「Education」「Communication」の8つをテーマとして設定した。
- b. イノベティブなグローバル人材に必要な資質の育成を養うカリキュラムとして学際的科目と探究活動について研究を進めた。令和元年度実施の学際的科目（「家庭基礎」「情報の科学」「グローバルスタディーズ」）に、令和2年度からは「学際国語」と「学際リサーチ」が加わり、西岡伸紀カリキュラムアドバイザー同席の研修会は2回実施された。8月の管理機関主催の研修会では、シラバスやコロナ禍における実践について協議を行った。11月は、同アドバイザーによる「学際国語」と「学際リサーチ」の授業参観の後に、研究協議を行った。1月に実施した第2回 WWL フォーラムでは、6科目（「家庭基礎」「情報の科学」「GSIA」「学際国語」「学際リサーチ」「GS IIC」）の公開授業を実施した。GS IIC では、グローバルマインドを育成に寄与する模擬国連のカリキュラム開発を神戸市外国語大学の西出教授の助言を受けながら行った。
- c. 設定したテーマと関連した外国語や文理両方の複数の教科融合内容を扱う学校設定科目
 - (ア) グローバルスタディーズ IA (GSIA)

2年生で行う課題研究に向けた基礎学習を行う科目で、「言語」「宗教」「人口」「教育」「文化」「経済・産業」「環境」を題材とした。日本人英語教員と ALT が担当した。
 - (イ) グローバルスタディーズ IIB (GS IIB)

SDGs の 17 の目標より絞り込んだ5つの分野（教育、環境、健康、福祉、人権）から、各自が関心のあるテーマを選び、課題研究に取り組み論文作成を行った。英語科教員、ALT、外国人講師等が担当した。また、ポスター作成やプレゼンテーションも実施し、校外外での発表に向けての指導も担当教員が行った。
 - (ウ) グローバルスタディーズ IIC (GS IIC)

地歴公民科教諭、英語科教諭と ALT の 3 名が担当する学際系の学校設定科目である。生徒が複眼的な視野を育成し、社会の問題解決を目指して、主体的に学び考える日本語と英語による授業を展開した。政治・経済・環境・人権・教育に関する諸問題をテーマに取り上げ、考察してきた。また、オーストラリアオリンピック委員会主催による交流プログラム「オーストラリア・オリンピック・コネクト 2020」を姉妹校のオーストラリアのウエストボーングラマースクールと協働で取組んだ。
 - (エ) グローバルスタディーズ IIIC (GS IIIC)

英語科教諭3名とALT2名が担当する3年生対象の選択科目である。7月のWWL International Conference Online 2020では“Risk Management: International Cooperation during the COVID-19 Global Crisis”をスローガンに「教育」「健康」「経済」「人権」「情報」をテーマにプレゼンテーションの準備を行った。会議の後は、ポスターの作成や啓発のプレゼンテーションを行うなど、問題解決のために実際に行動を起こした。コロナ禍において、国際協力の重要性が高まっていることを鑑み、10月から「武器輸出」を議題に模擬国連に取り組んだ。

(オ) 学際国語

学際国語は、令和2年度初めて開講された。2年生普通科英系・文系の生徒全員を対象とした。文理融合、教科横断的な学びを念頭に置きながら、テーマを「リスクマネジメント」に設定した。国内外には多くの「課題（リスク・禍）」が存在するが、それを他人ごとではなく「自分ごと」として受け止め考える姿勢を培うことを目的とした。令和2年度は国内外における「課題（リスク・禍）」について、日本語で書かれた文章または資料を総合的に読解し、また新たな視点からそれらの問題を考察できるよう、多様な方法知の習得にも取り組んだ。主体的・対話的で深い学びとなるよう、いわゆる講義型は少なくし、ペアワークやグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等、生徒たちが活動の主役になることも目指した。

(カ) 学際リサーチ

学際リサーチは教科「学際」として、令和2年度初めて開講した授業であり、2年生普通科英語系、文系生徒対象の選択科目である。教科「学際」の目標はイノベティブでグローバルなリーダーに必要な新しい価値観を創造する力を複数科目で育成することである。また科目「学際リサーチ」の目標は、人権、環境、経済に関するテーマについて、社会的視野と科学的視野から考察することにより、人権問題や環境課題、経済問題に対しての本質的な解決方法を考え、社会に提案することであった。

- d. 令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大により、カリキュラムの一部として海外研修を実施することができなかったが、新型コロナウイルスを「リスク」の題材とし、海外姉妹校（オーストラリア、台湾、フィリピン、スウェーデン）と国内連携校のインターナショナルスクールと7月にオンライン会議を行った。実際の国際会議は国際科3年生が中心であったが、1，2年生は、探究活動の一環として日本語で議論に参加した。
- e. 文理融合テーマを扱う学際的科目として「家庭基礎」（1年）と「情報の科学」（1年）に加え、令和2年度から普通科2年生対象に「学際国語」と「学際リサーチ」が開始された。また、国際科では、「グローバルスタディーズ」（1～3年）が学校設定教科として展開されている。「総合的な探究の時間」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、フィールドワーク等の計画変更を余儀なくされたが、多くの科目で新型コロナウイルスに関する探究活動が実施された。ALネットワークを活用し、3年生は国際科と普通科理系を対象にWHO 神戸センターテクニカルオフィサーによるコロナに関するオンライン英語講義“Global Health Development and COVID-19 Pandemic”、2年生対象にAI企業OPTiM ジェネラルマネージャーによる「IoT・AIを使って実現する新しい未来像」の講義、1年生対象に「探究の日」に国際機関や企業、NPOなど13の団体による講義やワークショップを開催した。

学年	学際的科目	
	必修	選択
1	総合的な探究の時間 家庭基礎 情報の科学 グローバルスタディーズ IA (国際科)	
2	総合的な探究の時間 学際国語 (普通科：英系・文系) グローバルスタディーズ IIB (国際科)	学際リサーチ (普通科：英系・文系) グローバルスタディーズ IIC (国際科)
3	総合的な探究の時間	グローバルスタディーズ IIIC (国際科) 学際フードデザイン (普通科：文系)

f. Society 5.2 (Society 5.0 の先) で必要とされる力 (Neo MAKS) を育成するために、「学際的学び」「高度な学び」「協働グローバル創造活動」を展開した。「高度な学び」と「協働グローバル創造活動」は対面とオンラインを組合せて継続実施した。専門家による講義やワークショップは、学際的科目や探究活動の一環として、オンラインで10回、対面で20回実施した。

7月の高校生国際会議 (WWL International Conference Online 2020) では、海外姉妹校の参加は4校 (例年は5校) となったが、拠点校のドイツ人留学生 (新型コロナ感染拡大のため留学途中で帰国のためドイツから参加) や新たな連携校となったインターナショナルスクールのカナディアンアカデミー教員、生徒が参加した。過去4回の国際会議では議論には国際科生徒のみの参加であったが、令和2年度は拠点校の普通科1、2年生にも対象を広げた。国際科3年生が橋渡し役となり、日本語で議論に取り組んだ。12月の第2回 WWL 課題研究交流発表会は、共同実施校、連携校や近隣の高校の12校が参加し、プレゼンテーションを行った。令和元年度より、発表テーマはより多様化し、英語での発表の割合も高くなった。ディスカッションのファシリテーターも拠点校だけでなく、2校の共同実施校の生徒たちが、8つの内4つの分野を担当するなど、運営の面でも協働が進化した。1月の WWL フォーラムの探究発表にも共同実施校3校、連携校1校の生徒が発表者として参加し、意見交換にも加わった。

1月の神戸コミュニティフォーラム (神戸市国際課主催) は外国人も含めた神戸市民が英語で語り合うことを目的としており、オンラインで実施された。トピックは「やさしい日本語」で、講義を聞いたのち、拠点校の生徒8名がディスカッションのファシリテーターを務めた。

事業名 (参加)	日程	主な活動や必要な資質	Neo MAKS
高校生国際会議 (拠点校、海外連携校4校、国内連携校1校)	7/7-9	司会・運営・発表・意見・交換 交渉・提案・時間・管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑨⑩⑫
WWL 課題研究交流発表会 (拠点校、共同実施校3校、 国内連携校3校、近隣5校)	12/25	司会・運営・発表・意見・交換 交渉・提案・時間・管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑧⑩⑫
WWL フォーラム (拠点校、共同実施校3校、国内連携校1校)	1/28	発表・意見交換・交渉・ 提案・時間管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑧⑩⑫
神戸コミュニティフォーラム (拠点校)	1/23	司会・運営・発表・意見・交換 交渉・提案・時間・管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑨⑩⑫

- g. 連携大学の1つである神戸市外国語大学と、第2言語について先取り履修の可能性について協議を行った。
- h. 国内外で行われる課題研究やオンラインプログラムを紹介し、参加に向けての指導や、オンラインの環境を整備した。「AI翻訳プロジェクト」等の産官学の連携プロジェクトを通してより高度で先進的な学びを提供した。

オンライン プログラム (主催)	日程	参加人数等
高校生国際交流の集い2020 (関西学院大学)	8/11	2名 2位入賞
2020年度夏季高校生グローバルスクール (東京外国語大・東京農工大・電気通信大)	9/20-21	1名
第3回全国高校生SRサミット FOCUS (立命館宇治高校・立命館大学)	11/14-15	2組
Google Mind the Gap (Canadian Academy)	11/17	4名
リサーチフェア (関西学院大学)	11/21	6名 実行委員会特別賞
イオン1%アジアユースリーダーズプログラム (イオン)	12/17-19	3名
One World Festival for Youth (関西 NGO 協議会)	12/20	3名 優秀賞
リサーチフェスタ (甲南大学)	12/20	8組 クリエイティブテーマ賞
全国フォーラム (文部科学省)	12/20	5組
Google Mind the Gap オンラインプログラミング	1/12・18	3名
WWL・SGH×探究甲子園 (関西学院大学他)	3/21	3名
広島県における WWL コンソーシアム構築支援事業 国内フォーラム (広島県教育委員会)	3/27	3名
The Global Enterprise Challenge	3/28	2組

産官学プロジェクト	主催	日程	参加人数
AI翻訳プロジェクト紹介	神戸市企画調整局	10/16	8名
みらい翻訳 演習	拠点校	10/31,11/13	8名
AI翻訳ワークショップ	みらい翻訳、NTT	11/27	8名
オンラインインターン	みらい翻訳	12/11	13名
AI翻訳アプリオンラインワークショップ	NTT	1/22	9名

- i. 毎年ヨーロッパなどから年間に2～4名の長期留学生を受け入れているが、令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大により、留学生の受け入れは実施されなかった。
- j. 海外姉妹校との交流以外に、「日本文化紹介」の授業ではイランの女子高校の生徒と文化について、「総合英語 IB」の授業ではインドの高校とアメリカのテキサス州の高校と Feature Writing の合同プロジェクト学習を実施した。有志生徒により、フランスの高校と日本語による手紙交換も行った。新型コロナウイルス感染拡大による世界的危機の中、国際交流を継続する努力を続けた。

8 目標の進捗状況, 成果, 評価

- a. 令和2年度のプログラムの検証として、令和元年度に作成した Neo MAKS 力に関する質問に学際的科目や WWL 行事に関する項目を加えた質問紙調査を拠点校の3学年に行った。3年生は12月に実施し、国際科回答数77、普通科英系回答数74、理系回答数42、文系回答数13であった。2年生は2月に実施し、国際科回答数77 普通科英系回答数44、理系回答数65、文系回答数163であった。1年生の1回目は6月、2回目は2月に実施し、1回目の回答数は国際科79、普通科269、2回目は国際科76、普通科264であった。本事業の中心となる2年生を中心に分析を行った。

(1) 「学際的学び」「高度な学び」「協働グローバル創造活動」の検証

2年生対象の学際的科目の検証として、「自分の考え方や行動に影響を与えた科目や取組」について調査を行い、選択した生徒の割合を算出した(下記表①参照)。国際科2年生の「グローバルスタディーズ(GS) IIC」、普通科英系・文系対象の「学際リサーチ」は選択科目であり、それぞれ77人と18人が母数となる。「社会科」と「理科」が融合した科目である「学際リサーチ」の母数は少ないが、履修したほとんどの生徒の考え方や行動に影響を与えた科目であったことが示された。英語で課題研究を行う「GS IIB」、「社会科」と「英語科」による連携科目である「GS IIC」も、約半数の生徒が「影響を与えた科目」として選択した。「学際国語」はクラスサイズ40名の必修科目であるが、約30%の生徒が選択し、必修科目の中では高い結果となった。「総合的な探究の時間(総合)」における「学修インタビュー」は、3割の生徒が選択した。自分で主体的に取組む活動や、対話的な学びは生徒の考え方や行動に影響を与えることが示唆された。

表①「自分の考え方や行動に影響を与えた科目」として選択した生徒の割合() 母数

	科目(人)	総数	国際科	普通科英系	普通科文系	普通科理系
学 際 的 科 目	GS IIB	77	49.4%			
	GS IIC	31	54.8%			
	学際国語	200		27.3% (37)	29.4% (163)	
	学際リサーチ	16		85.7% (7)	100% (9)	
	総合	342	7.8% (77)	4.5% (37)	6.7% (163)	6.2% (65)
学修インタビュー	342	31.2% (77)	31.8% (37)	30.7% (163)	44.6% (65)	

「高度な学び」として対面やオンラインによる講義やワークショップを実施した。2年生は、20代女性によるフィリピンの貧困問題の取組やオリンピックに関する講演、1年生は認知症に関する講演が生徒の印象に強く残ったことが分かった。自分たちと近い年代や、タイムリーな話題、実生活に関係するものは「影響を与える」ことが示された。WICO2020(国際コンファレンス)は、実際のオンラインの会議を見学し、より直接的な関わりをした国際科2年生の割合が高い結果となった。また、WWL課題研究交流会は、ディスカッションファシリテーターを務めた普通科の6割強の生徒が選択しており、イニシアチブを取る経験は生徒の考え方や行動に影響を与えることが示唆された。比較対象の体育大会や校外学習の数値が示すように、体験的な行事は生徒により影響を与えることから、令和3年度の協働創造活動は生徒が深く関与できるように工夫が必要なが示された。

表② 「自分の考え方や行動に影響を与えた行事」として選択した生徒の割合 () 母数

	学年・科 総数	2年国際科 77	2年普通科 265	1年国際科 77	1年普通科 269
WWL 行事	講演会	10.4%	6.8%	9.2%	4.6%
	探究の日			36.8%	14.0%
	WICO 2020	24.7%	5.6%	1.3%	2.3%
	WWL 課題研究交流発表会	60% (15)	66.7% (6)	18.4% (24)	
	WWL フォーラム	24.7%	7.4%	18.2%	11.4%
行事	体育大会	24.7%	40.9%	36.8%	41.3%
	校外学習			42.1%	36.3%

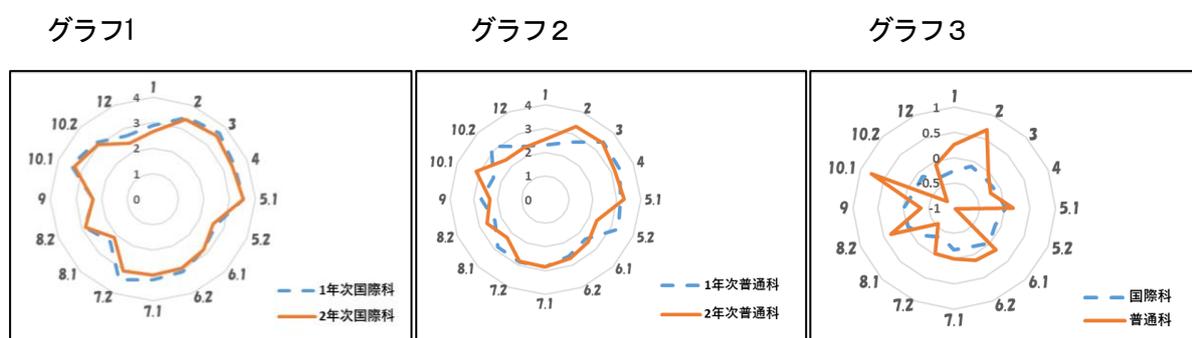
(2) Neo MAKS 力の分析

Neo MAKS 力に関する質問項目を16設定した。回答方法は1～4の4件法で、1は「あてはまらない」2「どちらかといえばあてはまらない」3「どちらかといえばあてはまる」4「あてはまる」とした。学年内の経年比較と同時期の学年間比較を平均値と値の増減値を用いて行った。下記の表はNeo MAKS 12の力と質問紙の項目番号と文面の対応表である。

	12の力	項目番号と文面
Mind	① 物事を多面的に見る力	1 物事を様々な角度から見るができる
	② 他者の痛みを理解しサポートする力	2 人には思いやりをもって接している
	③ 多様性の中で協働する力	3 複数の人数で話し合うと（一人より）良い考えが生まれると思う
	④ 経験と知識を融合させる力	4 何か問題が生じたとき、解決するために自分の知識や経験を生か（そうと）している
Attitude	⑤ リーダーシップを取り責任をもって調整する力	5.1 議論の際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる
		5.2 集団での問題解決場面では、率先してリーダー的な役割を担うことができる
	⑥ 柔軟性に富んだ問題解決力	6.1 複雑な問題に直面しても、問題の要点や構造を整理しながら考えることができる
		6.2 問題解決などで、自分のやり方が、目的に合っているのかどうか途中で確認している
Knowledge	⑦ 自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解	7.1 日本の文化や歴史について興味がある
		7.2 世界各国の文化や歴史について興味がある
	⑧ 科学的知識を活用する力	8.1 科学的に考えたり、調べたりすることに興味がある
		8.2 関心のある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を考えることができる
Skills	⑨ ICTを主体的に使う力	9 ICT(コンピューターやインターネットに関連する情報通信技術)に興味がある
	⑩ コミュニケーション力	10.1 人に伝えるときに、分かりやすく説明しようとしている
		10.2 よく知らない国の人たちと親しくなれる自信がある
Neo	⑪ 普遍的正義感	
	⑫ 新しい価値観を創造する	12 将来、新しい分野を研究したり、新しい産業を創り出したい

① 令和2年度2年生の変化（2年次と1年次の経年比較）

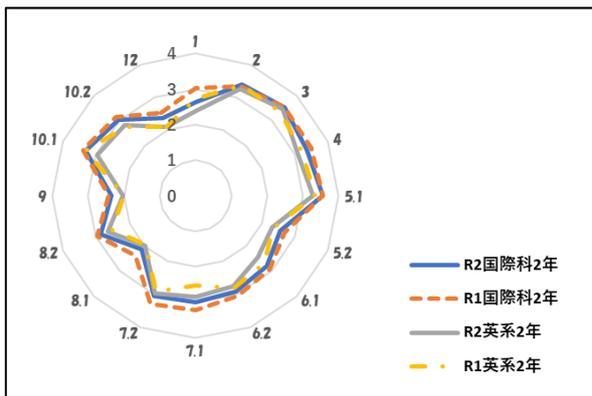
2年生の12の力を1年次と2年次の各項目の平均値の変化で検証した。グラフ1は国際科、グラフ2は普通科の1年次と2年次各項目の数値を、グラフ3は1年次から2年次の値の増減を表したレーダーチャートである。国際科は各年次間の各項目の変化は少ないが、全項目の総数値（-2.27）は下降した。普通科の総数値は0.51下降だが、いくつかの項目に変化が見られた。グラフ3が示すように、項目2、8.2、10.1が上昇した。特に8.2と10.1に関しては総合の時間や本年度から開始された学際科目での取組の効果も考えられる。一方、項目5.2、8.1、10.2は下降しており、5.2と10.2に関しては海外修学旅行などの行事が中止となり、また部活動の活動も制限があったため、リーダーシップを発揮したり、交流する機会が少なかったことが理由として考えられる。



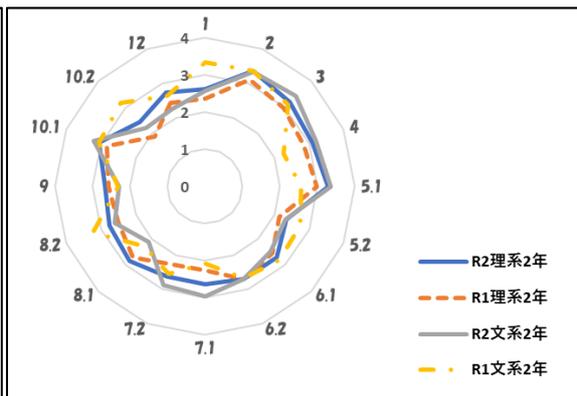
② 2年次における特徴（令和2年度2年生と令和元年度2年生の比較）

令和元年度から始まったWWL事業の2年次での効果と、新型コロナウイルス感染拡大による影響を検証するために、令和2年度2年生と令和元年度2年生の比較を国際科、普通科英系、理系、文系においてそれぞれ比較した。グラフ4は国際科と英系、グラフ5は理系、文系の令和2年度と元年度の2年次における各項目の数値を表したレーダーチャートである。国際科では項目2以外の値が下降し、総計値も2.14減少した。最も下降した項目は1(-0.39)で、物事を多面的にみる機会や経験が少なかったことが推察される。英系の総計値は微減(-0.58)であったが、項目1は国際科と同様に最も下降した(-0.34)。上昇したのは項目7.1(+0.33)であった。理系の総計値は3.87上昇し、下降した項目はなかった。理系の特徴としては項目8.1と12があげられる。専門性を活かそうとする姿勢の表れと考えられる。令和元年度2年生と比較して特に上昇した項目は10.2(0.53)、7.1(0.37)、7.2(0.35)、12(0.3)であった。文系の総計値は微減(-0.3)だったが、変動が大きいことが分かった。顕著に上昇したのは項目4(+0.9)5.1(+0.78)7.1(+0.88)で授業や体験が影響していると推察される。下降が顕著な項目は1(-0.76)10.2(-0.95)8.2(-0.63)であり、新型コロナウイルス感染拡大のため、物事を多面的にみる機会や交流の機会が前年度よりも少なかったことも原因と考えられる。

グラフ4



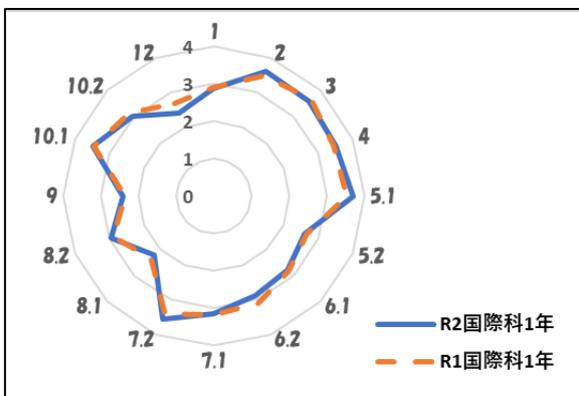
グラフ5



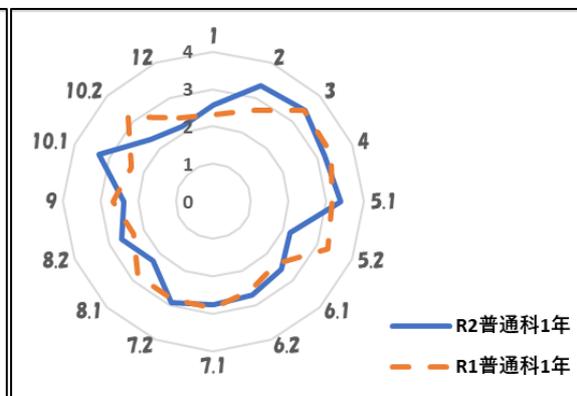
③ 1年次における特徴 (令和2年度1年生と令和元年度1年生の比較)

1年生の取組においても本年度はコロナウイルス感染拡大の影響をうけたため、令和2年度1年生と令和元年度1年生の2月の時点での調査の結果を比較した。グラフ6は国際科、グラフ7は普通科の各項目の数値を示したレーダーチャートである。国際科は総計においては-0.28の微減となったが、傾向に大きな変化はなかった。項目12の差(-0.29)が最も大きかった。普通科は、総計では-0.39の下降となったが、各年度によって数値に差がある項目が7個あり、異なる傾向が示された。令和2年度1年生の数値が高いものは項目1(+0.26) 2(+0.70) 8.2(+0.36) 10.1(+0.94)であり、総合で取組んだ探究や発表体験の影響も考えられる。令和元年度1年生の数値が顕著に高いものは項目5.2(+1.11) 8.1(+0.57) 9(+0.28) 10.2(+0.85)であり、実際にリーダーシップを発揮したり、交流する機会が確保されていたと推察される。

グラフ6



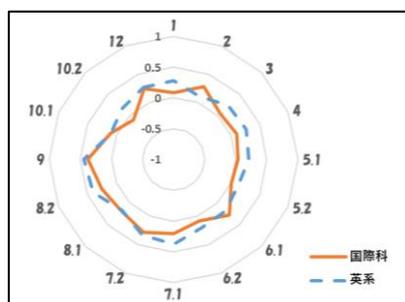
グラフ7



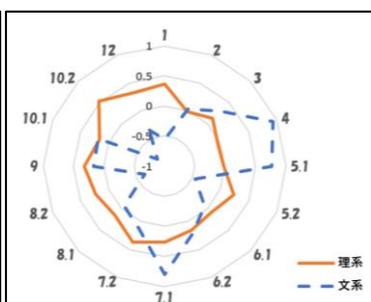
③ 3年次の特徴 (令和2年度3年生の2年次との経年比較)

最終到達点である3年生の2年次との経年比較を通して今後の展望を考察する。国際科 (+2.46) 普通科英系 (+3.86)、理系 (+3.22)、文系 (+0.57)とも総数値においては3年次に上昇が見られた。グラフ8は国際科と英系、グラフ9は理系と文系の2年次から3年次の数値の増減を表したレーダーチャートである。国際科と英系と比較すると理系と文系は項目によって差があり、特に文系が顕著である。グラフ10は各項目の数値をまとめたものである。MAKSの中のMind(人間力)は全般的に育成されているといえる。Attitude(実践力)では、調整力は備わっているがリーダーシップ力には課題が残る。Knowledge(知識)に関しては文理融合の取組、Skills(運用力)に関しては、ICT分野の取組の必要性が示された。本事業3年目となる令和3年度の3年生の結果を注視したい。

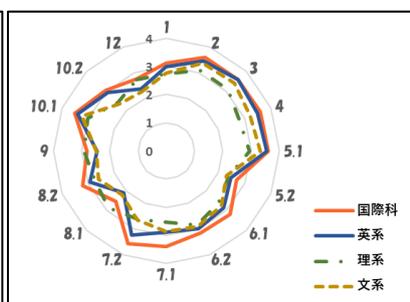
グラフ8



グラフ9



グラフ10



(3) 令和3年度の方向性

単年度のみの分析となるが、各学年において、新型コロナウイルス感染拡大による取組の制限が12の力の育成に影響を与えていることが示唆された。オンラインとオフラインを駆使した学際的協働の機会を創出することで、課題となる分野の力の育成を、ALネットワークを活用して図ってきたい。

b. ALネットワークが果たした役割等について

- ① オンラインの環境整備によるコロナ禍における協働活動の継続実施
- ② オンライン、オフラインによる「高度な学び」の提供
- ③ 拠点校や共同実施校、連携校との繋がりの方の更なる強化とそれぞれの強みの活用

c. 短期的な目標は、ALネットワークインフラ整備、カリキュラム開発、協働グローバル創造活動の実施であった。高等学校間の関係は、合同会議や事業を通じて共同体としての連携を強固なものにすることができたが、情報の共有・交換のための情報共有ネットワークの構築は、個人情報に関する神戸市のセキュリティーポリシーと照らし合わせ、慎重に対処する必要がある、令和2年度は確立することはできなかった。カリキュラム開発においては、カリキュラムアドバイザーの助言のもと、学校設

定科目「学際国語」と「学際リサーチ」を開始した。令和2年度のWWLフォーラムでは、学際的科目の公開授業、共同実施校、連携校と探究活動発表交流会を実施した。協働グローバル創造活動では、直接交流はできなかったが、オンラインの導入により、高校生国際会議を開催した。第2回WWL課題研究交流発表会では、拠点校、連携校、近隣の高校から160名の生徒がオンラインで参加し、文理融合の探究活動の発表の機会を提供することができた。

中期的な目標はALネットワークを活用した令和3年度実施予定のWWC（ワールド・ワイド・コンファレンス）の実施と探究活動の深化、学際科目のカリキュラム開発である。WWCでは、令和2年度の高校生国際会議における経験を活かし、対面とオンラインの両方を融合させた会議を想定している。全体会は座席数約2000席の神戸文化ホールにて、基調講演、高校生による共同宣言を計画している。また、産官学のプログラムも推進していく。

長期的目標は、新時代のALネットワークの構築である。事業指定終了後も成果を活かすために、カリキュラムマネジメントで開発された学際科目を新カリキュラムに反映させる。2025年に開催される大阪万博で、ALネットワークで育成した「NeoMAKS」力を駆使した高校生による神戸パビリオンの開催を目指す。

9 次年度以降の課題及び改善点

- ・大学教育の先行履修の可能性について、連携大学と管理機関との間で話し合いを今後も継続する。
- ・海外研修やフィールドワークの代替となるプログラムを検討する。
- ・WWL事業終了後も、構築されたコンソーシアムを維持し、この事業で取り組んでいた諸活動をどのように持続可能にしていくのか模索していく。

【担当者】

担当課	神戸市教育委員会事務局 学校教育部学校教育課	TEL	078-984-0716
氏名	中嶋 秀	FAX	078-984-0717
職名	指導主事	e-mail	shu_nakajima@office.city.kobe.lg.jp

1. 2020年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム

構築支援事業構想計画書(概要)

期間：2019～2021

管理機関：神戸市教育委員会

事業拠点校：神戸市立葺合高等学校

実施都道府県：兵庫県

1. 構想名

Society 5.2 の世界を見据える超未来型グローバルリーダーの育成

2. 構想概要

SGH の成果を踏まえ、新たな資質・能力を加えた「超未来型グローバルリーダー」育成を目標とする。Society 5.0 において、かつて経験のない課題と対峙する局面では、普遍的な正義感を抱きながら、新しい価値観を創造できる人材が必要である。その人材には AI などの最先端技術を駆使しながら、新しい発想に基づく産業などを創造する力が求められているのではないだろうか。本事業では、若竹のようなしなりを有し、受容・批判・主張を高度なバランス感覚で、他者との協働をリードできる人材育成を目指すものである。そのために新カリキュラムとネットワークを設定し、国内外の各機関と協力し、それらを有機的に結びつける形で AL を構築することを考えている。その集大成として、「ワールド・ワイド・コンファレンス (WWC)」を開催したい。目指すは Society 5.0 にとどまらず、その先にある Society 5.2 の世界を見据えることができる超未来型グローバルリーダー育成の場である。

3. 研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名	
管理機関		神戸市教育委員会							
事業拠点校		神戸市立葺合高等学校 (公立)						大野 毅	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	1080
		対象:	国際科	80	80	80	240	1080	
			普通科	280	280	280	840		
対象外:					0	0			
事業共同実施校		神戸市立科学技術高等学校 (公立)						高島 日出男	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	1080
		対象:	機械工学科	120	120	120	360	1080	
			電気情報工学科	80	80	80	240		
			都市工学科	80	80	80	240		
		対象外:	科学工学科	80	80	80	240		
					0	0			
①		神戸市立神港橋高等学校 (公立)						谷口 元庸	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	960
		対象:	みらい商学科	320	320	320	960	960	
							0		
対象外:					0	0			
②									
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	960
		対象:					0	960	
							0		
対象外:					0	0			

	③	神戸市立須磨翔風高等学校 (公立)					川畑 龍雄	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模
		対象:	総合学科	280	320	320	920	920
						0		
対象外:					0	0		
事業協働機関 (国内外の大学, 企業, 国際機関等)	①	神戸市外国語大学					学長 指 昭博	
	②	神戸大学					学長 武田 廣	
	③	兵庫教育大学					浅野 良一	
	④	大阪大学 高大接続部門					部門長 進藤 修一	
	⑤	京都大学東南アジア研究所					山本 博之	
	⑥	兵庫県立大学 大学院減災復興政策研究科					青田 良介	
	⑦	甲南大学					学長 長坂 悦敬	
	⑧	アテネオ デ マニラ 大学					Dr. Jayeel Cornelio	
	⑨	アシックス マーケティング統括部					マネジャー 伊藤 卓郎	
	⑩	日本イーライリリー株式会社					広報課長 仁井 幸江	
	⑪	神戸新聞社 阪神総局					総局長 金居 光由	
	⑫	WHO 神戸センター					所長 Sarah L. Barber	
	⑬	JICA 関西					所長 佐藤 恭仁彦	
	⑭	兵庫県ユニセフ協会					事務局長 福井 康代	
	⑮	神戸ユネスコ協会					会長 加藤 義雄	
	⑯	神戸市役所					市長 久元 喜造	
	⑰	KIC (神戸国際協力交流センター)					理事 伊藤 正	
	⑱	兵庫国際交流会館					館長 米川 英樹	
	⑲	アメリカ ベルビュー市消防局					防災監 Montanana	
	⑳	NPO 法人 フキックスコルプス					代表 西尾 勝	
	㉑	認定 NPO 法人 ソルトパヤタス					事務局長 井上 広之	
	㉒	認定 NPO 法人 テラルネッサンス					理事長 小川 真吾	
	㉓	Table for Two					代表 小暮 真久	
	㉔	CODE (海外災害援助市民センター)					事務局長 吉椿 雅道	
	㉕	認定 NPO 法人 Future Code BYCS					学生代表 阪口 和花	
	㉖	開発メディア Ganas					編集長 長光 大慈	
	㉗	NPO 法人 ママの働き方応援隊					理事 合田 三奈子	
	㉘	神戸親子療育サークル					代表 竹下 あきこ	
事業連携校 (国内外の 高等学校等)	①	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 (公立)					校長 永瀬 哲	
	②	台中市立台中第一高級中学校 (台湾) (公立)					校長 林 隆諺	
	③	FENIX 高校 (スウェーデン) (私立)					校長 Karin Jakobson	
	④	Westbourne Grammar School (豪) (私立)					校長 Meg Hansen	
	⑤	Sammamish High School (アメリカ) (私立)					校長 Scott Powers	
	⑥	アテネオ デ マニラ 高校 (フィリピン) (私立)					校長 Maria Victoria Panlilio Dimalanta	
	⑦	Grove Academy グローブアカデミー (スコットランド) (私立)					校長 Graham Hutton	
	⑧	Goenka Public School ゴエンカ高校 (印) (公立)					校長 Neeta Bali	
	⑨	神戸市立六甲アイランド高等学校 (公立)					校長 山根 修	
	⑩	Canadian Academy (私立)					学長 Jon Schatzky	

4. 事業体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
(1)文理融合を踏まえた拠点校の学際的なカリキュラム・マネジメントの構築	神戸市教育委員会 神戸市教育委員会 兵庫教育大学 葺合高等学校	蔵本 朗 松浦 新法 西岡 伸紀 <small>(カリキュラム・アドバイザー)</small> 長谷川 伸
(2)事業共同実施校とのネットワーク作り	神戸市教育委員会 神戸市教育委員会 兵庫教育大学 葺合高等学校 共同実施校・科学技術高等学校 共同実施校・神港橋高等学校 共同実施校・須磨翔風高等学校	蔵本 朗 西山 敏弘 西岡 伸紀 山内 紫乃 中野 由章 清家 豊 片山 健史
(3)大学・企業・自治体・国際機関等との連携を基盤とする社会に開かれた高度な学びのネットワークの構築	神戸市教育委員会 神戸市教育委員会 葺合高等学校 神戸市外国語大学 神戸大学 WHO 神戸センター JICA 関西	仲野 学 流郷 隆治 茶本 卓子 中嶋 圭介 山下 晃一 サラ バーバー 佐藤 恭仁彦
(4)事業共同実施校・国内外の連携校と実施する協働グローバル創造事業（ワールド・ワイド・コンファレンス）に向けての準備	神戸市教育委員会 神戸市教育委員会 葺合高等学校 共同実施校・科学技術高等学校 共同実施校・神港橋高等学校 共同実施校・須磨翔風高等学校	内藤 康史 中嶋 秀 仲村 智子 中野 由章 清家 豊 片山 健史
(5)超未来型グローバルリーダーに必要な資質 12 の力「Neo MAKS」による評価及び検証	神戸市教育委員会 神戸大学 兵庫教育大学 葺合高等学校	中嶋 秀 山下 晃一 西岡 伸紀 村上ひろ子

Ⅲ AL ネットワークの発展

1 WWL International Conference Online 2020

概要： 平成 26 年より毎年 7 月に 5 つの姉妹校教師と生徒を招聘して高校生国際会議を行ってきた。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、オンラインでの実施となった。4 月に令和元年度に参加した海外姉妹校に参加の可否を尋ねたところ前向きな返事であった。6 月の学校再開までに、グローバルスタディーズ III C 履修生徒と担当教員（日本人教師 3 名、ALT 2 名）がメールやインターネットの掲示板を利用して準備を進めた。オンライン環境も少しずつ整備され、Microsoft 社の Teams を使用して連携校とのやり取りを行った。時差の問題や感染対策等を考慮し、HR と総合の時間において公開会議を 2 回、放課後の 1 時間で非公開会議を 1 回実施した。国際科の 3 年生はセッションに参加し、国際科の 1、2 年生はその様子を見学した。普通科 1、2 年生も 3 年生が作成したプレゼンテーションを日本語で聞き、意見交換をすることで、間接的に参加した。

日程： 令和 2 年 7 月 7 日（火）・8 日（水）・9 日（木）

参加者： 国際科 3 年（発表・議論） 国際科 1、2 年（見学） 普通科 1、2 年（間接参加）

目的： オンラインによる交流を通じて学びの輪を広げ、日本と世界の高校生同志の繋がりを強め、世界市民としての意識を高める。

参加生徒が世界共通の課題について議論し、現在自分たちが取組む事ができる解決策を提案することによって、あるべき姿を模索し、新しい価値観を創造する姿勢を養う。

テーマ： 「リスクマネジメント」新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた

Risk Management: International Cooperation during the COVID-19 Global Crisis

分野： 1) Communication 2) Economy 3) Education 4) Health 5) Human Rights

1) **Communication** Infodemic and risk communication（情報感染とリスクコミュニケーション）

2) **Economy** Economic damage and financial support（経済打撃と金融支援）

3) **Education** Education gap in distance learning（遠隔教育における教育格差）

4) **Health** Mental health issues associated with the outbreak（感染拡大によるメンタルヘルス問題）

5) **Human Rights** Domestic violence and child abuse（家庭内暴力と子ども虐待問題）

参加高校： アテネオ大学附属高等学校（フィリピン）Ateneo de Manila Senior High School

[参加者] カナディアン アカデミー（日本）Canadian Academy

フェニックス高校（スウェーデン）Fenix High School

ウエストボーン グラマースクール（オーストラリア）Westbourne Grammar School

神戸市立葺合高等学校（日本）Kobe Municipal Fukiai High School

台中市立台中第一高級中学（台湾）Taichung First Senior High School

[ソフィア（2019 年度留学生）ドイツ在]

7月7日(木) セッション1

15:00	開会の挨拶 分野別会議 質疑応答 議論1	(5会場) 1 家庭総合実習室 2 視聴覚室 3 大会議室 4 国数教室 5 地歴教室
16:00	終了	
セッション1と並行して 2年(普通科)		
15:00	分野別 パワーポイント プレゼンテーション(国際科3年代表) 1 Communication 【情報感染とリスクコミュニケーション】 2 Economy 【経済打撃と金融支援】 3 Education 【遠隔教育における教育格差】 4 Health 【感染拡大によるメンタルヘルス問題】 5 Human Rights 【家庭内暴力と子ども虐待問題】 クラスディスカッション	
15:50	終了	

7月8日(水) 非公開セッション(各分野代表生徒)

15:00	分野別会議 セッション1のまとめ 解決策案作成	大会議室・小会議室 警報発令のため生徒(葺合) 自宅から参加
16:00	終了	

7月9日(木) セッション2

15:00	分野別 議論2	(5会場)
15:20	全体会 各分野より議論要約、解決策提案 閉会の挨拶	1 家庭総合実習室 2 視聴覚室 3 大会議室 4 国数教室 5 地歴教室
16:00	終了	
セッション2と並行して 1年生		
15:00	高校生国際会議(葺合高校のこれまでの取組) Communication 【情報感染とリスクコミュニケーション】視聴	
16:00		



接続リハーサルの様子



セッション1の様子



非公開セッションの様子



1年生の様子



セッション2の様子



- Under this situation, it was difficult to have International Conference but we could have it online and this is the first time for me to use online over the world. There were some difficulties (accidents) because of the system, but we could feel relationship all over the world. We could have meaningful discussion about COVID-19 (especially in this time). [3年生参加生徒]
- 先生方の温かな眼差しで生徒達を見守り、熱意をもって指導する姿に改めて敬服いたします。生徒たちも不慣れなオンラインによる会議をしっかりと最後までやり遂げたことは非常に良い経験だと思います。[運営指導委員]

2 WWL 課題研究交流発表会

日 程： 令和2年12月25日(金)

目 的： 文部科学省事業である「ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業（WWL）」「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の指定を受けている、または課題研究に取り組んでいる高等学校が、互いに発表し学び合う場とする。さらに、参加生徒が自分の関心のあるトピックのディスカッションに参加することで、意見交換をし、解決策を探る楽しさを体験する。今年度は初めてオンラインによる発表会を開催することで、リモートで行う高校生会議の可能性を広げたい。

参 加 校： （12校：約160名）

神戸市立科学技術高等学校	神戸市立神港橋高等学校
神戸市立須磨翔風高等学校	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
神戸市立六甲アイランド高等学校	Canadian Academy
兵庫県立神戸高等学校	兵庫県立御影高等学校
神戸大学附属中等教育学校	神戸龍谷高等学校
武庫川女子大学附属高等学校	神戸市立葺合高等学校

プログラム：

開始時刻	イベント	実施時の zoom	時間 [分]
14:00	オープニングビデオ 開会式 参加各校による学校紹介	ZOOM 0	15
14:15	キックオフ・プレゼンテーション： 「海藻に共通した透明な細胞は強すぎる光を分散させて光合成の効率を高める工夫」（横浜サイエンスフロンティア高校）	Zoom 0	15
14:30	ショート プレゼンテーション： 1 科学 2 文化 3 グローバル・経済 4 防災・保健 5 「モノ」づくり 6 環境・論理・AI	Zoom 1- Zoom 6	80
15:50	分野別ディスカッション： 1 環境 2 科学 3 福祉 4 教育 5 ビジネス 6 防災 7 Education 8 Communication	Zoom 1- Zoom8	50
16:40	閉会式 各テーマ別ディスカッション報告 講評 終わりの挨拶	Zoom 0	20

ショートプレゼンテーションの様子



ディスカッションの様子



閉会式の様子



ディスカッショントピック：

1 環境	トピック： 私たちと環境問題	日本語
2020年7月1日レジ袋が有料化となった。この影響を受け、私生活で変わったことや環境問題についての意識の変化、さらに、私たちにできる次の環境問題への対策について議論する。		
2 科学	トピック： 原子力発電所のある未来、ない未来	日本語
福島第一原発事故は世界中に衝撃を与え、日本のエネルギー政策にも多大な影響を及ぼした。地球温暖化を目の当たりにして、あなたは原子力発電の「ある未来」、それとも「ない未来」、どちらを選択するのか。		
3 福祉	トピック： コロナ禍での福祉のあり方	日本語
現在のコロナ禍での福祉の役割は大きい。三密回避、自粛と様々な制限がある中、人々がみんな幸せに元気に暮らすために私たちができることは何だろう。様々な場所において私たちができる福祉について議論する。		
4 教育	トピック： コロナ禍における修学旅行の在り方	日本語
コロナ禍の中、修学旅行が中止あるいは行き先変更になった学校が全国に沢山あります。この機会に様々な学校の生徒同士で意見交換を行いながら、理想の修学旅行について議論を深めたい。		
5 ビジネス	トピック： コロナと消費生活	日本語
新型コロナウイルスが流行し、減少した私たちの外出の機会は、飲食業や娯楽施設などの経営に打撃を与えている。私たちが日本に住む者として、どのように経済に関わっていくべきなのかを議論する。		
6 防災	トピック： コロナ禍での災害対応	日本語
近年、甚大な大雨や台風による水害が頻発している。特にコロナ禍では、避難環境や SNS を用いた情報発信など避難におけるガイドラインが問われる。高校生として、コロナ禍での避難のあり方について議論する。		
7 Education	トピック： 創造性を育てる日本の教育改革	英語
グローバル化・AI化の急速な進展で、知識習得に重きを置いてきた日本の教育は大きな改革を迫られている。今後、高等学校で創造性（新しいものを生み出す力）を育てるためには、どのような学びが必要かを議論する。		
8 Communication	トピック： リスクコミュニケーション	英語
人々はメディアからの情報に翻弄されている。特にコロナ禍では、SNSによる偽情報の拡散により、買占めや誹謗中傷といった問題が起こった。SNS世代である高校生として情報への向き合い方について議論する。		

参加者のふり返り

事前準備・当日に努力したことや工夫したこと

- ・防災について、皆さんにしっかりと説明できるように詳しく調べ直した
- ・オンラインで声が通るようにしっかりと原稿を読み込んだ

オンライン開催によるショートプレゼンテーション、ディスカッションで参考になったこと、難しかったこと

- ・ショートプレゼンテーションでは、パワーポイントの使い方や話し方などが参考になりました。ディスカッションでは、自分の研究のテーマでもある防災だったので自分の研究にいかしたいです
- ・限られた時間で話をまとめたり、相手に的確に伝えられているからかオンラインじゃ伝わりにくく難しかったです
- ・オンラインで発表することに慣れていないので、接続に時間がかかった学校があった

WWL 課題研究交流発表会を終えて、興味が出たこと、今後取り組みたいこと

- ・物事を色々な観点で見ること
- ・映画監督のプレゼンを聞いて、世の中の男女格差についてもっと知りたいなと思いました
- ・オンラインでもできることはあるなと実感しました
- ・卒業してもこのようなイベントに参加したいと感じました

3 第2回 WWL フォーラム

目的：学際的科目の研究発表及び共有

「学年を横断し、共同実施校、連携校生徒との協働活動を通して、新しい価値や社会を主体的に創造していくことができるグローバルリーダーの育成」

日時：令和3年1月28日（木） 13:00～16:00

会場：5限 学際的科目公開授業①

6限 学際的科目公開授業②

7限 探究活動発表（1・2年各HR教室）

参加校：科学技術高等学校・神港橋高等学校・須磨翔風高等学校・六甲アイランド高等学校・葺合高等学校

プログラム

13:00 5時間目 公開授業（学際的科目）

- ・ 学際国語 2年3組 国数講義室（藤井 福岡）
『デパート～eスポーツをオリンピック競技に取り入れるべきである。是か非か』
- ・ 家庭基礎 1年7・8組 総合実習室（伊知地）
『これからの家庭生活と社会』
- ・ GSI A 1年2組 CALL1（仲村 エラン）
『リサーチプロジェクト』

14:00 6時間目 公開授業（学際的科目）

- ・ 情報の科学 1年1組 第1コンピュータ室（高橋義）
『スクラッチを使ったプログラミング』
- ・ 学際リサーチ 2年3・8・9組選択者 選択D（定時 妹尾）
『with コロナ時代を生きる私たちに求められるもの、求められること』
- ・ GSI C 2年1・2組選択者 CALL2（森下 北風 アイザック）
『コロナ禍に行われる東京五輪に対する私たちの提言』

15:10 7時間目

探究活動発表（各学年交流）

- ・ 1年探究（6グループ）
- ・ 2年学際国語/GSI B/学際リサーチ（6グループ）
- ・ 3年 GSI C（2グループ）
- ・ 共同実施校課題研究（4グループ）

1年 探究

1学期には「Self Research」という題のもと、自分を見つめ直す活動を行った。友人や家族等周りの人に「自分」がどう見えているか尋ねたり、「自分」を客観的に見てどういう人間なのか、何が苦手でどういうことが課題なのかを考えた。始めはグループで発表し、代表者がクラスで、最後はクラス代表者9名がフェニックスホールで発表を行った。他人の発表を通して友人についてより深く知り、「自分」への理解も深まった。2学期には「みなさん、ここがおかしいと思いませんか」という題のもと、今度は自分でなく、社会へ目を向けた。社会の「おかしい」と思う所を見つけ、共有した。発表の流れは1学期と同様で、発表を通して他人がどのように社会を見ているか、ものの見方は1つでなく、多様であることを学んだ。

2年 GSI B (2A, 2B)

SDGsの17の目標より絞り込んだ6つの分野（教育、環境、健康、社会福祉、人権、防災）から、各自（基本的には2人組で取り組むことを推奨）が関心のあるテーマを選び、英語で論文作成を行った。今年度の課題研究は、休校期間を含んだ1学期に研究の背景とリサーチクエスションの設定、2学期は1学期の内容に加え、集めたデータとその分析、

3学期は研究をまとめたポスター作成や授業内プレゼンテーションも実施した。

2年 学際国語 (2C, 2D)

国内・世界における「課題」について、日本語で書かれた文章または資料を総合的に読解し、新たな視点からそれらの問題を考察した。さらに、より俯瞰的な観点を育むべく、自らが設定したテーマの分析に取り組んだ。

2年 学際リサーチ (2E, 2F)

科目の目標は人権、環境、経済に関するテーマについて、社会的視野と科学的視野から考察することにより、人権問題や環境課題、経済問題に対しての本質的な解決方法を考え、社会に提案することである。1学期には、3つのテーマについて社会科教諭、理科教諭による講義の後、各自がリサーチした情報をもとに、議論を行った。2学期には「My Research」として、興味関心のあるテーマを選び、科学的視野や、社会的背景などの観点を取り入れ、調査、分析し現状や課題について発表を行った。3学期は「My Research」で調べた問題点や課題について、その解決策についてポスタープレゼンを行った。

3年 GSIII C (3A, 3B)

7月のWWL International Conference online 2020に向けて、「コロナ禍における国際協力のあり方」について、5分野（Communication, Economy, Education, Health, Human Rights）に分かれて、プレゼンテーションを作成し、国内外の姉妹校と会議を行うために準備を進めた。Economy チームは“Economic damage and financial support” Human Rights チームは“Domestic violence and child abuse” についてそれぞれ議論し、解決策を提案した。9月からは、会議の内容を反映させた。Action Plan を作成し、提案の実現に向けて活動した。

【探究活動発表内容】

1 A	「MAESTRO～夢から見つめる 自分の姿～」 笠原 (1-4)	2 A	「女性管理職を増やすための提案」 英語 手束・西村 (2-1)	3 A	「コロナ禍における経済政策の提案」 英語 赤松(3-2)
1 B	「無能による『脱』無能論」 丹治 (1-7)	2 B	「男性の育児休暇取得を増やすための 提案」英語 井本・辻本 (2-2)	3 B	「コロナ禍におけるDV問題」 小島・高藤 (3-1)
1 C	「夢を追い続ける」 松田 (1-9)	2 C	「コロナ禍におけるSDGs 私もやっ てみた買い物編」 木下 (2-7)	3 C	「ドラマの主題歌がもたらす経済効果につ いて」 後藤 (須磨翔風)
1 D	「お札の顔の向き」 古川 (1-1)	2 D	「シャンプーから始めるSDGs～エ シカル消費と環境配慮～」 楠本 (2-7)	3 D	「台湾と神戸のスイーツを通じた友好」 谷崎 (神港橋)
1 E	「女子の『カワイイ』はなぜ男子 と違うのか」 神山 (1-2)	2 E	「男女ともに働きやすい職場とは」 内田 (2-8)	3 E	「マツモと廃木材より合成したバイオエタ ノールを用いた塩害解決法」 小松・辰巳 (科学技術)
1 F	「睡眠時間について」 田中 (1-9)	2 F	「近眼を増やさないために」 東島 (2-9)	3 F	“Learning from disasters –Reconstruction –” 英語 陳 (六甲アイランド)

○感想（教員）

- ・神戸市立高等学校の各校のそれぞれの視点での成果を交流させることは生徒にとって良い機会となった。
- ・「工業」の専門高校の内容は「探究」とはここまで深めることができるのかと実感できた。
- ・自分の興味あることを話す生き生きとした様子が頼もしく、これからの世の中で求められる「力」を身につけられる大切な機会となった。

○感想（生徒）

- ・人前に立って発表する機会はあまりないので貴重な経験になりました。どのクラスの人もちょうんと話を聞いてくれてとても発表しやすく、ディスカッションでも様々な意見や提案を聞くことができ、良かったです。
- ・普段関わりが少ないからこそ、知ることも多く、特に他校の方と交流するのは良い刺激になった。
- ・発表している生徒の年齢に近いこともあり、みんな親近感をもって聞いていたと思いました。ディスカッションの時も2年生、1年生関係なく意見を出し合うことができている良かったですと思いました。

4 全国高校生フォーラム

日 程： 令和2年12月20日（日）13:00～16:00

主 催： 文部科学省、(SGH・WWL 幹事管理機関)筑波大学東京キャンパス事務局

開催方法： ウェブ会議システムによるオンライン開催

目 的： SGH 事業及び WWL 事業に取り組んでいる高校生がオンラインにより一堂に会し、日ごろ取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案などを話し合うとともに、英語でのポスター発表を映像により発信する。

参 加 者： 国際科 2年生2名 及び本校の連携校であるスウェーデンのフェニックス高校の生徒2名参加
(全国・海外より SGH 指定校・SGH アソシエイト校、WWL 拠点校共同実施校・連携校の 65 校が参加)

プログラム： 13:00 ～ 13:10 開会式

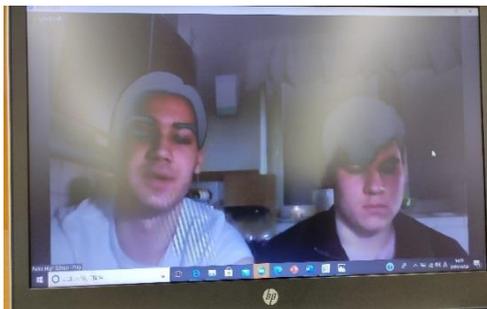
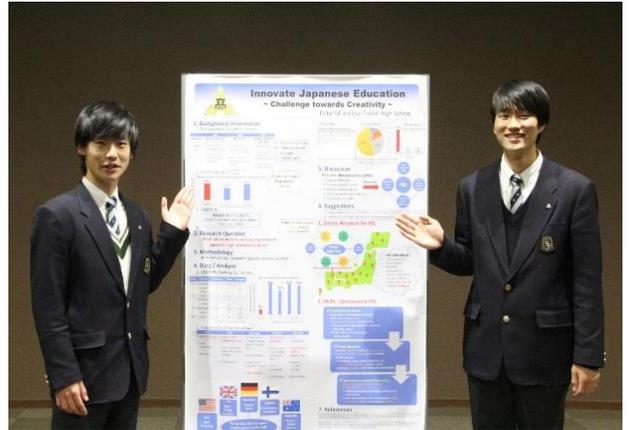
13:10 ～ 14:35 参加生徒交流会（テーマ別分科会）

学校紹介と問題提起 → 自由討議 → 振り返り → まとめ

14:40 ～ 16:00 総会 各賞の発表および動画紹介・配信、講評、総評、閉会式

全国高校生フォーラムに先立ち、各校から代表生徒の課題研究ポスターの内容を英語で4分にまとめたプレゼンテーション動画を投稿した。評価の観点は、「課題設定の適切さ、研究方法の適切さ、提案性、英語のプレゼンテーション能力など」と公表された。本校の代表である国際科2年生の2名は、“Innovate Japanese Education ~ Challenge towards Creativity~” というタイトルで「創造性を育てる日本の教育改革」について発表した。

さらに当日は、地球規模の課題について英語でわかりやすく議論をする力や積極性を養うためのテーマ別のディスカッションが開催された。筑波大学の渡部宏樹先生のファシリテーションのもとで行われた「社会的環境と生活」分野の分科会（SDGs ④⑧⑩⑯のゴールを目指す）では、「質の高い教育をみんなに」等のテーマについて、渋谷教育学園渋谷高等学校、大阪府立豊中高等学校など8校の代表生徒と、英語で質疑応答や意見交換を行った。ふたりは「ディスカッションでは、自分たちの研究に対する意見を交換でき、教育改革について他校の方々といろいろな角度から考えを述べ合い、視野を広げることができたので、今後の研究に役立てたい。」と大きな刺激を受けたと語った。



葺合高校の連携校として参加したスウェーデンのフェニックス高校は、“Sustainable Nature In Sweden – a Life Dependent Resources to Solve Global Supply of Water, Energy, the Oceans Climate and Ecosystems”（スウェーデンの持続可能な自然—水やエネルギー等の生命が依存する資源、海洋性気候、生態系）についてポスター発表をした。当日のディスカッションでは「自然環境と生活」の分科会に割り当てられ、オンラインで参加した。

本校のフェニックスホールでフォーラムを参観していた方々は、全国また海外からオンラインでつながった高校生が英語での討議している様子に、「グローバルな世界で活躍できる高校生が育ちつつあることを実感した。」と口々に述べられていた。

5 AI 翻訳プロジェクト～産官学連携～

概要： 神戸市では、令和2年7月より株式会社 NTT ドコモ（以下、NTT ドコモ）、株式会社みらい翻訳（以下、みらい翻訳）と共に、AI を活用した翻訳サービス「はなして翻訳®」および「Mirai Translator™」を用いた「神戸市ドコモ AI 翻訳実証事業」を実施している。神戸市企画調整局の提案により、WWL 事業の産官学プロジェクトとして、葺合高校生が実証事業（令和2年10月～令和3年3月）に参加した。

主催： 神戸市企画調整局つなぐラボ、ミライ翻訳、NTT ドコモ

参加者： 2年有志 13名（ESS 部 4名 すぎな会 9名）

内容：

日程		主催	参加人数
10/16	AI 翻訳プロジェクト紹介	神戸市企画調整局	8名
10/31, 11/13	Mirai Translator を使い神戸市の行政書類を翻訳		8名
11/27	「AI 翻訳とグローバル人材育成」講演	みらい翻訳、NTT ドコモ	8名
12/11	みらい翻訳本社オンラインインターン	みらい翻訳	13名
1/22	AI 翻訳アプリオンラインワークショップ	NTT ドコモ	9名

第1回研修の様子(10/16)



みらい翻訳オンラインインターンの様子(12/11)



AI 翻訳アプリオンラインワークショップの様子（1/22）



参加生徒感想：

- ・みらい翻訳は簡単なので使いやすい。他の翻訳よりも正確だけど、その正確さはどのように判断されて正確になっているのか気になる
- ・AI 翻訳を使っていた時は、自分は何のために語学の勉強をしているのだろうと思ったこともあったが、語学の知識がある上で使うことが大切だと思うようになった。
- ・今まで電話しながら翻訳するということがなかったので、とても楽しかったです。このような機器が日常化されると、海外の方との交流が増えたり、グローバル化が進むのでいいなと思いました。

6 共同実施校 科学技術高等学校の取組

報告者 工業代表科長 和田 匠

1. 本校の概要

科学技術高校は、入学後3年間にわたる工業の専門的な学びの集大成として「課題研究」という授業が設定されている。この授業では「機械工学」「電気情報工学」「都市工学」「科学工学」といった各学科に深く関係する「専門的なテーマ」を「自ら設定し」「解決する」などといった活動を通じて「科学的思考能力」を養うことを目的としている。

2. 今年度の取組および成果

コンテスト・発表会	日時	場所	発表テーマ・内容など	参加者
『TAMAサイエンスフェスティバル 2020 in TOYAKU』	11/1	オンライン	『マツモや廃木材より合成したバイオエタノールを用いた塩害解決法』 『廃棄するアクリル板を用いた多孔質物質の合成』	科学工学科1～3年生
WWL 課題研究交流発表会事前指導	11/5	科学技術高等学校	課題研究発表・グループディスカッション・ワークショップ	全学科3年
第3回高校生 SR サミット	11/14.15	オンライン	『神戸の総合治水対策と地域における啓発活動』	都市工学科3年
サイエンスショップ 高校生・私の科学研究発表会	11/23	オンライン	『マツモや廃木材より合成したバイオエタノールを用いた塩害解決法』	科学工学科2,3年
総合治水展	12/5	兵庫県立 人と自然の博物館	防災イベントでの普及啓発活動	都市工学科3年
全国高校生フォーラム	12/20	オンライン	『神戸の総合治水対策と地域における啓発活動』	都市工学科3年
第14回京都先端科学大学 バイオ環境賞	12/15	論文コンクール	『一般家庭における一年間に消費する魚の消化管に含まれるマイクロプラスチック』 バイオ環境最優秀賞受賞	
サイエンスキャッスル2020	12/20	オンライン	『マツモや廃木材より合成したバイオエタノールを用いた塩害解決法』 『廃棄するアクリル板を用いた多孔質物質の合成』	科学工学科1～3年
WWL 課題研究交流発表会	12/25	オンライン	課題研究発表・グループディスカッション・ワークショップ	全学科3年
HAT 神戸連携防災イベント 「イザ！美かえる大キャラバン」	1/7～	オンライン	防災イベントでの普及啓発活動	都市工学科3年
WWL フォーラム	1/28	葦合高等学校	『マツモや廃木材より合成したバイオエタノールの製造と塩害解決法』	科学工学科2,3年生
令和2年度新たな神戸の防災教育事業	通年		『マツモや廃木材より合成したバイオエタノールを用いた塩害解決法』	科学工学科2,3年生

3. 主な活動内容(抜粋)

(1) 第3回 全国高校生 SR サミット FOCUS 参加

日程：令和2年11月14日(土)、15日(日)

主催：立命館宇治中学校・高等学校

会場：オンライン開催

参加者：都市工学科3年 9名

概要：全国そして海外の企業・高等学校・大学生が集結し、持続可能な社会のあり方に向けて、ディスカッションを交わし、アイデアを形にしていく高校生 SR サミットに参加した。生徒は、2週間のフォーカス期間に、大学職員や企業関係者など各業種・分野でも活躍されている方々をメンターに招き、全国の高校生とオンライン上でディスカッションを交わし、テーマごとに防災の知識や活動経験を盛り込んだプレゼンテーションを行い、高い評価を受けた。



(2) 全国高校生フォーラム 2020 参加

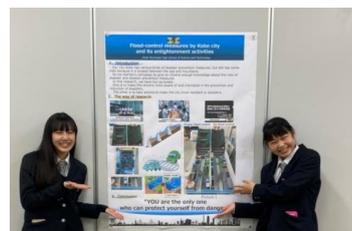
日 程：令和2年12月20日（日）

主 催：文部科学省・筑波大学

会 場：オンライン開催

参加者：都市工学科 3年 環境防災班 9名

概 要：SGH 事業及び WWL コンソーシアム構築支援事業に取り組んでいる高校生がオンラインにより一堂に会し、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案等を話し合うとともに、英語でのポスター発表を映像によって発信し、審査委員による審査が行われた。本校では、災害のしくみや災害対策の重要性をテーマに、全国の高校生に向け総合治水対策の必要性について発表した。



(3) WWL 課題研究交流発表会

日 程：令和2年12月25日（金）

会 場：オンライン開催

参加者：機械工学科3年2名 電気情報工学科3年2名 都市工学科3年9名 科学工学科3年6名

概 要：葺合高校主催の WWL 等課題研究合同発表会では、防災をテーマにした発表に加え、全国の高校生が集まるディスカッションでネゴシエーターとして活躍した。

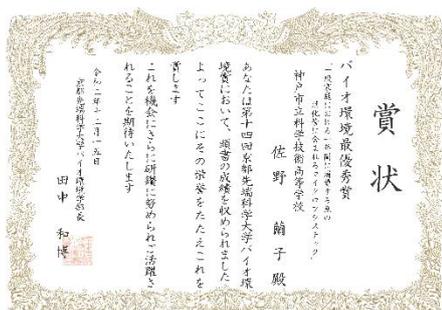
4. 昨年度からの継続的な活動

【科学工学科】 課題研究の取組から希望進路の実現へ

テーマ：「一般家庭における一年間に消費する魚の消化管に含まれるマイクロプラスチック」

概 要：第14回京都先端科学大学バイオ環境賞、高校生論文コンテスト2020 バイオ環境賞最優秀賞受賞

昨年度、WWL 等課題研究交流発表会でポスター発表を行った本研究は令和元年2月13日～2月14日に鹿児島県文化センターで行われた第5回高校生国際シンポジウムで優良賞を受賞した。さらに研究を論文としてまとめ、高校生論文コンテスト2020で最優秀賞を受賞、この実績を活かしAO入試で難関私立大学へ合格することができた。さらに所属する同じ課題研究班のメンバーや後輩に研究方法のアドバイスや補助、発表時のスライドのまとめ方等課題研究における『学び合い』を自然と実践することができ、より深い主体的な学びを行えた。結果、『化学・バイオ』の視点から『防災』について研究を行った『マツモや廃木材より合成したバイオエタノールを用いた塩害解決法』、コロナ禍で大量に使用されているアクリル板の未来の姿を検討した『廃棄するアクリル板を用いた多孔質物質の合成』の二つの研究が『TAMAサイエンスフェスティバル2020 in TOYAKU』で敢闘賞を受賞するなどし、こちらも希望する進路の実現のきっかけとなった。今後は今回研究に携わった1、2年生が次なる課題研究と希望進路の実現へ向けて、準備を行っている。



7 共同実施校 神港橋高等学校の取組

報告者 教頭 清家 豊

1. 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」アソシエイト校としての取組概要

本校は、平成28年に国際都市神戸にふさわしい新たな商業高等学校として創設された。創設のコンセプトとして“「ひと」を「たから」ととらえ、神戸を愛し、支える「人財」を地域とともに育てる”を掲げ、地域に貢献できる人材の育成を目標とし、課題を自らの力で解決する「人間力」の育成を目指し特色ある教育活動を展開してきた。その活動を基盤に、今年度文部科学省より標記事業のアソシエイト校の指定を受けた。取組に対する考え方として、新たなことを始めるのではなく、これまでの地域との連携を深化・発展させるという発想のもと、令和元年度に立ち上げたコンソーシアムや連携協定を結んでいる兵庫区の支援を受けて、インターンシップ等のキャリア教育、商業の専門科目「課題研究」などの探究活動を中心に以下の取組を展開している。

研究開発の概要～地域と協働して進める5つの学び

- M) Moral Dilemma (モラルジレンマ:「考え議論する」課題解決型道德教育)
- I) Internship (2年時:短期就労体験 3年時:通年型インターンシップ)
※通年型インターンシップ:一年間を通して、地域の企業にて週1日インターンシップを行う。
- R) Regional Cooperation (ボランティアやキャリア教育の実施, 地域の取組に参画)
- A) Active Learning (1年時:地域研究 2年時:職業インタビュー 3年時:課題研究などの探究活動)
- I) Industry-School Collaboration (商品開発を中心とした企業連携)

2. 共同実施校としての主な取組

○「道德の日」(11/2)

「道德の日」とは、毎年テーマを設定し全学年で取り組む行事である。今年度は「福祉」をテーマに、講義を受けるだけでなく、5種目のパラスポーツ(①ボッチャ②アンパティサッカー③伴走④卓球バレー⑤車いすスラローム)を体験した。モラルジレンマ学習と同時にSDGsも絡ませた取組として位置付けている。

○全国高校生フォーラム(12/22)

代表生徒3名が参加し「The Teen Girls' Healthy Diets Project from KOBE(神戸発 高校生ダイエットプロジェクト)」というテーマで発表した。本校生として、初めて英語でのプレゼンテーションを行った。

○課題研究交流発表会(12/25)

代表生徒1名が「Unidol プロジェクト」というテーマで、キャリア学習の成果としてオンライン発表の実施。

○WWLフォーラム-探究学習交流発表会(1/28)

代表生徒1名が「台湾と神戸のスイーツを通じた友好」について、課題研究の取組でまとめた提案について発表した。この発表は、クラウドファンディングで資金を集め、台湾のスイーツを扱う店舗を学生が経営することを提案するという、商業科高校生ならではの内容であった。

3. 今年度の取組を振り返って

昨年度までの「課題研究」の取組は、校内での発表会で完結することが多かった。しかし、昨年度行われた葺合高等学校での「課題研究交流発表会」が、生徒だけではなく教員にとっても大きなきっかけになり、課題研究に対する取組が学校全体で深まったと感じている。今年度末には、教員対象の課題研究に関する研修も計画されており、明らかに意識の向上が見られる。生徒もWWL共同実施校としての発表だけでなく、ビッグデータを活用した成果発表会「RESAS de 地域探究」「マイプロジェクトアワード」など、多くの発表会にオンラインで参加するようになった。そして、それに伴って課題研究の質が確実に上がってきたことを感じる一年となった。

本校としては、令和3年度に再度「地域との協働による高等学校教育改革推進」事業の指定を目指し準備を進めていたが、次年度以降の新規公募はなくなった。とはいえ、今大きくうねりだした「課題研究」「インターンシップ」を中心とした地域連携の波を止めることなく、さらに展開していけるよう今後も学校として取組を進めていきたい。

8 共同実施校 須磨翔風高等学校の取組

報告者 教頭 片山 健史

1. 学校概要

本校は、平成 21 年 4 月、神戸市立高校初の単位制総合学科高校として開校し、今年度、創立 12 年目を迎えた。校訓「進取・協調・責任」のもと、「人・社会・希望につながる学校」をコンセプトに、「充実したキャリア教育」によって育てられた夢の実現のための「徹底した学力の伸長」の取組み、保育所・幼稚園・小学校・大学や市役所・区役所等との「積極的な地域連携」、活発な部活動やボランティア活動、科目「人間関係」による「豊かな心の育成」の 4 つを教育目標に掲げ、総合学科の仕組みを活かした教育活動を行っている。



2. WWL 共同実施校としての取組み

(1) 課題研究交流発表会 R2. 12. 25(金) オンラインにて実施

本校からは 2 名の生徒が、ビジネスをテーマとした「局中法度の必要性」と福祉をテーマとした「自助具」というタイトルで発表を行った。この 2 名は「キャリアプランニングⅢ」における課題研究年次発表会の代表者である。さらに WWL 課題研究交流発表会に向け、本事業カリキュラムアドバイザーである兵庫教育大学 西岡 伸紀 教授のご指導もあり、発表構成と内容に深みと説得力が加わった。生徒たちの堂々と発表する様は 3 年間の成長の証である。

発表後に行われた分野別ディスカッションでは、「コロナ禍での福祉の在り方」・「コロナと消費生活」において、それぞれが司会を務めた。初のオンライン発表ということで、機器トラブルや対面発表との違いに戸惑うこともあったが、交流の在り方や発表形式の新たな可能性を見出す実り多き機会となった。

(2) WWL フォーラム R3. 1. 28(木) 葦合高等学校

本校からは 1 名の生徒が「ドラマの主題歌がもたらす経済効果について」というタイトルで発表を行った。本生徒も課題研究年次発表会の代表者の 1 人である。本校生の多くは、キャリアプランニングや本校特色科目において、人前で発表する機会を数多く経験するものの、質問すること、されること（やりとり）にはいささか不慣れである。今回、対面で発表し、普段面識のない生徒との質疑応答を通して、多角的な観点や多様な思考を知るとともに、質問者の意図をくみ取り、適切な表現で回答する難しさを感じながらも、貴重な学びの機会となった。



3. 兵庫県総合学科発表会での取組み

(1) 第 22 回兵庫県総合学科高等学校研究発表会 R2. 11. 20(金) 県立須磨友が丘高等学校

本校からは 1 名が「局中法度の必要性」というタイトルで発表した。発表後に行われたパネルディスカッションでは、県下の総合学科高校である、県立須磨友が丘高校、県立神戸甲北高校、県立淡路高校の生徒と共に、「課題研究を通して得た学び」というテーマで意見を出し合った。本校以外の生徒の発表や意見を直接見聞きし、交流する体験を通じて、探究することの楽しさや魅力、その価値を共有することができた。



4. 今後の課題

本校では、教育活動の柱であるキャリア教育の一環として課題研究に取り組んでいる。12 年前の開校当時と比べ、グローバル化・情報化が進み、社会はますます複雑化するなかで、多様性と不確実性の時代へと移行している。その中で、課題研究への取り組み方にも変化が生じている。本校でも、ただ単に「調べて完結する学習」から主体的に課題を設定し、情報を収集・分析し、深く思考を掘りさげ、解決策を探り、その過程を表現・共有する「探究活動」への移行を目指している。育成したい力、つまり人・社会・希望につながる真の人間力を養うという目標を明確化し、様々な経験を通じた学びの機会を提供し、その経験をキャリア形成に役立たせたい。そのためには、教員が「課題研究」の目的、指導・評価法を理解・共有し、冒頭にあげた本校コンセプト「人・社会・希望につながる学校」と 4 つの教育目標に沿った翔風スタイルの課題研究の在り方を統一認識し、発展させる必要があるだろう。そして、WWL 共同実施校としての取組みを、外部との繋がりを共有し、連携し、協働関係を広げるチャンスと捉え、自ら、逞しく、しなやかに人と社会、そして希望へと繋ぐ人材育成を目指していきたい。

9 共同実施校 六甲アイランド高等学校の取組

報告者 教頭 津村 真人

1. 本校の概要

本校は、神戸市立高等学校再編の先駆けとして平成10年に開設され、今年度は開校23年目を迎えた。県下初の全日制普通科総合選択制高校としてスタートし、平成17年には全日制普通科単位制高校に改編された。平成23年度からはスーパーサイエンスハイスクールの研究指定を受けている。一人一人が自分の興味関心や進路に応じて科目を選択し、9つの系・コースに分かれて、系統だった学びを積み重ねている。またSSH指定校として、学校設定科目「神戸サイエンス」を設置し、総合科学系では「課題研究」を行うなどの取り組みを中心に、地域とも連携して探究学習を進めている。

2. 神戸学

総合的な探究の時間では、1年次で「進路プランニング」としてキャリア教育を行っている。さらに2,3年次では「神戸学」として、系・コース内で作ったグループごとに、地域や自分の日々の生活の中から問題点を見出し、その問題について実践的かつ理論的な解決法を模索し、独自の視点で仮説を導き出すという学習に取り組んでいる。グループでの調査や考察、意見交換を経て、系・コース内、さらに全校生の前で発表していく中で、プレゼンテーション技術や協働する態度を養うとともに、さまざまな問題についての新たな視点を発見し、考えを深めていくことができている。

3. WWL連携校としての取り組み

12月25日に行われた、WWL課題研究交流発表会に参加した。総合科学系を中心に希望者を募り、系の指定科目「サイエンス英語」選択者とESS部員から計3グループが自らの研究について発表した。11月5日には兵庫教育大学大学院の西岡伸紀教授の指導とアドバイスを受け、当日はオンラインでの参加でプレゼンテーションを行った。発表後のグループでのディスカッションでも自分たちの考えを深めるきっかけを得ることができた。

1月28日のWWLフォーラムには、緊急事態宣言下のため当日の参加は見合わせたものの、12月とは別の生徒が英語と日本語の二通りのプレゼンテーションを準備し、動画によって発表・交流をすることができた。

4. その他の取組

総合科学系では毎日の授業に加え、臨海実習でマイクロプラスチック汚染の調査に参加したほか、外部団体とも連携しながら学びを進めている。また、理科の学校設定科目「サイエンス英語」を開講し、課題研究や科学実験を題材とした内容を英語で表現・議論する力を向上させている。

自然科学研究部は、国内未確認の外来種のバッタを発見するなど、地域の環境や生物に関する調査・研究の成果を積極的に外部に発信している。

他に、六甲アイランド内の企業iPresence合同会社の「AYA世代の入院患者の学校教育参加支援に関する調査開発研究」実証実験に協力し、ロボットを使つての遠隔授業を行った。

10月には東灘区と、教育とまちづくりの分野における取り組みを一層進めていくための連携協定を締結した。

さらに、11月11日にはSSH特別講演として、ノーベル物理学賞受賞者である東京大学特別名誉教授の梶田隆章博士の講演会を実施した。

5. 今後の課題

開校以来の「神戸学」の蓄積、SSH指定校としての実績等により、探究学習の中で生徒の課題解決能力やコミュニケーション力、プレゼンテーション能力は高まっている。またWWLでの他校との交流によって、生徒も教師も刺激を受け、自分たちの実践を振り返る契機とすることができた。

一方で、系・コースの独立性が強くなりすぎた部分もあり、目標や方法を共有しにくくなっている面がある。

生徒に身につけさせたい力や学校の目標などのビジョンを全体で共有し、土台となる教科学力の充実を図り、地域の課題をふまえた研究課題を設定して各方面との連携を深めつつ、さらに探究学習を発展させていきたい。

10 共同実施校 Canadian Academy カネディアンアカデミイの取組

日本語科教諭 遠藤智子 Satoko Endo-Crum

1) 学校の概要

本校は、1913年創立のインターナショナルスクールで、アメリカ、韓国、インドなど40か国からの生徒を受け入れている。現在は、幼稚部から高等部までの600名弱の生徒が在籍している。国際バカロレアの一貫校であり、中学部ではMYP (Middle Year Program ミドルイヤープログラム)、高等部ではDP (Diploma Program ディプロマプログラム)を導入。WASC (Western Association of Schools and Colleges)、CIS (Council of International Schools)の認定校でもある。卒業生の多くは国際バカロレアディプロマ資格を活かし、海外の大学に進学している。探究心を持ち続け、社会に積極的に貢献できる人材の育成を目指している。

2) 合同事業への参加

WWL International Conference Online 2020 (2020年7月7日、9日 オンライン参加)

高等部の生徒に参加を呼びかけたところ、アメリカ人、イタリア人、中国人、台湾人、日本人、インド人の生徒を含む8名が参加を希望した。プレゼンテーションは授業内での課題ではなく、各自がCAS活動の一環として取り組んだ。CASとは国際バカロレア・ディプロマプログラムの必須科目(コア科目)であり、生徒たちはCreativity 創造性・Activity 活動・Service 奉仕に関わる活動に2年間計画的に取り組むことが求められる。経済のカテゴリーで発表した生徒は経済学を履修しており、その発展学習としてコロナ禍におけるイタリアの経済問題についての考察を深める格好の機会であった。本校の生徒が閉会の挨拶の中で述べたように、コロナ禍において各自の取るべき行動がより明確になったようだ。

WWL 課題研究交流発表会 Online Interdisciplinary Research Conference (2020年12月25日 オンライン参加)

高等部の生徒に参加を呼びかけたところ、日本語中上級クラスに在籍の10年生(高1)2名が参加を希望した。「日本社会における男女格差」、「ディープレARNING」をテーマに選び、学習成果を発表した。日本の高校生の前で日本語で発表したという成功体験により日本語学習への意欲がさらに高まったようだ。国際バカロレアMYP(6年から10年までの教育プログラム)の最終学年では各自がスーパーバイザーの指導の下、パーソナルプロジェクトに取り組むことになっている。これは、生徒の自主性に基づいて探求する課題であり、MYPでの学習内容の集大成と位置づけられている。参加者の生徒の一人は、パーソナルプロジェクトの一環として発表会に参加した。

3) その他の取り組み

不定期ではあるが、本校のCommunity Exchange Clubと葺合高校のESS部が交流会を実施している。今年度はオンラインで継続し、交流をさらに深めることができた。また、本校のICT教員が企画したGoogle社による女子中高生のためのオンラインセミナーMind the Gapにも葺合高校の女子生徒数名が参加。残念ながら生徒同士で意見交換をする機会はなかったが、女性から見た情報科学分野の仕事の魅力や可能性について共に学ぶ好機となった。

4) 今後の課題・展望

本校は日本国内を含むアジア大西洋地域のインターナショナルスクールとの交流は盛んであるが、日本の学校との

交流の機会は限られている。WICO2020 や WWL 交流発表会への参加は、日本の高校生の視点や考えに触れる貴重な体験であった。スクリーン越しではあったが、日本の学校文化を知る価値ある経験ともなった。特に課題研究発表交流会は、授業で学んだ日本語を実際のコミュニケーションで使用できる有意義な場であった。来年度も積極的に参加を呼びかけたい。

5) 生徒の感想 (WICO2020 参加生徒による閉会の挨拶より) Closing remarks by G12 Nobu

It is a great pleasure for me to say a few words at the end of the first World Wide Learning Conference Online 2020 at Fukiai.

On behalf of Canadian Academy, I would like to express my sincere gratitude to everyone who has assembled from various countries during this pandemic. We are very grateful for having had the opportunity to participate in this conference. Although we were unable to see each other in person, I believe our discussion was productive and we were able to form connections amongst ourselves even though we are physically apart.

I believe by exchanging opinions with everyone, we were able to learn about the situation not only in Japan but also in other countries. Moreover, through the discussions, I believe we were able to profoundly evaluate the current countermeasures taken by various countries against this pandemic while recognizing what actions we can take individually to combat the great challenge we are facing right now.

We and the world are facing great challenges now, but I truly wish and believe that all of us present today will be able to thrive and overcome the challenges we are facing. Once again, thank you very much to everyone who prepared and participated in this online conference and to Fukiai High School and the Kobe Board of Education for making this possible. It was a great pleasure for me and all of us for having this opportunity to build new friendships too. I sincerely hope that the current situation will end as soon as possible and our peaceful life will be restored. Thank you very much.



WWL International Conference 2020 での online 会議の様子



CANADIAN ACADEMY

IV 学際カリキュラム開発

1 学際的科目における学びの特徴

兵庫教育大学大学院 教授 西岡伸紀

WWL コンソーシアム構築支援事業では、「リスク」を含む「社会的課題全般」のテーマに取り組み、資質として Neo MAKS (12 の力) の育成が図られている。そのための中心的科目である学際的科目には大きな役割が期待されるが、科目のねらいや内容を概観すると、学際的科目の構成には以下のような複数のポイントがあると考えられ、科目群が意図をもって構成されていることがわかる。

ポイントとしては、まず“複眼”の育成が挙げられる。具体的には、理系と文系の視点から授業や課題研究が行われたり、社会科教員、理科教員による科学的視野や社会的背景などの観点から調査、分析がなされ現況や課題が発表されたりしている(学際リサーチ)。また、地歴公民科教諭、英語科教諭、ALT の指導の下、政治・経済・環境・人権・教育等の問題が取り上げられている(グローバルスタディーズⅡC)。専門の異なる教員の協働のもと、多様な課題を通して複眼が育成されている。複眼は、SDGs の複雑な様々の課題、その解決策について考え論じる際に欠かせない。好ましくない事象に対して、発生確率や発生時の影響を併せて方策を考えるリスクマネジメントにおいても必須である。現在の重要課題である新型コロナウイルス感染症の対策についても、一次・二次・三次予防の視点から感染予防や重症化予防対策がとられ、個人的取組及び社会的対策として、新たな生活様式、ワクチン接種などが併せて実施されており、対策には多重性や多面性が認められる。感染症を、差別や偏見の防止、経済活動とのバランスなどの視点から論じるには、さらに高度な複眼や広い視野が欠かせない。

次に、取り上げる課題研究のテーマに、学年段階に応じた広がりがあることが挙げられる。テーマについては、1年では、1学期には自己に視点を当てているが、2学期には「社会的に見ておかしいこと」として社会的な視点から課題を捉えている(探究)。テーマの内容についても、1年では「家事分担のシミュレーション」など家庭や社会の基本的な課題を取り上げ(家庭基礎)、2年では内容を拡大し、人権問題や環境課題、経済問題(学際リサーチ)、リスクマネジメント(学際国語)、国際的視点から見た政治・経済・環境・人権・教育(グローバルスタディーズⅡC)など多彩なテーマが取り上げられている。

さらに、課題研究の方法を取り上げていることがある。研究方法の学習は重要である。課題研究では、様々な課題を多様な方法で解決するが、適切な方法の採用がより良い解決につながり、方法の共通理解がより良い討議を実現する。1年で既に、探究活動の進め方、背景、リサーチクエスチョンの設定、発表の仕方、コンピュータリテラシーなどが挙げられる(情報の科学・GSIA)。その中で、リサーチクエスチョンの設定は特筆すべきである。それは研究の本質に大きく関わっており、大学生、大学院生のみならず、研究に携わる者にとっても絶えず問われるもので、悩ましくも意義深く刺激的な課題である。

最後に、課題研究の発表や意見交換の機会を様々設けていることがある。2年生以降でも、GSIB、学際国語、学際リサーチ等の授業で行われる課題研究、共同実施校や連携校と協働して行われる発表会、国際会議等の様々な機会が設けられている。背景や専門性、研究方法の異なる人達の発表、相互の意見交換やディスカッションは、参加者の意見や感想によれば、課題研究能力の向上のみならず、大きな刺激になっている。

以上のように学際的科目を概観すると、複数の学年にわたる学習によって、課題研究に関する資質・能力が、段階的に、広がりをもって育成されていることがわかる。

なお、最近、探究活動として、インターネットの情報検索に留まらない活動の意義が見直されている。それは、例えば、インタビュー、調査、実験、制作など、人やモノに直接関わる体験を伴う活動であるが、そこでの実感や経験は大きな財産になる。また、これらの探究活動では、予想や仮説に従った典型的な結果を得ることは難しい場合が多い。実社会や現実の様々な要因が結果に影響することが一因であるが、このような結果のばらつきや仮説に反する結果などは、現実の難しさや面白さを感じたり、結果の適用できる範囲や限界を考えたりする機会になる。それらの実感や考察は各研究固有のものであり、発表の際に触れていただきたいものである。

2 「学際国語」

(1) 科目「学際国語」について

「学際国語」は、WWLの一環として、今年度初めて開講された。2年生普通科英系・文系の生徒全員を対象としている。Society 5.2に向けた人材育成を目指して、文理融合、教科横断的な学びを念頭に置きながら、テーマをリスクマネジメントに設定した。実際には、国内外における「課題（リスク・禍）」について、日本語で書かれた文章や資料等を総合的に読解し、また、新たな視点からそれらの問題を考察できるよう、多様な方法知の習得も意識して行った。主体的・対話的で深い学びとなるよう、いわゆる講義型は少なくし、ペアワークやグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等、生徒たちの活動が主役になるような授業を心掛けた。最終的には、自らの問題意識によって自らが設定したテーマの課題分析・考察を科学論文形式の小論文執筆を通して行う。

コロナ禍をはじめとして、現在、国内外には多くの「課題（リスク・禍）」が存在するが、それを他人ごとではなく「自分ごと」として受け止め、考える姿勢を「学際国語」での学習活動で培いたいと考えている。また、配布物や収集資料などたくさんのプリントを扱うことが予想されるため、情報の自己管理も科目の目標の一つに挙げた。

(2) 授業実践

(a) 1学期：新型コロナウイルス感染症をめぐる課題（リスク・禍）、コロナ以外の国内外の課題、SDGs

コロナによる休校期間中の課題として、新型コロナウイルス感染症拡大をめぐる報道、新聞記事やインターネットの記事などを収集させた。学校再開後、収集した記事を要約し「私の見解」を記入、グループごとに「回覧板」方式で意見交換を行った。また、情報収集の際に注意することを確認しカテゴライズする練習も行った。

「コロナ以外の課題」においても新聞記事等で情報収集し、グループでテーマを選んでディスカッションした。特に時事的な事象であった黒人種差別問題、SNSによる誹謗中傷の問題に関心が集まり、時間が足りないといわれるほど活発なやりとりが交わされた。

「SDGsの課題」は、動画を利用して基本的なことをともに学び、生徒も教員も一緒に知見を広めた。また、関連する記事・評論を読んだり、現代文問題演習に取り組んだりした。夏休み課題として、「コロナ禍におけるSDGs 私に、私たちにできる取り組み」を、公的機関発行の資料を参考に、消費者の立場で考えて計画・実践し、レポートにまとめた。

(b) 2学期：コロナ禍とスポーツ、コロナ以前からのスポーツの課題、日本語の歴史、日本語をめぐる社会的な課題

2学期はまず、上記のレポートをもとにアクションの内容を、分析・考察も含めてプレゼンテーションし、その出来ばえについてルーブリックを用いて生徒同士で相互評価した。

「コロナ禍とスポーツ」では、オリンピックも含めて生徒それぞれが課題を3点挙げ、グループごとに選んだテーマでペアトークやディスカッションを行った。その間、教員からも多方面にわたる資料・文献を配布し、視点が固定化されないよう気を付けた。まとめとしてKJ法を使って生徒たち自身の手で問題点を整理した。

「コロナ以前からのスポーツの課題」では、意見交換する材料や手掛かりになるよう、多くの資料を配布し、ペア読みやグループ読みで変化をつけつつ、一方的な講義型読解に終わらないよう配慮した。グループでディスカッションした後は、その内容をクラス発表し、クラス内で課題の背景や「私たちが考える改善策」などを共有できるようにした。スポーツをめぐる課題の仕上げとして、エッセー「私が考える『スポーツの価値』」の執筆を求め、これもルーブリックで評価することとした。

2学期後半は、副教材として『中学生からの日本語の歴史』（倉島節尚著）を用い、時代区分ごとに2ペアが読解を担当し、予選のプレゼンを経て、勝者ペアがクラス発表する（もう1ペアはヘルプで参加）という活動を行った。

「日本語をめぐる社会的な課題」については、「外国語としての日本語」の側面に光を当てて学習活動を行った。「外国にルーツを持つ子ども」の問題、実質的に外国人労働者を多く受け入れている現状、「やさしい日本語」をめ

ぐる取り組みなど、教員側から情報提供していく形で多くの文章に触れた。また、NPO 法人で実際に支援活動を行っている方から話をうかがうこともできた。

(c) 3 学期：ディベート，科学論文形式の小論文執筆

2 学期期末考査後の授業から小論文執筆の準備を始めた。1 学期から折に触れ、「問いを立てる」ことを意識するよう促してきたが、まず「計画書」作成から行い、小論文執筆を具体化していった。

一方、1 月下旬の WWL フォーラムでの公開授業で行うディベートについても同時進行で準備を進めた。論題は「e スポーツをオリンピック競技に導入すべきである。是か非か。」とし、2 学期に取組んだスポーツが抱える課題の中で話題に上った e スポーツを扱うこととした。

現在取組んでいる進行形の小論文執筆は、下書きの段階である。生徒が選んだテーマは、大きく分類しても、環境問題、コロナ禍における問題、オリンピックの問題、日本語をめぐる問題・・・、と多岐にわたっている。作品が完成したら、グループで相互に読みあい、コメントを書き手に伝える活動を予定している。

(3) 1 年間で振り返って

学校設定科目のため、教科書がなく、何もないところから創っていく科目であり、教科担当者はずっと手探りの状態であった。しかし、逆に「何でも扱える、取り組める」ことを活かして幅広い領域に挑むことができた。「文理融合」には、非常に悩んだが、「理系と文系の壁はあるか」(最相葉月著)というエッセーを読んでディスカッションをしたり、定期考査の応用問題として『理系。』(川村元気著)を取り入れたり、工夫はしてみた。また、教科担当者自身「課題(リスク・禍)」に対して科学的な姿勢で、つまり、データや数値を意識して臨むことも徐々にではあるができてきたように思う。そして、科学論文の形式で小論文を執筆することを 1 年間の集大成として位置づけた。

令和 2 年度はオリンピックイヤーでもあり、スポーツ研究が持つ学際的な特質を「学際国語」の中で是非扱いたいと考えていた。ゆえに、コロナ禍によるオリンピック延期は残念なことであった。コロナ禍による 2 か月の休校も他教科と同様に、年間予定の変更を何度も迫られることとなり戸惑った。しかし、生徒たちは長い休校期間で会話することを渴望していたのか、ディスカッションの時間では横道にそれることなく熱心な意見交換を行えた。「スポーツの課題」のディスカッション後の「ふりかえり」で見られた 2 名の生徒のコメントを紹介する。

・「何か議論をするときには、それについての知恵をより多く持っておく必要があると思った。まだまだ知恵や経験は足りていない私たちだけ、こうやって考えて思いや考えを伝え合う機会はすごく重要で大切だと思った。」(O さん)

・「一番初めの情報収集の内容によって考えがけっこう変わったりする。一つの面から見たら一つの方向でしか答えが見つからないが、また別の方向から見ると別の答えが見つかり広がっていくのを感じた。」(S さん)

令和 2 年度のカリキュラムに「日本語」をめぐる課題を取り入れたのには訳がある。一つは「学際国語」は国語科の科目であるということの支柱にしたかったからである。もう一つは、国語、つまり日本語を世界の中の一言語として客観的に見つめる機会を得たかったからである。当たり前のように使っている言語を英語科でいうところの「ツール」として再認識し、思考力・運用力を高める必要性にこれまで以上に気づいてほしいと願ったのである。また、日本語の問題を通して見える世界とのかかわりにも目を向けてほしいと願ったのである。

反省項目はいくつもある。国語科では珍しいと考えられるティームティーチングだが、難しいものであった。初めて取り組んだルーブリックは改善すべき点が多くある。施設面のことで仕方がないが授業中に調べ学習ができるのがやはり望ましい。調べることはほとんどが宿題の形になってしまった。また、5 クラス 214 名という大人数を担当するにはさらなる工夫が必要だ。

評価については、定期考査実施は妥当だったと考える。皆で同じ文章を読む機会が多くあった 1, 2 学期は定期考査を実施し、授業での活動とともに評価のための材料とした。3 学期は、ディベートの取り組みと小論文への取り組みが材料になる。2 回行ったルーブリックによる評価が少し不安定なものになったので、ルーブリックの改良はもちろん求められるが、考査というわかりやすい評価の指標があったのは、結果としてよかったと言える。

3 学際リサーチ

1. 科目「学際リサーチ」について

学際リサーチは教科「学際」として、令和2年度初めて開講した授業であり、2年生の普通科英語系、文系生徒対象の選択科目である。教科「学際」の教育目標は、イノベティブでグローバルなリーダーに必要な、新しい価値観を創造する力を複数科目で育成することである。また科目「学際リサーチ」の目標は、人権、環境、経済に関するテーマについて、社会的視野と科学的視野から考察することにより、人権問題や環境課題、経済問題に対しての本質的な解決策を考え、社会に提案することである。授業においては、日本のみならず、世界における様々な課題に対し、科学的視野、社会的背景を取り入れたリサーチや分析を行い、生徒間による議論を通して互いの価値観を認め合う姿勢を育てる。さらに、それぞれの問題点や課題に対する解決策についてプレゼン形式で提案をしたり、論文にまとめたりすることにより、新たな価値観の創造を目指すことを目的としている。

2. 授業実践

(1) 年間の授業実践

(a) 1学期：3つのテーマについて社会的背景、科学的視野を取り入れた議論

令和2年度は3つのテーマ「ごみ問題としてクローズアップされるプラスチックは本当に悪なのか」「日本の移民受け入れ拡大は是か非か」「原子力発電所のある世界、ない世界、あなたはどちらの未来を選択しますか」を扱った。それぞれのテーマについて社会科教諭、理科教諭から1時間ずつの講義を行ったあと、生徒間でディスカッションを行い生徒にはそれまでにそれぞれのテーマに対する、社会的背景や科学的視野を基にしたリサーチを課した。さらに、議論後には必ず何かしらの結論を出すよう要求することで、具体的な意見交換がなされた。また、外部講師を依頼し、専門的な立場の方からの意見や話を聞くことで、学びの質を高めるとともに、客観的なものの見方をつけることができたと考えている。

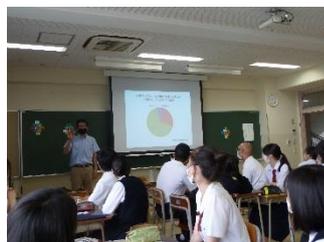
(b) 2学期：興味あるテーマについて調査、分析を行い、現状における課題について発表を行う「My News」

新聞、テレビ、ニュース、雑誌、インターネット等から自分が気になるニュースについて、その課題や問題点について発表を行った。調査、分析の際には社会的背景や科学的視野を必ず取り入れることを条件とした。発表は一人2回行い、1回目の発表後、地歴公民科教諭、理科教諭からのアドバイスを行い、発表を聞いた生徒からの感想を集めた。2回目の発表ではそれらのアドバイスを取り入れ、より完成度の高い発表を目指した。

(c) 3学期：「My News」をもとにそれらの解決策の提案をする「My Research」、論文の作成

「My News」で調査した内容に対する課題や問題点について、解決策の提案を行った。提案はポスターを作成しポスタープレゼン形式で行った。論文の作成では、ここまでで調査した内容や提案内容をレポート用紙にまとめ、集大成とした。

【授業の様子】



(2) 外部連携

1学期に扱った3つのうち2つのテーマについて、外部講師を依頼。プラスチック問題については神戸市役所が主催する「出前トーク」を利用し、神戸市環境局環境政策課の講師2名による講演が実現した。身近なゴミ問題や、それらに対する神戸市としての様々な取組みを知ることができたと思われる。移民・難民問題についてはアジア福祉教育財団難民事業本部に講演を依頼した。移民する立場、移民や難民を受け入れる立場、それぞれの視点からの講演で移民難民問題を主観的に捉えることができた。

3. 成果

1学期の取組みでは、1つのテーマについて、社会科教諭、理科教諭による講義、外部講師による講演、生徒間の議論などを計6時間程度行った。それらの中でも、特に生徒間の議論を通して、自らの考え方が変化していく様子が頻繁に見受けられた。日本の移民受け入れ拡大については、日本は衛生面や経済面など他国に比べると良い環境だと考える生徒が当初は多かったが、「自分が移民ならば」と視点を変えて考えると、言語の問題や宗教観など、これまで考えなかった課題に直面した。「原子力発電所のある世界、ない世界」については核エネルギーを扱う上でのメリット、デメリットそれぞれを踏まえた上での議論がなされており、経済面や環境問題など様々な角度から問題を捉えることができていた。回数を重ねる毎に、社会的な背景や数字の根拠などにも言及するなど、議論の質は確実に向上していった。

2学期の取組みでは、自らの興味に合わせたテーマを選ぶことで、16通りのテーマが生まれ、それぞれについての発表を聞く機会に恵まれた。人前で発表する経験や、1回目の発表を改善し2回発表することで、プレゼン力の向上にもつながったと考える。

3学期の取組である「課題に対する解決策の提案」は苦勞した生徒が多く見られた。例えば「虐待から子どもを守る」など、扱うテーマが大きすぎると、自分ができる解決策が見つかりにくかったと思われる。しかし仲間と議論したり、教師にアドバイスをもらったりすることで、高校生レベルで実施できる解決策を提案することができたと考えている。

年間を通すと、生徒の議論の質の向上、プレゼン力の向上、数字へのこだわり、一つの物事の背景を捉える力などの力を身につけることができた。そして他者の意見を柔軟に取り入れることで自らの考えを構築していく姿勢が身についたのではないだろうか。

【1年間、授業を受けた生徒の感想】

- ・学際リサーチの授業をとって、1学期と比べると情報を選ぶ能力がついたと実感しています。今まではインターネット上のブログ類から情報を得ていたけど、授業中の論題について調べるときは、いつのまにか国や県単位で出ているものだけ注目して調べるようになりました。
- ・人前で発表することへの苦手意識がなくなったし、前はあまりニュースも見ず、世の中で何が起きているのかも分かっていなかったけど、この授業を機に、今ある日本や世界の課題について知ることができ、ニュースにも感心を持つようになった。また、1つのことについて、良い面や悪い面だけをみるのではなく、様々な角度から見るのが大切だとわかった。

4. 今後の課題

令和2年度は緊急事態宣言に伴う休校措置で、授業時間の関係上、カリキュラムを検討しながら、試行錯誤で進めていくことが多かった。具体的な教科書はなく、1学期のテーマや2、3学期の授業進行など常に打ち合わせをしながら進めて行った。テーマの設定や、受講人数で授業進度も変化するので、臨機応変な対応が不可欠になる。

また、校内の施設利用が難しく、様々な問題に対する調べ学習が授業内ではすることができず、家庭学習に頼るしかなかった。校内におけるインターネット環境や端末利用などの条件が整い、授業内に調べ学習ができるようになることで、さらなる授業の発展が期待できることは間違いない。

4 家庭基礎

1. 家庭基礎の取組概要

家庭基礎では、人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てることを目標としている。今年度も学際カリキュラムとして、「Neo MAKS 12 の力」のうち、「①物事を多角的に見る姿勢」「②他者の痛みを理解しサポートする姿勢」「④経験と知識を融合させる能力」「⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解」「⑩コミュニケーション力」「⑪普遍的正義感」を育成することを目標として取り組んだ。目標実現に向けて昨年度に引き続き、家庭基礎の内容を踏まえた上で自己の暮らしと世界の課題を結びつけ、新たな価値観や行動を生み出せること、また、外部との連携も継続することを目的としてカリキュラムの検討を行った。また、協働学習内容をさらに精選し、取り入れることで生徒の深い学びにつながるよう取り組んだ。

2. 授業実践

(1) 年間の授業計画

年度当初コロナ禍での自宅学習期間には家庭で取り組みやすい課題を提示し、学校再開後の授業につなげるなどの工夫を行った。具体的には、布マスクの製作、コロナ禍における消費者問題レポート、各家庭で使用している洗濯用洗剤調査である。学校での授業が再開された1学期には授業ガイダンスの一部としてSDGs 17のゴールを紹介し、家庭生活と社会とのつながりについて意識づけを図った。その後、被服分野、経済生活分野、環境分野を配当した。例年夏季休業中は学際的学びの最たるものであるホームプロジェクトを生徒がそれぞれに家庭生活上の課題を見出し、解決策を考え、それを実践・振り返るが、今年度は夏季休業が極めて短く、取組む時間的な余裕がないと考え、指定課題として地域のゴミ収集ルール調査、清涼飲料水の表示レポートを課した。年度当初の自宅学習課題もホームプロジェクトの指定課題として取り扱った。2学期には保育、食生活分野を学習した。冬季課題として、人生の大先輩インタビューを指定課題として課し、これもホームプロジェクトの一部として評価することとした。3学期は共生、住生活分野、家族家庭分野を配当した。二時間連続授業のうち、基本的に一時間は教科書内容の講義、もう一時間は協働学習を組み込むようにカリキュラムを配置した。

(2) 外部連携

昨年度は、学際カリキュラム初年度ということもあり、日本銀行協会、赤ちゃん先生、神戸親子療育サークル（ダウン症児を育てる親の会）、神戸女子大学、社会福祉協議会（認知症サポーター養成講座）、と多くの外部連携を実施した。専門的立場からの授業による深い学びにつながった一方で、教室での授業時間が減少し、本来学ぶべき必修科目としての内容が手薄になったため、今年度はいくつかは絞って実施することにした。計画した連携授業は、赤ちゃん先生、神戸親子療育サークル、社会福祉協議会の3つである。ところが、WWL事業が始まる前から取組んでいた赤ちゃん先生事業はコロナ禍で中止せざるを得なくなり、また、3学期に予定していた社会福祉協議会との連携授業ではオンラインでの開催になるなど予定と違う実施となった。唯一、神戸親子療育サークル代表の方の講演会は、例年通り実施することができた。

(3) 協働学習の例

昨年度同様に実施した協働学習以外に以下の学習について、工夫しながら実施した。

①調理実習

今年度は、授業アンケートをとる時間的余裕がなかったが、毎回生徒が楽しみにしている家庭科の授業と言えば調理実習が真っ先に上がる。ところが今年度はコロナ禍のため、調理実習には様々な感染防止対策をとる必要が出てきた。調理実習班の人数を減らすこと、調理品目・試食量の削減、生徒が動き回らずに実習を進められるよう調味料や食器類はあらかじめ用意しておくことなどの配慮が必要になった。毎回実習開始時に教員が調理示範を行い実習に取りかかるのが常であったが、今回はあらかじめ動画を撮影し調理手順の確認に用いることにした。調理実習には本来、協働学

習の側面が強くあるはずだが、今年度は協同的な学びの側面よりもどうしても感染予防対策が全面に出る授業内容となった。それでも生徒はお互いに協力し合いながら授業に臨んでいた。

②人生の大先輩インタビュー発表会

3学期の共生分野を始めるにあたり、冬休みの課題として身近な高齢者にインタビューすることを課した。自分の祖父母などに質問をし、レポートにまとめた上で授業中に持ち寄り、グループごとにお互いの内容を発表させた。各グループの報告をさらにクラス内で共有できるよう共通点や相違点をそれぞれまとめ、代表者が発表した。

③チョコレートの表示観察実習

食生活分野で、6種類のチョコレートを示し、その違いを考える授業を行った。生徒は、同じチョコレート商品であっても原材料、栄養成分、価格等々に様々な違いがあることに気づいた。最近多く出回っている機能性表示食品、栄養機能食品、グリーンフォレスト食品など市場に流通している食品について考え、食品の安全や食品選択を考える機会とした。

3. 成果

昨年度の授業内容を精選し、かつコロナ禍でできうる限りの協働的な学習の時間を多く取り入れることで、生徒の授業への参加意欲は高い状態を維持することができた。特に調理実習については、例年通りの実習内容が実施できなかったことは残念だが、工夫を重ねることで例年と同程度の学習効果が得られたのではないかと考える。また、その他の共同学習については、昨年と同様にワークの種類を個人、ペア、グループと変化させることで生徒は飽きることなく授業に取り組むことができた。また、今年度は各分野においても国内、海外とのつながりを意識づける内容を盛り込むことで、自己の家庭生活が社会とつながっていることに気づくきっかけになっているのも成果の一つと言える。

さらに、外部との連携をコロナ禍でも積極的に図ることで立場の異なる人々へ思いをはせる機会も格段に増えたと考える。今年度は外部連携が予定よりも少なくなってしまうが、神戸療育サークルの講演や認知症サポーター養成講座を通じて共生社会への意識づけ、他者理解に取り組もうとする姿勢には昨年と同様授業後に大きな変化が見られた。今後も効果的に外部との連携を図る授業内容を展開していきたい。

家庭基礎の学際的要素としてホームプロジェクトに取り組む意義は大きいと考えるが、今年度は様々な事情により生徒の自由課題としての実施はできなかった。ただ、各長期休業中に課した指定課題を通じて教室での学びと家庭や地域の実情とをスムーズに関連づけることができ、より実践的な学びにつながったと考える。

4. 今後の課題

昨年度は10連休の影響、今年度は緊急事態宣言に伴う休校措置と何度か発令された警報に伴う休校で、授業時数が少なく、その中でカリキュラムを検討すること自体に課題が多かった。何度も急な休校が続き、3学期に学習する予定だった家庭・家庭分野については半数のクラスで実施できないまま終わってしまった。昨年度も課題としてあげたが、1年間の家庭基礎の実時間数に対して教員側が教えたいと思う内容とどこで折り合いをつけるかについては、今後も検討を重ねる必要がある。また、授業毎に協働学習と講義とを組み合わせながらカリキュラムを組んだが、結果的に一つ一つの協働学習が非常に慌ただしいものとなってしまった。例えばインスタントシニア体験（生徒が白内障ゴーグル、聞こえづらくなるイヤーマフなどを装着して高齢者の疑似体験を行う）などは、本来であれば装具を全て装着し、50分の授業時間を全て使って高齢者役、介助者役を体験することで多くのことを学ぶ。しかし今年度は授業時数が限られているため生徒一人が装着する時間はわずか10分となってしまった。あれもこれも教えようとするあまり、慌ただしい授業内容で、ただ実施しただけという状態の協働学習も少なからずあり、生徒の深い学びにつながっているかと問われると、はなはだ心許ない。生徒の立場になって理想的な学習とは何なのか改めて考えていきたい。

5 情報の科学

(1) 科目「情報の科学」について

「情報の科学」は学習指導要領での教科「情報」の科目として、本校では現行カリキュラムがスタートして以来開講している。教科「情報」としての教育目標は、情報社会を構成する一員として、社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育成することであり、科目「情報の科学」では、問題解決を行うために情報と情報技術を効果的に活用する学習活動やそのために必要となる科学的な考え方を身に付けさせ、さらに情報社会を支える情報技術の役割や影響の理解及び情報モラルを身に付ける学習活動を重視している。また現代社会においては、今やコンピュータのない世界は考えられず、さらにニューラルネットワーク構築のディープラーニングによる AI が世界中のあらゆる分野で活用され始めている。これはコンピュータ好きの理系だけが関わる問題ではなく、文系理系を超えたすべての現代人が、今後自らの生活の中で大きく関わらざるを得ない社会変革である。本校での WWL 学際カリキュラム研究における「情報の科学」は、上記の学習指導要領の内容に加え、その大きな社会変革に対応すべく、WWL コンソーシアム構築支援事業で謳われている「イノベティブなグローバル人材」にとって必要とされるグローバルな諸問題を解決する能力の向上、膨大なデータを正しく処理する能力「データリテラシー」と、情報に対し正しい態度で接する能力「メディアリテラシー」を習得した上で、画像や動画を効果的に作成・利用できる能力「デジタルリテラシー」の育成および習得させることを目標としている。

(2) 授業の概要（学際カリキュラムの内容）

(a) 1 学期：Word を利用した情報発信・・・「デジタルリテラシー」「データリテラシー」の育成

「Beautiful Japan」「日本の美」をテーマとし、海外の人々や日本の人々に「日本の美」を伝える A4 サイズ 1 枚のポスターを作成させた。インターネット上の膨大な情報やデータから正しい情報を取得し、わかりやすく文書化し、さらに写真やイラストを加工・編集する方法を習得させた。

< 作品例 >



(b) 2 学期：PowerPoint を利用したプレゼンテーションの実践

・・・「デジタルリテラシー」「メディアリテラシー」「データリテラシー」の育成

「兵庫への旅」をテーマに、コアな客層をターゲットとした「何か工夫のある」旅行を計画し、それを販売することを仮定の目的としたプレゼンテーションを行った。新型コロナウイルス感染症の関係で、現地に行かせて

の取材はできなかったが、インターネットだけに頼ることなく、書籍等も利用し調査を行わせた。また PowerPoint でのスライド作成では、文字の大きさと文字数・効果的な背景やアニメーション設定などを習得させた。さらにプレゼンテーションの基本技術（声の大きさ、台詞のプロミネンス、しぐさ、目線など）のトレーニングを行わせた。

<作品例> (PowerPoint のスライド)

(c) 3 学期 :

○Scratch (スクラッチ) を利用したプログラミングの実践

・・・「デジタルリテラシー」「データリテラシー」の育成

問題解決の方法として、2 学期に「問題解決のためのコンピュータ活用」という単元の中の「問題解決のための手段」で『アルゴリズムとプログラミング』を習得させた。その中では、アルゴリズムとフローチャートの基本と、VBA (Visual Basic for Applications) によるプログラミングを習得させた。その発展としてオリジナルゲームの作成を課題として、Scratch を利用したプログラミングを実践させた。その中で UI (ユーザーインターフェイス) やアクセシビリティの基本も習得させた。

○知的財産権・個人情報の保護と情報公開・・・「メディアリテラシー」の育成

現代の情報化社会において、インターネット上にあふれたコンテンツや情報は、様々な企業や個人・グループが作成・配信していることを意識し、そのコンテンツや情報には数多くの権利が発生していることを理解することが必要である。授業の中で産業財産権・著作権を学び、自分自身の普段の情報に接する態度が、その権利に抵触していないかを意識させた。

(3) 課題と改善

今年度は、新型コロナウイルス感染症による休校措置のために、1 学期のスタートがかなり遅れ、画像処理等のデジタルリテラシーの習得は十分ではなかったように感じる。このような状況の中ではあったが、全2年生を対象に「IoT-AI を使って実現する新しい未来像」というテーマで、株式会社オプティム GM の徳田整治氏による講演を開くことができた。AI が我々の生活の中でごく当たり前前に利用していく社会がもう始まっていることを生徒たちは強く感じ、興味関心を持ってくれたと考えている。来年度は、コンピュータ更新に際し、ニューラルネットワークを体感するソフトウェアを導入する予定である。これを利用し、簡単なディープラーニングや AI を体験させたい。

6 グローバルスタディーズ I A (GSIA)

GSIA では、2年生で行う課題研究に向けた基礎学習を行った。この科目は、CALL 教室で日本人英語教員と ALT がチーム・ティーチングで1クラス 40 人の生徒への一斉指導である。本科目で生徒につけさせたい力は、「Neo MAKS(12 の力)」のうち、「①物事を多面的に見る力」「④経験と知識を融合させる能力」「⑥柔軟性に富んだ問題解決能力」「⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解」「⑧科学的知識を活用する力」「⑨ICT を主体的に使う能力」「⑩コミュニケーション力」の6項目であるが、3年間のGS科目の中では導入部としての役割が強く、次年度の課題研究につなげることができるよう準備を行う科目でもある。

今年度1学期は、『世界が100人の村だったら』を視聴して、世界にある多くの問題を認識するよう促した。「言語」、「宗教」、「人口」、「教育」の4つのテーマに沿ったミニ講義をALTが行い、その後で補助的な英文を読み背景知識の構築を行いながら、英語で意見を交換する活動を主に行った。本年度はコロナ蔓延防止のための休校措置がとられたため、1学期に学んだことを元に2学期になってから発表活動を行うことになった。世界を10の地域に分け、4人グループで、人口や宗教などの基礎的な情報のほか、その国が抱える社会問題とその解決に向けた取り組みを調べ、情報の時間に学んだPowerPointを使用したプレゼンテーションを行った。この段階では、中学生の時に行ったであろう「調べ学習」と「調べたことをまとめる」活動にとどめ、英語での発表活動の質を向上させることや発表者への質問力を磨くことに力点をおいた。

2学期前半は、本校の指導の柱である「経済」「人権」「環境」の3点から多角的に問題をとらえる活動を行った。「経済」分野では、「貿易ゲーム」に取り組んだ。10チームそれぞれが発展途上国、新興国、先進国いずれかの国になり、国家間の資源や技術などの差がいかに貿易格差を生むかを体験し、どのようにしたら誰もが納得できる商取引ができるのかを考察した。また、「人権」分野では、文化の違いによる偏見や差別の助長に触れ、異文化理解に努めるために必要なことを考えた。そして、Hofstedeの6つのcultural dimensionsを用いて日本や他国の文化を分析比較した。各々の主観的な思考から脱却し、客観性を伴う人文科学的な分析・考察を行うことにより、論理的・批判的な知見を備えることがねらいである。これにより物事を多面的に見ることの重要性とそのツールの必要性を認識できるように促した。

2学期後半、「環境」分野をテーマにリサーチ活動を行った。4人グループでSDGsの項目の中から環境に関連する目標を1つ選び、リサーチクエスチョンを設定し、問題の背景や今まで行われてきた解決策を調べ、独自の解決案を提案した。これはまさに、来年度各々がGSII Bの授業で行う課題研究につながる活動であり、リサーチクエスチョンの立て方やリサーチのまとめ方などをミニ講義で提示した。3学期にはリサーチプロジェクトの発表を2週にわたって行った。初めての探究活動では、リサーチクエスチョンと自分たちの提案に齟齬があったり、また、自分たちが掲げた提案が現実的ではなかったりと、論理的な組み立てに甘さが多々見られた。だが、そういった事は実際に行ってみて初めて理解できることであり、次年度の準備としては大変実りあるものであった。何よりも、ほとんどの生徒が原稿を見ずに、聴衆を意識して発表出来たことは大きな進歩であった。

最後に、次年度につなげるために一年間の振り返りを行った。「中学校では発表活動があまりなかったのでプレゼンテーション力がついたと思う」「仲間とのディスカッションで英語を使用する場面が多くスピーキングの力がついた」「文法をしっかり学んで正確に英語を使えるようになりたい」など、英語の使用に関する記述が目立った。その他にも、「ディスカッションでは仲間と意見交換する中で自分の思考を深めることができた」「なぜそうなるのか？どうやってそうなるのか？などと問われることが多かったので考える力がついた」など思考に関する記述も多々あった。また、MAKSの中から1年間で一番ついたと思われる力を3つ挙げるよう質問したところ、「⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解」、「①物事を多面的に見る姿勢」の2つの項目を6割以上の生徒が、「⑩コミュニケーション力」は5割の生徒があげていた。特筆すべきは、「⑫新しい価値観の創造」をあげた生徒が2割以上いたことである。「様々な分野を学ぶことで色々な考えを持つことができたから」などとコメントされていた。生徒たちにとっては新鮮だったであろう社会学的な学びの中で、多角的に物事を見る視点を養うことが

できたのではないかと推測する。

「調べ学習」から「探究活動」へと段階的に課題の難易度をあげることで、次年度への橋渡しが効果的にできた。また、徐々に自信をもってプレゼンテーション活動ができるようになってきている。柔軟な思考と粘り強い探究心をもって来年の活躍に期待したい。

年間の学習内容

学期	内容	重点項目	評価	Neo MAKS
1	導入：If the World Were a Village of 100 People (『世界がもし100人の村だったら』) 世界の諸問題について知る I 「言語」「人口」「宗教」「教育」	世界の諸問題について基本的な知識を身に付ける 自国と他国の文化理解 物事を多面的に見る力 英語の資料の読み取り・分析 意見を論理的に主張できる能力 協働する姿勢 リーダーシップ・調整力 ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション能力 新しい価値観を創造する力	表現：口頭発表 Content Delivery 理解・知識： ワークシート 定期考査	① ④ ⑤ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑫
2	世界の諸問題について知る II 「経済」 貿易ゲームの体験 「文化」 Hofstede's "cultural dimensions" Ethnocentrism Country Study Presentation (グループごとに1つの地域を担当し、そこから各生徒が1つずつ担当する国を選び、その国の基本情報にふれながら、「言語」「人口」「宗教」「教育」「文化」「経済」について絡めつつパワーポイントを使い発表) 「環境」 SDGsの目標の1つから環境問題についてグループでのリサーチ活動	世界の諸問題について基本的な知識を身に付ける 自国と他国の文化理解 物事を多面的に見る力 英語の資料の読み取り・分析 意見を論理的に主張できる能力 協働する姿勢 リーダーシップ・調整力 ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション能力 新しい価値観を創造する力	表現：口頭発表 Content PPT スライド Delivery Interaction with the audience 理解・知識： ワークシート 定期考査	① ④ ⑤ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑫
3	環境問題に関する探究活動の準備・発表・振り返り	世界の諸問題について基本的な知識を身に付ける 物事を多面的に見る力 英語の資料の読み取り・分析 意見を論理的に主張できる能力 協働する姿勢 リーダーシップ・調整力 ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション能力	表現：口頭発表 Content PPT スライド Delivery Interaction with the audience 理解・知識： 探究活動 振り返りなどの各種ワークシート	① ② ④ ⑤ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑫

7 グローバルスタディーズⅡB (GSⅡB)

(1) コロナ禍の影響 ～休校と中止になった国際交流～

今年度コロナ禍の中、4月と5月は休校になった。グローバルスタディーズⅡB (以下 GSⅡB) は、生徒自身で選択した課題を、授業での多方面からの学びを活用しながら、段階的に研究を進めていく学際系の科目である。従来は、春休みに先輩の論文を読み、1学期の前半の授業で「課題研究とは何か」「適切なリサーチクエッションとは何か」を丁寧に考えながら、データを集めて現状を分析し、研究を進めていくことができるテーマであるかを模索していくのである。課題研究の基盤を作る大切な時期にこの授業を行うことができなかつた。

そこで、休校中の課題として、2019年度全国高校生フォーラム(文部科学省主催)での各学校によるポスター発表の要旨・ポスター(英語・日本語)集を読んで、自分が興味のある発表を3つ選んでまとめ、担当教員にメールで送るという課題を出した。さらに2つ目の課題として、課題研究の基礎について英語による説明動画を視聴し、設問を解く課題を出した。この動画は本校のALTが作成したパワーポイントファイルであり、オンデマンドで生徒へ配信し、生徒が繰り返し見ることによって理解を深めることを目的とした。授業が行われていれば、口頭でクラス全員に説明し、質問を受け、生徒たちに教室内で互いに理解を促すペアワークやグループワークを課すことで、生徒が助け合うこともできたのだが、その機会がなかったため、生徒の中には課題についての理解が不十分なため解答に至らず、担当教員が個別にメールや電話で説明をした者もいた。オンラインを利用して新しい内容を進めていく場合に生じる理解の個人差とそれを埋める限界を感じたものだった。従来は先輩や他校生徒の研究を参考にして、SDGsのゴールを考えながらグループで意見交換をして、自分のトピックを決定していた。今年度はその試行錯誤の段階で、メンターである担当教諭が対面で助言をする機会がほとんど取れなかったため、テーマのグローバル度や、解決に向けた提案の独創性まで考えず、自分の興味関心でトピックを選んだ生徒が例年に比べ多かったようだ。

10月11日には、例年通り神戸市外国語大学の野村先生と中嶋先生、さらに、兵庫教育大学の西岡先生から対面で延べ6時間、課題研究の助言をいただくことができた。しかし、計画されていた夏季短期研修におけるスウェーデンの姉妹校訪問、12月の修学旅行での台湾の姉妹校の訪問、さらに「トビタテ!留学JAPANプログラム」など、対面の国際交流がすべて中止になった。加えて海外から訪問予定であった台湾の生徒やスウェーデンの生徒、アメリカの姉妹校の教員の来校もなくなった。その結果、海外に向けて生徒が英語で課題研究の発表をし、質問を受け助言をもらう機会はなくなった。また、プレコンファレンスと称して、次年度の高校生国際会議のためにテーマを決めて海外の高校生と議論をする機会もなくなってしまった。それに代わり、今年は2学期に全員がパワーポイントの発表をすることにしたが、残念なことに質疑応答の時間が十分に取れなかった。そこで3学期のポスター発表の際には質疑応答の時間をできるだけ取り、さらに3月のアテネオ デ マニラ大学のコルネリオ先生とのオンラインでのディスカッションの際には「内容を深めるディスカッションの在り方」に留意してもらい、多角的な視野と的確な議論をするスキルを学ぶことができた。

(2) GSⅡBの概要

GSⅡBの対象は、国際科2年生国際科(1組2組)80名である。2年1組の授業時間は火曜日5限目と木曜日6限目で、使用教室はCALL2とCALL4であり、2年2組の授業時間は火曜日6限目と木曜日6限目で、使用教室はCALL1とCALL4である。木曜日の6限目は合同で授業が行われる。担当する教員は、週3時間の日本人英語科教員1名とWWLアドバイザーの日本人1名、ALT2名、週2時間担当の日本人英語科教員2名の計6名である。学校設定科目として開講6年目になる今年度のGSⅡBでは、SGH・WWLにおける課題研究の指導法を精査し、教材を改善した。週1回5名の教員が打ち合わせを行い、次年度以降も基本教材として使用できるように、パワーポイントで項目ごとのミニレクチャーを作成し、理解を促進するための演習プリントも準備した。

1学期には課題研究の基本を学び、各自がテーマを選び、その後同じ興味関心を持っている生徒同士で、2～3名のチームを作り、研究の背景を調べ、リサーチクエスチョンを設定した後、リサーチのアウトラインをまとめて

パワーポイントで研究の概要を発表した。夏休み（コロナ禍のため8月1日～17日に短縮）の課題として、先行研究を行うための文献とデータ収集を課した。2学期は、生徒が主体的にまた段階的に研究を進めることができるように、章ごとに重要な点を説明し、先輩の論文をいくつか見せながら具体例を示した。個別の指導は、後述するようにカテゴリーごとに担当教員のメンター制にして相談や質問を受けた。生徒は Introduction, Methodology, Data & Analysis, Discussion, Recommendation(s), Conclusion, References を書き進め、パワーポイントを使っての発表を行った。3学期は、英語と日本語の要旨を書き、ポスター発表をして、研究論文の完成（英語）を一人ひとりに課した。論文は提出前に Peer Review（ランダムに割り当てられたクラスメイトの論文をチェックする）の機会を設け、自分自身の不十分な点や間違いに気づくことができ、自分の論文を修正することができた。

本校が育成すべき「Neo MAKS 12 の力」のうち、①物事を多面的に見る姿勢 ④経験と知識を融合させる能力 ⑥柔軟性に富んだ問題解決力 ⑨ICTを主体的に使う能力 ⑩コミュニケーション力を向上させることを GSIIB の目標として設定し、生徒と共有した。研究は二人組を基本とし、国連が提唱している SDGs の 17 のゴールを参考に、生徒自身の興味関心に基づいて決定した。その後、担当教員で話し合い5つのテーマに分類した。リフレクションとポートフォリオに関しては、随時記入の形態を引き継いだ。

WWL 指定後の GSIIB の変遷

	令和元年度	令和2年度
テーマ	Education (SDG 4) Environment /Natural Disasters (SDG7,12,13) Economy (SDG 8,9,12) Health (SDG 2,3,6,11) Human Rights (SDG 1,5)	Education (SDG 4) Environment /Natural Disasters (SDG7,12,13) Health (SDG 2,3,6,11) Human Rights (SDG 1,5) Social Welfare (SDG3,8,12)
形態	1～3名で1つの課題研究	1～3名で1つの課題研究
リフレクション	International Conference 校外での発表者は取組直後 課題研究提出後	International Conference, WWL フォーラム 校外での発表者は取組直後 課題研究提出後
ポートフォリオ	資料まとめを中心に随時記述	課題研究の進捗状況・躰き等について随時記述
評価	ループリック作成、教員による評価、 生徒間評価（発表）	ループリック作成、教員による評価、 生徒間評価（発表・質疑応答・論文）
大学教員講義・ 助言	5月（講義）、11月（指導・助言）、 3月（指導・助言）【コロナ禍のため中止】	10月・11月（対面による指導・助言 6時間）、 3月（指導・助言 オンライン 3時間）

(3) 英語論文の進め方

論文を書き始めるにあたって、英語論文の形式を学び、必要項目（Abstract、Introduction、Methodology、Data & Analysis、Discussion、Recommendation(s)、Conclusion、Reference）を確認した。先輩生徒の作品を読み、基礎的な構成を学習した。その後5つのテーマと SDGs に関連した具体的な課題（リサーチクエスト）を設定した。教師側も担当テーマ、対象生徒を決め、それぞれ評価や助言を行った。デジタルポートフォリオなどデータの保存方法、剽窃の禁止などの説明も行った。1学期はリサーチクエストの設定やリサーチ計画を立てることに主眼を置いた。先行研究の文献（本を必ず含むこと）探しを夏季課題とした。2学期にはまず、データ収集の方法を決定し、文献に加え、必要な生徒は質問紙やインタビューシートを作成した。次に、リサーチクエストに対するデータ収集とその分析（Data & Analysis）、考察（Discussion）を書き進め、担当教員が評価や助言を行った。10月11月には希望生徒がリサーチの途中経過を大学教授の前で発表し、課題設定や研究の流れに対して助言を受けた。その後提案（Recommendation(s)）、結論（Conclusion）を書いた。教員は各章ごとに評価基準に従って担当生徒の論文の採点と添削を行った。また、共通の間違いについては授業で説明し、注意を喚起した。

高校生が英語で課題研究の論文を書くことはなかなか困難である。そこで、論文の各部分に取り組む前に ALT による mini lesson を実施した。課題研究の概要から最後は研究論文のレイアウトまでパワーポイントを使って 13 回の説明を行ない、理解できているか演習問題を解かせることもあった。1 学期末にはミニレッスンの内容について理解を測る筆記テストを行った。

13 回のミニレッスンの内容

1	Research Proposal	2	Types of Research
3	Research Bias & Asking the Right Questions	4	How to Write References
5	Resources, Reliability and Tools for Searching	6	How to Write an Introduction
7	Methodology	8	Data & Analysis and Discussion
9	Using Visuals in Research	10	Discussion, Recommendations and Conclusion
11	How to Make a PowerPoint	12	How to Make a Poster
13	Layout Setting & References Guide		

今年度の生徒が参加した校外での課題研究コンテストは（関西学院大学リサーチフェア、One World Festival for Youth, 全国高校生フォーラム、甲南大学リサーチフェスタ、探究甲子園）オンラインで行われた。本校主催の WWL 課題研究交流発表会もオンラインで実施した。WWL フォーラムは、他校からの参加者の一部がビデオ参加であった。1・2 年生全員が聴衆として参加し、GSII B からは 2 チームが発表をした。

(4) 評価

GSII B の評価は、英語論文と口頭発表を中心にルーブリックを用いて評価基準を担当教員で共有して行った。

課題研究評価：100 点満点に調整

学期	評価対象	配点	学期	評価対象	配点	学期	評価対象	配点
1	Written tests for Mini lessons	50	2	夏季課題	15	3	PPT	15
	Research Proposal Presentation	10		Introduction	10		Abstract	7
	Assignment	15		Methodology	8		Poster Presentation	30
	Assignment	13		Data & Analysis	30		Research Paper	30
				Discussion	20		Portfolio	10
				Recommendations, Conclusion	15			

(5) まとめ

WWL の指定を受けてから、学際系科目を選択する 2 年生の普通科でも課題研究が実施され、論理的思考力や問題解決能力を培うためにも、その重要性はますます認められるようになってきた。GSII B では、この 6 年間、毎年改善を加え、多くの方々の協力を得ながら研究活動を進め、生徒からのフィードバックをもとに、徐々に課題研究の基礎ができてきたように感じられる。生徒にとっては、英語で行う課題研究である GSII B は、テーマ設定、先行研究や文献の読み込み、データ分析、専門家へのインタビュー、アンケートの実施、考察、提案と続く困難な道のりである。主体的で協働的な深い学びの機会と言うものの、試行錯誤で進む方向を見失ったり、考えを論理的にまとめることができず立ち尽くしたり、途中で最初の計画とは違う研究課題に変わる生徒も少なくない。しかし生徒は考えることで大きく成長する。指導側からしても、多岐に渡る生徒の研究テーマは、教員が今まで知らなかった事柄もあるが、年々複雑になっている現代社会の様々な問題を、生徒が新鮮な視点で見つめ、その解決策を自ら考え、自ら行動していくプロセスを共有できることは、何物にも代えがたい喜びである。また、卒業生からは、課題研究を履修したことで問題意識の涵養、視野の拡大、論理的思考と問題解決能力の育成がなされ、大学での研究に大いに役立ったとの声も届いている。

8 グローバルスタディーズⅡC (GSⅡC)

1 概要

地歴公民科教諭、英語科教諭と ALT の3名が担当する教科間連携科目であり、32名の生徒が履修した。SGH における CLIL(内容言語統合型学習理論)の実践を基に、題材を地歴公民分野から幅広く選び、主にディスカッションやプレゼンテーションを用いて日本語と英語を交互に、時には同時に使用する設定にした。オーストラリア・メルボルンの高校との協働学習や大学教授による特別講座も実施し、日本や外国に関する知識を深め、批判的思考、問題解決力、協働性、新しい価値観の創造、日英のコミュニケーション力を高めることを目標とした。

2 今年度の取組

1学期は、政治をテーマに選挙、政策について教師と生徒のやり取りを中心に授業を展開した。日本については地歴公民科教諭が中心となり、海外との比較では ALT が中心となった。また国内外問わず、時事・社会問題に対する生徒たちの背景知識を増やすこと及び日本語・英語両方の要約力と表現力を鍛えることを目的として年間を通じて News Talk (生徒たちの興味・関心に合う新聞記事を要約し、クラスメートと共有し、その記事の話題についてディスカッションを行う活動)を行った。1学期末には「地球帝国の皇帝」選挙という設定で「経済」「環境」「人権」の観点で政策論争を日本語と英語で行った。

2学期は、本校姉妹校であるオーストラリア・メルボルンのウエストボーングラマースクールとの協働学習を行った。互いに自己紹介や、それぞれの国・地域におけるコロナ禍の対応等についても紹介しつつ、興味・関心のある社会問題について説明した PPT や動画を交換した。また合わせて、本協働学習は、オーストラリアオリンピック委員会主催である、オーストラリアの学校と今回のオリンピック主催国である日本の学校とを結ぶ交流プログラムである「オーストラリア・オリンピック・コネクト 2020」の一環として行われたことをふまえ、2学期後半から地歴公民科教諭と ALT と両方の講義から、日本語・英語両方の言語を使って「オリンピックの歴史」「オリンピックの長所と短所(問題点)」について学んだ。

また、2学期の最後から3学期にかけては、コロナ禍で実施が予定されている東京オリンピックにむけて、上記のオリンピックについての学習事項だけでなく、「コロナ禍の日本及び世界」について経済・環境・社会・文化の観点からその現状を調査・分析し、来たるオリンピックをどのような形で迎えるべきか自分の意見を持ち、グループ内で議論し、考察したものを日本語・英語の両方を用いて発表した。また年度末には、高度な学びの一環として、慶應義塾大学名誉教授・関西国際大学国際コミュニケーション学部学部長教授 渡邊 頼純先生による講義「バイデン新政権と日米関係」を実施した。

3 協働学習実施校

学校名	所在地	担当教諭	内容	協働期間
Westbourne Grammar School	Melbourne	栗原 裕企	Culture/ Social Issues	2020/8 ~ 2020/10



Westbourne Grammar School Video

- KARATE 空手 からて
- A sport, originally from Japan, in which people fight using their body
 - (Official event in the Olympics)
 - From Okinawa prefecture (Ryukyu Kingdom)
 - Named from Toudi
 - Karate ability = Obi(belt) color
 - white< green, blue, purple, yellow< brown< black
 - 空(empty) 手(hand) with no weapons
 - Skills: punch, hand knife, etc.
 - Cool & traditional sports



葺合 PPT

4 年間の予定

学期	内容	重点項目	評価	Neo MAKS
1	導入：政治とは/ What's politics? (日・英) 政治家 選挙 投票率 年代別投票率 (日・英) マイクロファイナンス (英) 海洋プラスチックごみ問題 (英) 気候変動 (英) 新型コロナ感染拡大とその影響について (日) 日本の近代化と人権の拡大 (日) News Talk (日・英) ロールプレイ：地球帝国皇帝の立候補演説 政策：経済 環境 人権	基本事項を身に付ける 物事を多面的に見る力 体験を通して題材へのかかわりを深める 英語の資料(データ)から現状を読み取る 意見を論理的に主張できる能力 文章を要約し、表現する力 解決方法を柔軟に考える 物事を多面的に見る力 リーダーシップ・調整力	表現：発表 理解・知識： ワークシート 期末考査： 読解問題 ・論述問題	 ①③④ ⑤⑥⑨ ⑩⑫
2	オーストラリアの高校と協働学習 (英) 文化、時事・社会問題 ①自己紹介、学校紹介 ②PPT説明 ③Video Letter Black Lives Matter (英) Big Tech (英) News Talk (日・英) オリンピックの歴史 (日) オリンピックの利点と問題点 (英)	基本事項を身に付ける 意見を論理的に主張できる能力 物事を多面的に見る 自国と他国の文化理解 意見を論理的に主張できる能力 協働する力 意見を論理的に主張できる能力 文章を要約し、表現する力 基本事項を身に付ける 意見を論理的に主張できる能力 物事を多面的に見る	表現：発表 理解・知識： ワークシート 期末考査： 読解問題 論述問題 PPT原稿	①③⑥⑦⑨ ⑩⑫
3	コロナ禍に行われる東京五輪に対する私たちの提言 (日・英) (WWL フォーラム公開授業) 慶應義塾大学名誉教授・関西国際大学国際コミュニケーション学部学部長教授渡邊 頼純先生による講義 「To What Extent Are You Aware of International Affairs? --- A Reality Check ---」	意見を論理的に主張できる能力 物事を多面的に見る 解決方法を柔軟に考える リーダーシップ・調整力 専門的な知識を身に付ける 物事を多面的に見る	表現：発表 理解・知識： ワークシート PPT原稿	①③ ④⑤⑥⑦⑨ ⑩⑫

5 年間の振り返り（生徒たちのリフレクションから）

News Talk

News Talk is one of the biggest benefits for me during GS2C class. Through News Talk, I could train my ability of reading, understanding and retelling. I think I wouldn't have been able to improve like now without News Talk. It was really a hard work, but I could grow up, so thank you for giving us such a nice opportunity.

World Election

I remember this because I thought I did a good job in trying to persuade the audience. I spoke with confidence and had gestures for the audience to understand what I'm saying.

Mini lesson by teachers [Black Lives Matter]

Racial discrimination problems were not familiar in my daily life, so this class gave me an opportunity to think about that deeply. And by sharing my opinion, I could hear some other different opinions, and I thought this was a complicated problem. So I am interested in this.

Mini lesson by teachers [Olympics]

The pros / cons of the Olympics made my perspective wider and it made it possible for me to think about 2020 Olympics deeply, also from the history. Also learning how to use information will lead me to good resources. I think I can use this knowledge in many classes.

Exchange Program with Australian Students

It was interesting to know that there are many people in the world who are interested in our culture, and to be able to communicate with those people was really fun.

Presentation [Olympics]

This is the last presentation for this class, and I felt my improvement of English. I could answer questions a lot. I had to understand the content of my presentation to answer the questions, so I understand how important understanding content it is.

Special Lecture by Professor Watanabe

Until now, I have lived without having interest in International Affairs so much. However, I thought that knowing the reality of the world in each category (economy, environment etc.) is essential. To familiarize myself with International Affairs, I will read English newspapers such as CNN or BBC, and I try hard to be a global person with broad knowledge.

9 グローバルスタディーズⅢC (GSⅢC)

(1) 概要

GSⅢCは学校設定科目グローバルスタディーズ(GS)の一つで、英語科教諭3名とALT2名が担当する3年生対象の選択科目である。該当生徒達が1年生の際には、スーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けていたので、育成する「16の力」の内、6つの力を伸ばすために授業が行われていた。昨年度WWLの拠点校としての指定を受け、育成すべき力が新たに「12の力」にまとめられた。その中で、スーパーグローバルリーダーの育成を目指して、主として培う力は、①物事を多面的に見る姿勢 ③多様性の中で協働する姿勢 ④経験と知識を融合させる能力 ⑥柔軟性に富んだ問題解決力 ⑨ICTを主体的に使う能力 ⑩コミュニケーション力 ⑫新しい価値観の創造である。

さらにこの科目では、GSの3本柱である、「課題研究」「国際協働学習」「社会貢献活動」に取り組んでおり、“WWL International Conference Online 2020”においては、企画・運営の中心的な役割を果たした。本年度は50名の生徒が履修した。

(2) 今年度の取組

例年1学期は、7月に本校で開催する高校生国際会議に向けての準備を行うことが主要な活動である。しかしながら、本年度はコロナウイルス感染症対策により緊急事態宣言が発令され学校が休校となり、7月に高校生国際会議そのものが実現できるかどうか危ぶまれた。従来は、海外姉妹校の生徒たちを招致し、共に問題解決のための共同宣言を行ってきたが、今年度の国際会議は全てMicrosoft Teamsを用いたオンラインで行うことにした。本年度のWICO(WWL International Conference Online)の主題は、現状の問題に即した“Risk Management - International Cooperation during the COVID-19 Global Crisis”(リスクマネジメント「新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた」)と決めた。4、5月は休校のため、通常は授業内で行う活動を全てオンライン上で行った。4月に、昨年の課題研究を基に生徒たちは5つのカテゴリー(Communication, Economy, Education, Health, Human Rights)に分かれ、グループの希望調査を取った。各トピックの設定、現状や問題点、その原因をグループで調査し、活動はオンラインの掲示板を用いてディスカッションを重ね、プレゼンテーションに向けて準備した。例年は、本番前に国際科3年生の前で発表をして、質疑応答や助言を得たり、専門家への取材を行っていたが、本年度は、それぞれの家庭でリサーチし、オンライン上でレポートを提出し、担当教員の指導助言の下、意見交換をするに留まった。対面授業が再開しても、しばらくは分散登校で授業を行ったため、グループでオンラインを駆使して発表準備をせざるを得なかった。限られた時間で、役割分担を行いパワーポイントを作成し、他のグループの前で発表し、修正を行った。今回はオンライン上での発表のため、パワーポイントを動画に変換し、インターネット上の掲示板やメールを通じて、姉妹校生徒とそれぞれのリサーチに関して意見交換を行い、ディスカッションやファイナルプレゼンテーションの準備をした。初めての試みであったオンラインによる国際会議は多少の機材トラブルはあったものの、他国の生徒たちと意見交換や情報交換を行い、解決策をまとめることができた。

テーマ：ーリスクマネジメントー「新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた」

分野	トピック
Communication (情報)	Infodemic and Risk Communication (情報感染とリスクコミュニケーション)
Economy (経済)	Economic Damage and Financial Support (経済打撃と金融支援)
Education (教育)	Education Gap in Distance Learning (遠隔授業における教育格差特別支援教育の向上)
Health (健康)	Mental Health Issues Associated with the Outbreak (感染拡大によるメンタルヘルス問題)
Human Rights (人権)	Domestic Violence and Child Abuse (家庭内暴力と子ども虐待問題)

本年度の参加校、または参加生徒は以下の通りである。

アテネオ大学附属高等学校(フィリピン)、カナディアンアカデミー(日本)、フェニックス高校(スウェーデン)、ウエストボーングラマースクール(オーストラリア)、神戸市立葺合高等学校(日本)、台中市立台中第一高級中学(台湾)、ソフィア(2019年度ドイツ留学生)

1学期のまとめとして、COVID-19とWICO(WWL International Conference Online)で各グループが行った発表についてALTが中心となり講義を行った。

2学期は、WICOの振り返りから始め、各カテゴリーの課題解決のための活動計画と実践、そして、グローバルの視

点から実践的に取り組むことができる MUN(模擬国連)を主要な活動とした。活動計画を具体化するための意見交換を行い、パワーポイントを作成して発表し、質疑応答を行った。神戸市副市長が来校の際は、代表として **Economy** と **Human Rights** の2グループが活動計画について英語で発表した。その後、1月に開催された WWL フォーラムでもその代表2グループから代表者が英語と日本語で活動計画について発表した。

模擬国連を実施するに当たって、まず ALT による国連に関するクイズや講義により背景知識の構築を行い、神戸市外国語大学より Lori Zenuk-Nishide 教授を迎え、模擬国連についての講義を受けることで MUN について理解を深めることができた。今回の議題は、2018年9月から行われている73回国連総会の議題を参照し、“Arm Transfers”(「武器移転」)とした。5つの地域24カ国からペアで代表国を決め、各国の基本情報を収集してレポートを作成、Nishide 教授から講義していただいた Position Paper や Resolution(決議案)の作成に取り組んだ。Position Paper を作成して各国の立場と主張を発表し、公式討議と非公式討議を通して各国の意見を国ごとで話し合っ て交渉した。さらに立場が似通って協力できる5チームを形成し決議案を協力して作成した。その後決議案の発表、賛成/反対/棄権を投票し、賛成を得られた決議案は正式なものとして採択され、否決された決議案に関しては修正案を作成して発表した。

3学期にはGS(グローバルスタディーズ)の振り返り、後輩に引き継ぐためのビデオメッセージ作成を行った。また、新入生を迎えるにあたり、葺合高校国際科での学びをまとめた7分間のビデオクリップの作製も行った。

(3) 年間の学習内容

学期	内容	重点項目	評価	Neo MAKS
1	WWL International Conference Online に向けて ・共通トピックの選定・決定 ・調査・オンラインディスカッション などを経て、プレゼンテーション作成 ・ディスカッション準備 ・姉妹校生徒と意見交換	物事を多面的に見る力 柔軟性に富んだ問題解決力 データを集め真偽を確認する 仮説を立て、検証する ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション力 協働する姿勢 分野別グループ・クラス 海外の姉妹校生徒 高校生会議の運営に関わる リーダーシップ・調整力・企画力、 実践力の育成	表現：口頭発表 Content PPT スライド Delivery Essay Writing Report 理解・知識 ワークシート COVID-19 関連 論述(期末考 査)	① ③ ⑥ ⑨ ⑩ ⑫
2	WWL International Conference Online に関して ・振り返り ・Action Plan(活動計画)作成 模擬国連 ・国連についての基礎知識 ・模擬国連についての知識 ・Position Paper の作成 ・Resolution の作成 ・決議案の可否 ・否決された決議案の修正案作成 ・GS3年間の振り返り ・後輩への引継ぎ ビデオ作製	物事を多面的に見る力 柔軟性に富んだ問題解決力 経験と知識を融合させる能力 活動計画作成・実践 ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション力 協働する姿勢 分野別グループ・クラス 後輩への引継ぎ プレゼンテーション ビデオ作製	表現：口頭発表 Content PPT スライド Delivery Essay Writing 振り返り GS Reflection 模擬国連 理解・知識 ワークシート 模擬国連につい て論述(期末考査)	① ④ ⑥ ⑨ ⑩ ⑫

(4) 評価

GSIII Cでは、Neo MAKS の①③④⑥⑨⑩⑫を育成する力として授業を行なった。評価は大きく分けてパワーポイントを作成してグループでおこなうパフォーマンス評価と知識理解を測る筆記テスト、テーマに関して自分の意見を書く論述問題で行なった。一年次から何度もPPTプレゼンテーションを行なっているので、完成度も高く聴衆を意識した発表ができていた。高校生国際会議の振り返りは、的確に実践を分析し、改善の示唆が含まれていた。これらは後輩への助言に生かされた。1学期の期末考査は、ALTの講義やWICOで行った発表に関して学んだ知識やその知識を活用する内容について問題が作成された。2学期は同様にALTによる国連に関する知識、Nishide教授による模擬国連に関する講義から知識を問う問題と論述で出題した。国際会議に関しては、生徒達が各グループで分担し、各自の役割を担い、しっかり務めを果たしていた。活動計画においては、高校生の立場で実現可能な計画を立て、企画運営や実践に至るまで協働して行なった。国際会議で話し合った改善策が、コロナ禍における状況で活動の制限があるものの、ポスターやビデオの作成など実現に向けて各自で行動する試みが見られた。

10 第1学年 総合的な探究の時間「探究の日」

日 程： 2021年1月15日（金）13:00～15:45

参加者： 第1学年全員

目 的： 「Self Research」以降の探究活動の継続として、新しい自分自身を探究する機会とする。

また、様々な方面で活躍する人材と懇親する中で、自分と社会との関わり方を考える一日とする。

時 程： 13：00 放送による開会式
 13：10 分科会教室へ移動
 13：20 分科会＜Ⅰ＞開始（～14：00）
 14：10 分科会＜Ⅱ＞開始（～14：50）
 15：00 放送による閉会式
 15：10 感想文作成
 15：45 終了、解散

講座一覧：

	講師名	所属先	内容
1	井出 翔太郎 額賀 達也	スカイライトコンサルティング株式会社 株式会社レアジョブ (オンライン)	『 営業とコンサルティングの実体験を参考に、 仕事とは、働くとはどういうことかについて考える。 』 〈ゴール〉仕事とは他社への価値提供であること、仕事の極意は価値提供の最大化であることを理解する。
2	伊藤 卓郎	株式会社アシックス	『 スポーツの力 』 コロナ禍でスポーツを取り巻く環境も大きく変化しました。スポーツの力とは何か、企業の創業理念とともにコロナ禍前とその後の事業活動を通じた社会貢献を考えてみたいと思います。
3	菊池 信孝	株式会社 フードピクト	『 社会貢献を仕事にする ～デザインとビジネスによる課題解決～ 』 SDGsは2030年から皆さんへの発注リストです。社会課題をクリエイティブに解決し、ビジネスとして仕事にするためのヒントを見つけてください。
4	衣川 千里	ガールズヘルス エデュケーション プロジェクト	『 SDGsから考える生理の貧困とジェンダー平等 』 みなさんは生理がジェンダーギャップに大きく影響していることをご存知ですか？今回はフィリピンと日本における生理の貧困とフェムテックについてお話します。
5	小野 智博	NPO Future Code	『 22歳の私は何したい？外大生の経験的視点 』 「将来したいことわからへん。」と思っていた葺高生の私が、大学生の今、コスメの製造ソーシャルビジネスを立ち上げ・継続して、至った結論とは？後輩に伝えたいことは？
6	斎藤 明子	がくボ会「外国にルーツのある児童のための学習支援学校ボランティア研究会」	『 「外国にルーツのある子ども達をとりまく状況を知ろう。」 —教科を学ぶための『やさしい日本語』変換ワークにも挑戦— 』 まず、子ども達を取り巻く状況に関して知ってもらうためにクイズ形式でQAを行います。次に、実際に子ども達がつまずく日本語の例を出して、それをやさしい日本語に変える練習をします。グループワークです。
7	関根 理恵	UCC 上島珈琲株式会社 (オンライン)	『 生産国にとってコーヒーが魅力ある農作物であるために ～UCCの品質コンテスト～ 』 日本でいつでも・どこでも美味しいコーヒーを飲むことができるのは、生産国と消費国の努力の上に成り立ちます。UCCが、コーヒー産業の持続可能性と発展に向け、生産国と共に取り組む、品質コンテストについてご紹介します。

8	高橋 涼香	理化学研究所生命機能科学研究センター	『 理研で研究を仕事にする 』 理研で働くには？研究したり研究を支えたりする仕事とは？
9	高濱 浩子	画家・アーティスト	『 私が歩いてきた道 』 美大、就職、家業、東京移住、神戸、インド留学、スペイン修行、学校、フィリピン先住民との出会い、医療現場でのアート、私の旅は続く。
10	西側 愛弓	NPO DEAR ME	『 私たちが生きる地球と、世界と、ファッションと。 』 ① フィリピンの貧困問題／②ファッション産業問題／③ファッションで社会活動を行う DEAR ME の活動と描く未来
11	宮内 輝	NPO PALAFOOL	『 子ども食堂、子供塾について 』 現在、葺合高校での経験を元に子ども食堂を通じて地域の子どもたちを支援している。現在の子ども食堂の現状と課題について伝えたい。
12	三好 正文	株式会社神戸新聞社	『 地方紙記者の『現場』から 』 ① 神戸新聞ができるまで ②新聞の特徴～一覧性・網羅性・信頼性 ② 新聞で社会とつながる～時事クイズ ④神戸新聞記者になった理由 ⑤記者のやりがい・面白味 ⑥コロナ禍報道に見る、記者の矜持 ⑦地域連携の現場から ⑧兵庫を知ろう ⑨まとめ～自分の意見をもとう、社会参加しよう
13	柳澤 沙也子	国際協力機構 JICA 関西	『 青年海外協力隊としての2年間の看護活動 』 看護師として病院や老人ホームで働いた後、青年海外協力隊としてインドネシアで2年間、農村部に住む人々を対象に病気の予防活動等を行いました。インドネシアの文化や保健事情についてお話します。

生徒の感想

- ・仕事とは何か。どうすればやりがいを感じることができるのか。それらを学ぶことができました。ぼくには俳優になるという将来の夢があります。改めて「好きなこと」「得意なこと」「(誰かの)役に立つこと」この3つの柱の大切さを実感できました。
- ・私はもともと会計の仕事に興味があり、経営にも関わりたいと思ってこの講義を選択させていただきました。この話を通して、仕事は私が知っているよりももっと広い分野で行われていて、そこで働くことの意義なども知ることができました。
- ・私が通っていた中学の後輩にも、日本語ボランティアの方とともに授業を受けている人が何人かいました。全くその人たちの抱えている過去や事情などを知らなかったけれど、少し理解できたのかなと思います。学校に1名、日本語教師を配置したり、翻訳機器を設けたりすることで好転するのではないかと思います。

講師の感想

- ・30人の顔がよく見える形式で、ゆとりを持って40分の講義ができたことは良かった。
- ・ディスカッションを入れてちょうど良い時間であった。1度目と2度目で異なる反応があり興味深かった。
- ・事前に生徒の興味の傾向がわかると良かった。
- ・質疑応答など、生徒との共有の時間をもっと持ちたかった。
- ・生徒自身に考えさせることが大切なので、プロセスを踏ませたい。40分では短い。
- ・高校生の理解が早く、反応も良かった。有意義な時間であった。

教員の感想

- ・生徒たちが意欲的に講義に参加していたと思う。事前に生徒が何を知りたいかアンケートをとり、講師の先生方へ伝えられれば良かったと思う。
- ・今後 ICT 環境がきちんと整えば、ZOOM でもっと多様な(遠方の)方々に講義を行っていただける。

11 第2学年 総合的な探究の時間

1. はじめに

本来であれば、総合的な探究の時間は、台湾修学旅行と関連付けて探究活動を実施する予定であった。ところが、コロナによる影響により、台湾修学旅行は国内修学旅行への変更を余儀なくされ、最終的には中止という結論を迎えた。それに伴い、総合的な探究の時間の内容も大きく変更することになった。その中でも学年の柱となった学修インタビューについて紹介する。また、年間の実績を残すことにより、次年度以降の学年にも何かしらの参考になると考えられるため、HR実績と共にここに一覧表を掲載する。

2. 学修インタビュー

2年前、ベネッセが主催する研修に参加した際、高槻中・高等学校が行っている「学修インタビュー」の取組みが紹介された。それは、年度末に自らの1年間を振り返ってまとめ、担任・保護者に向けてプレゼンテーションを行った後、生徒・保護者・担任の三者による質疑応答を行うというものである。

11月に行われる保護者懇談会でこの取組を取り入れることができないかと検討を重ね、懇談会の前半部分で実施する方向でまとまった。もともと11月の保護者懇談会は、3年生の選択科目を決定するための大切な場である。よって、学修インタビューでは、そのことも十分に踏まえた上で実施した。右図は学修インタビューの説明プリントである。中央にあるように、卒業後進路については、個別の大学名等を挙げることを強制していない。それよりも、どの方向に進みたいのかを決めることに主眼を置いた。

最後に、学修インタビューには以下の3つの成果があったと分析している。

学修インタビューの実施について		
目的	これまでの学修を振り返り、今後の学びを主体的・自律的・計画的に進めるための決意表明を行う。	
準備	自らの学修状況を振り返るとともに、卒業後の進路を視野に入れ、近い将来、社会の担い手となることを意識したうえで、以下の必須3項目について準備を進める。	
必須3項目	1. どのような職業【分野】に就いて、社会に貢献したいのか 2. 1を実現するために、何学部【コース】で何を学ぶ必要があるか 3. 入試科目と履修すべき3年生の選択科目	
※時間の許す範囲で、これまでの学修の振り返りや課外活動への取組など任意の項目を追加することができる。		
時間	2分以上3分未満	
参考	川上先生 林先生	
項目	川上先生	林先生
1	生命科学 バイオテクノロジー 再生医療	絵本翻訳家 日本⇄海外(翻訳)
2	農学部 理学部 工学部 医学部 神戸大学 名大 九州大学 北海道大学 東北大学	関西大学 外国語学部 神戸女学院大学 文学部
3	ほぼ全て 数Ⅲ、理科 2科目	時事英語 英語探究 E.R(長文読解)
追加項目		英検準1級 →満点扱い
※1時限目：プレゼン準備 → 2時限目：リハーサル① → 3時限目：リハーサル②		

1. 生徒は、他者の発表を聞くことで、さまざまな進路があることや悩んだり困ったりしているのは自分だけではないことを確認することができた。
2. 生徒・保護者・学校が、進路について同じベクトルを共有することができた。
3. 生徒は、進路について自分の言葉で語ったことにより、以後の学習に責任が生じた。

生徒は、進路を自分ひとりで決定し、また自分の力だけで挑戦していくものと考えがちである。それでは学校で学んでいる意味がない。保護者や友達、そして教員をはじめ周囲の支援を受けながら、最終的には自己決定していくものである。その意味で、三者が膝を突き合わせて生徒一人一人の進路についてベクトル合わせをしたことの意義は極めて大きかった。

※学修インタビューの計画から実施に至るまでの詳細や生徒・教員・保護者へのアンケート結果などは葺合論叢に掲載しているので併せてご覧いただきたい。



発表の様子 (左・中央はクラス内 右はクラスを超えて)

3. HR・総合的な探究の時間等の活動実績

日	HR	総合的な探究の時間
1 学期		
6/2・9	保健調査票、アンケート、面談等	
6/6・11		探究課題の共有
6/16	委員・係決め	
6/18		1～5組：身体測定、視力・聴力 6～9組：進路学習(P.1～P.13, P.44～)
6/19	1h 学年集会 (体育館 30分)	2h～6h スタサポ
6/23	1～5組：進路学習(P.1～P.13, P.44～) 6～9組：身体測定、視力・聴力	
6/25		学年集会 (体育館)
6/30	インターナショナル・コンファレンス クラス内準備①	
7/2		インターナショナル・コンファレンス クラス内準備②
7/7	インターナショナル・コンファレンス	
7/9		進路説明会 (進路指導部)
7/14	生徒会立会演説会・選挙	
7/16		スタサポ返却・振り返り
7/20・21	進路修学旅行説明会 (20日：1～5組、21日6～9組)	
7/29・30	答案返却 いじめアンケート 学年集会 (オープンキャンパス・レポート事前指導/学修インタビュー説明)	
2 学期		
8/20	修学旅行の是非	
8/25	体育大会メンバー決め	
8/27		学年集会
9/1	委員決め	
9/3		×
9/8	体育大会に向けて	
9/10		オープンキャンパス・レポート 学級発表
9/17		WWL 講演会 (徳田整治氏) 「IoT・AI を使って実現する新しい未来像」
9/23	WWL 講演会 (西側愛弓氏) 「アマレブランド事業について」	
9/24		体育大会
9/29	進路説明会 (進路指導部・教務部)	
10/1		学修インタビュー①
10/6	いじめアンケート+学年集会	
10/8		学修インタビュー②
10/20	学級裁量	
10/22		学修インタビュー③
10/27	修学旅行①	
10/29		ビブリオバトル①
11/5		×
11/10	×	
11/12		修学旅行②
11/17	修学旅行③+学級写真	
11/19		ビブリオバトル② (グループ練習)
11/24	ビブリオバトル③ (学級発表)	
11/26		×
12/1	修学旅行④ (市内班別研修 5クラス/部屋割り)	
12/3		修学旅行④ (市内班別研修 4クラス/部屋割り)
12/11	学年集会	
12/15	修学旅行⑤ (市内班別研修計画書)	
12/17		×
12/22	ビブリオバトル (学年発表)	
12/23	学年行事日 (修学旅行事前指導) 1h～3h 「海難 1890」 視聴 4h しおり読み合わせ	
3 学期		
1/7		×
1/12	防災学習	
1/19	いじめアンケート+学級裁量	
1/21		3年O 学期結団式
1/26	WWL 講演会 (来田亨子氏) 「スポーツの光と影」	
1/28		WWL フォーラム
2/2	学級裁量①	
2/4		球技大会チーム決め
2/9	学級裁量②	

V 高度な学び

1 本年度の取組概要

(1) コロナ禍における取組の変容

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため4月5日が休校になった。さらに6月に学校が再開しても本校から講師方々に、生徒が密になるようなワークショップは避けて、講演と質疑応答だけを行ってほしいという依頼をすることになったり、講師の方からオンラインでの実施の要望があったりした。生徒がグループで意見交換をして参加者の前で発表する形式は影を潜めたが、海外を含め遠方の講師の方にオンラインでの講演をお願いしたり、複数の講師の方をつないで意見交換をしてもらうことも可能になった。

(2) 概要

WWL 事業の課題項目に「大学・企業・自治体・国際機関等との連携を基盤とする社会に開かれた高度な学びのネットワークの構築」がある。今年度から始まった2年生対象の「学際国語」「学際リサーチ」の授業では、講師の方に、実践者の立場から話をしてもらった。また、昨年度は実施できなかったIoTやAIといった先端科学技術に関する分野での講演も企画した。本年度の連携の相手先は下記の通りである。ここには、拠点校主催の連携授業に加えて、生徒が参加した課題研究の発表会やAI翻訳プロジェクト等のプログラムの主催団体も加わっている。

大 学：神戸市外国語大学、神戸大学、兵庫教育大学、大阪大学、筑波大学、立命館大学、関西学院大学、甲南大学、中京大学、アテネオ デ マニラ大学（フィリピン）他

企 業：アシックス、神戸新聞社、UCC、NTT ドコモ、イオン、オプティム、Google、みらい翻訳、フードピクト、レアジョブ、スカイライトコンサルティング他

国際機関：WHO 神戸センター、JICA 関西、ユニセフ兵庫県協会他

自治体他：神戸市環境局、神戸市企画調整局、神戸市国際課、神戸国際コミュニティーセンター、理化学研究所、神戸税務署、神戸市社会福祉協議会、コンソーシアムひょうご神戸他

NPO 他：TABLE FOR TWO、DEAR ME、Future Code BYCS、PALAFOOL、がくボ会、アジア福祉教育財団、多文化センターまんまるあかし、神戸親子療育サークル、神戸外国人救済ネット他

生徒対象に本校で行った講義（国際機関2講座、国内大学10講座、海外大学3講座、企業2講座、自治体5講座、NPO他8講座 計30講座）を通して育成を目指したのは「Neo MAKs 12の力」の中で、①物事を多面的に見る姿勢 ②他者の痛みを理解しサポートする姿勢 ③多様性の中で協働する姿勢 ④柔軟性に富んだ問題解決力 ⑤自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解 ⑥科学的知識を活用する力 ⑦コミュニケーション力 ⑧新しい価値観の創造の8つである。講義の内容は、国際保健、AI、グローバル社会、共生社会、リスクマネジメント、コミュニケーション、課題研究の進め方等であった。1年生の全生徒対象には「探究の日」を設定し、グローバルな課題の解決に取り組む国際機関・NPOや国際・地域貢献活動にかかわる企業や自治体の方々による13の講座を開催した。生徒は各自が選択した講義に関心を持って臨み、示唆を得た。また、課題研究の発表会なども従来は対面で行なわれていたが、今年度は多くの主催団体がオンラインで開催し、生徒は登校して学校のパソコンを使ってZoom等で発表した。

(3) 課題

令和3年度は、対面とオンラインを組み合わせ、社会に開かれた高度な学びの場を提供していく予定である。健康長寿を目指す神戸市の第一線の研究機関である先端医療センターや世界で3番目の設置となるSDGs上の課題解決を目指すUnited Nations Office for Project Services（国連プロジェクトサービス機関）との連携も試み、医療分野や起業分野の充実も図りたい。さらにWWL終了後もALネットワークを継続運営できるよう、強固な仕組みを構築するつもりである。

2 WHO 神戸センター オンライン講演

WHO 健康危機管理担当 医官 茅野龍馬先生

日 程： 令和2年6月18日(木) 13:00 ~ 15:00

対 象： 5限：2年生 国際科 80名 6限：3年生 国際科 78名 理系 43名

演 題： “Global Health Development and COVID-19 Pandemic”

講演概要：

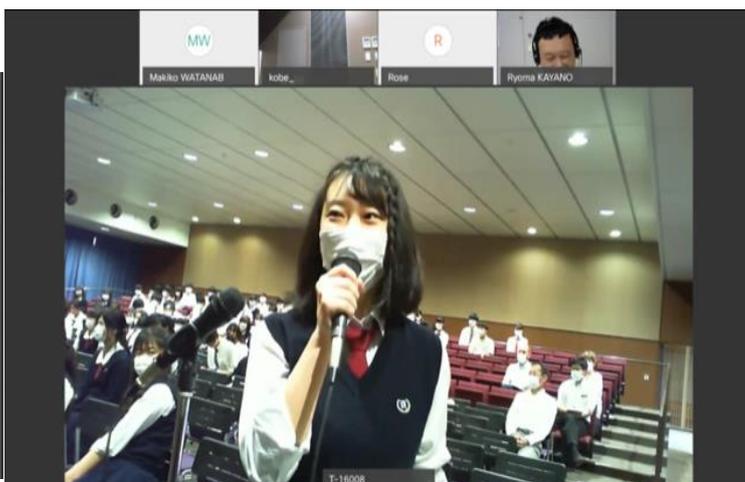
WHO 神戸センターの茅野龍馬医師による’Global Health Development and COVID-19 Pandemic’ と題する英語によるオンライン講演が開催された。まさに新型コロナウイルス感染症の世界的流行の最中にあるので、生徒にとってタイムリーで関心のあるテーマであった。

最初に WHO の機構と役割について、さらに国際的な健康開発リサーチセンターとして重要な拠点である神戸センターについて話された。次に、WHO が感染症と闘ってきた歴史に触れ、感染症に打ち勝つためにはワクチンの開発が必至であり、1979年に天然痘の撲滅に成功したことは人類にとって大きな恩恵であったと語られた。

そして今回の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について、パンデミックの現状や基本的な予防手技（手洗い、咳エチケット、物理的距離の確保、頻繁な物品表面の清掃と消毒、具合が悪いときは外に出ないなど）の重要性などに焦点をあてながら説明された。また、きちんとした情報源からのしっかりしたエビデンスに基づいた情報を得るべきであると強調された。

今後の課題として、グローバル時代に、高齢化が加速していく中で、IHR (international health rules, 国際健康規制)を尊重し、すべての国が協調することが求められていると締めくくられた。

生徒は積極的に講義に参加し、グローバルな健康危機管理に地域での健康危機管理がどのような役割を果たすか、先進国は自身の第二波への備えと途上国支援とどちらに注力すべきか、また、WHO で働くにはどのようなキャリア形成が必要か、など多くの質問を出した。講義終了後には、WHO が各国に情報やアドバイスを提供する役割や、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）からどのように身を守るかなどについてよりよい理解が得られたと感想で述べていた。



3 OPTiMのAIイノベーション戦略 ～第4次産業革命に向けて～

OPTiM ゼネラルマネージャー 徳田整治 氏

日 程：令和2年9月17日（木）

対 象：国際科2年生 普通科2年生

講演概要：

OPTiMの徳田整治氏により、「AIイノベーションに関する戦略」について講演が行われた。高校時代にOPTiM現社長と出会い、知的財産に対する意識が芽生えたこと、「自分たちでゼロからスタートさせる」と決意した起業までの道のり、現在「ネットを空気に変える」をミッションに「世界一AIを実用化させる会社」を目指していることが語られた。実際に医療や農業分野でAIが課題を解決しており、オリジナルのアイデアを持つこと、変化をピンチとせず、チャンスに活かし、「我々と一緒に第4次産業を起こしていきましょう」と葺合生にメッセージが送られた。

質疑応答では、生徒からは少子高齢化社会、教育分野におけるAI役割や、人間とAIとの違いについての質問があり、農業分野での人手不足解消や、個人の特徴や能力を伸ばしていくこと、何かを与えられると力を発揮するのがAIであり、0から1にするのは人間という説明が徳田氏の返答であった。今後様々な分野における実用化の可能性を感じることができ、イノベティブでグローバルな人材の育成を目指すWWL事業としても、より多くの高校生対象に実施していきたい講演の一つとなった。

生徒からの感想：

- ・私は普段AIという言葉は聞いているけれど、この社会でどのように活用されているのか全然知らなかったもので、今日オプティムの取組を聞いて、少しでも多く知れてよかったです。一番印象に残ったのは、医療・農業などの方面で、工夫をしながら、幾度となくピンチを乗り越えて、その世界に合ったプロジェクトを展開していただけることです。現地の人に寄り添い、優しい価値や環境を提供していて素晴らしいと思いました。
- ・私も常に自分の頭で考えながら生きていき、傍観しようとする者ではなく、変化を作っていく者になりたいと思いました。
- ・「変化はピンチにもチャンスにもなる」とおっしゃっていましたが、環境の変化において、前向きに物事を捉えることが大切で、自分の捉え方によって一つの物事でも見え方が変わってくるのかなと感じました。



学校に寄贈していただいた本

OPTiMは2000年の創業以来、AI・IoT・ビッグデータプラットフォームのマーケットリーダーとして、普遍的なテクノロジー・サービス・ビジネスモデルを創り出すことに取り組んでいる株式会社である。

講演の様子



4 リスクマネジメント講演

兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀先生

日 程：令和2年10月22日（木）

対 象：1年生

講演概要：

WWL 事業では社会的課題全般である「リスク」を共通テーマとし、探究活動、学際的科目、インターナショナル・コンファレンス等でそれぞれテーマを設定している。特に本年度は、新型コロナウイルス感染拡大における「リスクマネジメント」が中心テーマとなった。7月に開催したオンラインによる高校生国際会議(WWL International Conference Online 2020)では「リスクマネジメント - 新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた」がテーマとなり、12月の第2回 WWL 課題研究交流発表会は「リスクマネジメント - コロナ禍における高校連携」をスローガンとした。講演者の西岡先生は、本事業のカリキュラムアドバイザーであり、「リスク」を研究分野としている。

講演では、学校の危険箇所や薬物、スポーツにおけるリスクなど、具体例を用いて、リスクの特徴が説明された。また、現在のコロナ禍における対策も、段階によって異なることや“複眼”（主体・環境、発生防止・発生時対応・事後対応）で対応することの大切さが述べられた。我々自身も主体者として自己決定力は大切であり、能力形成のための社会環境の整備も必要性も語られた。

リスクマネジメント①：3段階の多重の対策

- ① 危険を早期発見し、事故等の発生を防ぐ
- ② 事故等が発生した場合、適切に対処し、被害を最小限に抑える
- ③ 事故等の再発防止、教育再開、心のケアの対策を講じる

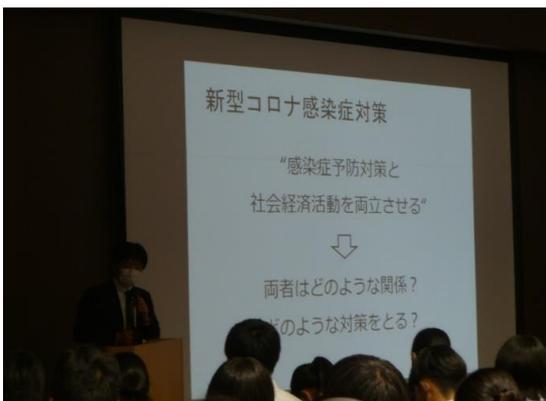
当日資料より（一部改）

○生徒の感想

リスクマネジメントの講演を聞き、学校生活におけるリスクやスポーツ、薬物、いじめなど私たちの周りにはさまざまな沢山のリスクがあるということを改めて実感しました。“リスク”というものはどこでも起こってしまうことです。しかし、この講演で、どうすれば対処できるかを知ることができました。私が一番印象に残っているのは「意思決定のステップ」です。これはリスクがあるときだけでなく、普段の生活でも大切です。

リスクとは人間生活（生きる）に好ましくないことだと、きちんと知ることが出来ました。また、リスクを解決していくには、何かと何かを両立していくことが必要であり、そのリスクのバランスを取りながら、様々な解決策を見つける多面的な考え方が必要だと分かりました。

講演の様子



5 2 学年 オンライン講演会 スポーツの光と影

中京大学 スポーツ科学部教授 来田 享子先生



日 程： 令和3年1月26日(火)

対 象： 2 学年 全員 360 名

演 題： 『スポーツの光と影』

講演概要：

スポーツに関する情報を私たちはどのように取り入れているだろうか。メディアからという人が多い。スポーツでは光が当てられるのは勝者であることが多く、大衆が見たいものしか見えない。まず、スポーツにおけるジェンダー平等について考えてみよう。世界経済フォーラム（WF）が毎年公表しているジェンダーギャップ指数（GGI）を見てみると、女性のメダル獲得数が多い国と「女性が活躍する社会」（GGIの高い国）は全く一致しない。女性がスポーツで活躍していても、社会におけるジェンダー平等は達成されてはおらず、それぞれの社会に適した対策が必要である。スポーツではなぜ性別に競うのだろうか。オリンピックなどで採用されている競技の多くは、筋量と骨格が大きい人が有利になる身体活動である。IOC ジェンダー平等再検討プロジェクトでは、例えばユニフォーム、競技の距離、用具などを可能なかぎり同じにするなど両性の不平等を解消するために様々な検討を行っている。しかし、スポーツが合理的だと考えている公平性は、人権の観点からは差別的である。そこで SDGs に貢献するスポーツにおいては、性別・能力・体格・年齢にかかわらず、どうすればスポーツが楽しめるかを工夫することのほうが重視される。体育の授業の意義が変化しているのである。スポーツの光と影を考える上で、歴史・哲学・法学・社会学・教育・医科学など幅広い学問的視点を持つことが大切である。今まで見ようとしていなかったことを見てみよう。

生徒からの感想：

- ・今回の演題が「スポーツの光と影」ということだったので、保健や体育理論のような内容かと思っていたけど、私が予想していたより大きな規模、多様なジャンルでスポーツについて学べた。スポーツを軸に世界について考えることができた。いろいろな課題や利点がかかわりあっていることを知った。
- ・スポーツにとって平等はもっと考えるべき問題だと思った。確かに、男性と女性とで筋量や骨格の違いはあるけれど、できるかぎり同じに工夫することが求められている。日本のスポーツ界だけに注目するのではなく、世界に視点を当てて公平性を考えていくことが大切であると思った。

新たにわいた疑問、質問したいことなど：

- ・スポーツも SDGs をもっと示していければいいのに、あまり広まらないのはなぜだろうと思った。
- ・アスリートのセカンドキャリアについて、ヨーロッパで特に関心が高いとあったが、なぜ日本ではあまりこの問題が知られていないのか？
- ・経済力や社会環境などによって、スポーツに影響があるにもかかわらず、世界大会などを行うのは平等とは言えないのではないか？
- ・スポーツをする上での能力や個性の差をどの範囲まで不平等だと考えるのか？
- ・最近体育の授業の在り方が変わっていて、「考えて工夫できる人を育てることができる授業」とあったが、具体的にどんな授業なのか。

スポーツを通じて「今まで見ようとしていなかったこと」：

- ・オリンピックではメダルの数や活躍している選手に注目しがちだが、私たちがあまり知らない様々な課題があるのが現状で、スポーツは光の部分だけではなく、影の部分もあるということを理解し、考えていく必要がある。
- ・性別の違いが、人権を奪うほど複雑で重要な問題だということ。また、女性がスポーツで活躍していることと女性が社会に参画していることの関係性がないということで、女性のセカンドキャリアへの問題はより重要なのではないかと感じた。

6 学際国語 講演 外国ルーツの子どもたちの現状と望む未来

多文化センター まんまるあかし 久保 美和 氏

日 程： 令和2年11月25日(水) 27日(金) 30日(月) 12月2日(水)

対 象： 2学年 学際国語 選択者 214名

演 題： 『外国ルーツの子どもたちの現状と望む未来』

講演概要：

11月25日から12月3日にかけて、NPO法人多文化センターまんまるあかしの理事長、久保美和さんに4回ご来校いただき、「学際国語」受講者がクラスごとに久保さんの講演を聞いた。

最初に、まんまるあかしさんの活動内容をご紹介いただいた後、なぜ、久保さんがこの活動に携わるようになったのかご説明いただいた。大好きな人たちが困っていることをたまたま知って、なんとかしたいという思いが出発点であったことに生徒達は感銘を受けたようだ。「想いや心をつなげるために言葉による壁をなくす」、「子どもが『差別されている』と感じる社会は決して良くない」、「生活言語と学習言語は別物、5年はかかる」…たくさんさんの胸に響く言葉とともに、貴重な体験談をたくさん語ってくださった。最後に静岡のラップグループ GREEN KIDS の音楽を映像と共に紹介してくださり、また、久保さんの心からのメッセージを伝えてくださった。授業で、文章で読むだけでは理解できなかったことに触れられ、生徒達にとってはたいへん有意義な時間となった。

生徒からの質問とその回答：

- ・この活動をしていて一番困ったことは？ ⇒ 活動資金の不足
- ・これから日本でもこのような支援を増やすためにはどうすればいいと思うか。
⇒ こういった支援活動が社会的に認められること。 そのためには法整備が喫緊の課題だと思います。
- ・具体的に私たち高校生は、どのような行動をとると外国にルーツのある子どもの手助けになるのでしょうか。
⇒ 違う文化を持つ人に対して受け入れる気持ちを持つこと。そして、できるなら、直接何か困っていることはないか聞いてあげてください。ただ、無遠慮に相手の心に踏み込むことはしないように。自分がその立場になったら何をしてもらいたいかわかると想像力を働かせてください。具体的に何かしたい人、市町村の国際交流協会などを訪れてみてはいかがでしょうか。
- ・外国にルーツを持つ子供やその親と接する上で特に気を付けていることや配慮していることは何なのか？
⇒ 彼らの母文化を尊重すること。日本のやり方が絶対ではないことを常に頭の中に留め置くこと。
- ・外国人が戸惑う日本の文化は何ですか。
⇒ よく聞くのは、自分の意見を言わないこと。表情の動きが少ないこと。何を考えているかわからないそうです。
- ・外国にルーツを持つ子どもが日本に来て、学んだことやメリットは何ですか？
⇒ 母語も日本語もできるようになれば、素晴らしいグローバル人材になります。私たちが支援したブラジルルーツの子は、ポルトガル語を母語とし第2言語として日本語と英語をマスターしました。今は大学に通い、将来は語学力を生かし国連で働きたいと言っています。支援に励まされ、本人の努力が実を結んだ結果です。
- ・彼らにとってよい心のバランスを保つことができる環境を作るためにはどうすればよいのか？
⇒ 日本語や教科などの、その子が必要としている知識を与えることと、自分が受け入れられているという安心感を与えること。
- ・まんまるあかしで外国にルーツを持つ子ども達と関わるときに気を付けていることは何ですか？
⇒ 文化が違う、教育カリキュラムも違うということを念頭において支援すること。例えば、日本の学年に置き換えて「ここまで理解できているはず」という思い込みを持たないようにしています。また、子供たちの自尊心を傷つけないことも気を付けています。「できない」ことは、「能力がないからできない」ことばかりではなく、「日本語が不十分だからできない」ことがたくさんあることを理解することが大事です。

7 学際リサーチ 講演 プラスチック削減に向けて

神戸市環境局 環境政策課 濱住 康弘 氏

日 程： 令和2年7月6日(月) 3限 10:30～11:20

対 象： 2学年 学際リサーチ選択者 (16名)

演 題： 『プラスチック削減に向けて～ゴミ問題として注目されるプラスチックは本当に悪なのか～』

講演概要：

○生活に身近なプラスチック

我々の生活に身近なプラスチックは機能性が高く、安価に手に入る。私たちの身のまわりはプラスチック製品で溢れており、生活を支えている。しかし、近年様々な問題が指摘されるようになり世界規模の課題になっている。

○プラスチックの問題点

1つ目は「海洋プラスチックゴミ問題」である。海洋におけるプラスチックゴミ問題は SDGs「海の豊かさを守ろう」にも定められており、世界規模で取り組むべき課題である。海洋プラスチックは紫外線や波の力を受け、粉々に粉砕される。その中でも 5mm 以下のプラスチックは『マイクロプラスチック』と呼ばれ、海洋生物への影響が懸念される。海洋生物だけでなく、食物連鎖を経て我々ヒトの体内にも影響を及ぼす可能性が示唆されている。さらに海洋ゴミは 2050 年には海に生息する魚の量を超えると予想(ダボス会議にて)されており深刻さは一層増している。

日本は使い捨ての容器(プラスチック製)の破棄において世界2位に位置している程、使用量が多い。さらに大阪湾のビニールゴミ調査ではレジ袋約 300 万枚とビニール片約 610 万枚が沈んでいると推定されており、これを神戸港に換算するとビニール袋約 19 万枚とビニール片約 39 万枚に相当する。生活の豊かさの裏にある問題に目を向ける必要がある。

2つ目は「有効利用率(リサイクル率)の低さ」である。日本のプラスチックごみ 903 万 t のうち有効利用されているのは 83% の 750 万 t である。内訳を見てみると 58% はサーマルリサイクル(熱回収)、15% は輸出、13% はリサイクル(再生樹脂、その他利用)である。諸外国からは 58% にあたるサーマルリサイクルは有効利用率に含むべきではないとの意見も多く、課題も多い。リサイクルが難しい理由については、「プラスチックごみに汚れがついている」「プラスチック製品自体が複数の素材(プラスチック)でできており、分別が極めて難しい」などが挙げられる。さらに、今年7月からレジ袋の有料化が開始されたが、レジ袋がプラスチックごみに占める割合はわずか 2% であり、大幅な削減とはなりにくい。

○これからの取り組み

例えば神戸市では官学民の連携として、マイバック啓発キャンペーンを実施したり、携帯アプリを利用したポイント付加などで身近なところからの削減を進めている。さらに、ビニール傘のシェアリングサービス「アイカサ」やプラスチック製品の使用率を神戸市職員自らが下げる取り組みを行うなどしている。個人として、身近なところからの取組でしか、この問題には対処できない側面があり、レジ袋を使わない意識やポイ捨てをしない意識がより一層大切になることが挙げられた。

○生徒の感想

- ・ 私達の行動1つによって、世界全体の将来が大きく変わってしまうことが実感できたので、この先の地球のために自分にできることを考え、小さなことからでも行っていきたいと思います。
- ・ プラスチックゴミに関心を持つことで、一人一人の行動も環境に優しい方向へと変わると思いました。まずは興味を持って調べることが大切だと思いました。



8 学際リサーチ ワークショップ 移民・難民について

難民事業本部関西支部 中尾 秀一 氏

日 程： 令和2年7月10日(金) 3限 10:30～11:20

対 象： 2学年 学際リサーチ選択者、子どもの発達と保育選択者(計28名)

演 題： 『移民・難民について ～日本の移民受け入れ拡大は是か非か』

講演概要：

○難民の立場で考える・・・

授業の冒頭では「もしも自分が難民になった場合、移民先に求めるものについて考えよう」ということで『親族・教育・人権・経済・医療・宗教・言語・食事・FREE(8つ以外自由に記入可)』の9つの項目の順位付けを4人1組のグループで行った。生徒たちの優先順位は様々であったが、比較的医療、経済、食事が上位に来る傾向があり、宗教・言語・親族が下位に来る傾向があった。医療が上位に来る理由は「怪我や病気のとくに困る」ということ。日本の国民皆保険に対し、海外の任意保険の制度に不安を感じる意見があった。食事に関しても「毎日食べるものだから」や「お箸を使いたい」という意見も見られた。また、言語を下位に設定した班では「気持ちでなんとか伝わる」といった意見や宗教に関しては「日本ではあまり宗教による差別を感じないから」などの意見が見られた。『FREE』の中身は治安と書いた班が多く、他には生活環境などが見られた。

○移民受け入れの立場で考える・・・

次に視点を変え、移民受け入れの立場で考えるワークを行った。上記9つの項目に対し5点満点(合計45点)で点数化をした。日本に住む生徒たちにとって、各項目は点数が比較的高く、平均的には4点以上がついていた。さらに



海外在中者にアンケート(HSBC実施)を行い、世界住みたい国ランキングについて日本は何位なのかを考えさせた。このランキングは各国の暮らしや働き方、子育てなどについて調査を行い、100以上の解答を得た33ヶ国が対象で中国、アメリカ、イギリス、カナダなどが含まれている。「日本は何位？」の質問に対し、生徒の解答は、10位以内が最も多く、次いで20位以内には入ると言う意見がほとんどであった。実際の順位は33ヶ国中32位で「意外と、日本は人気がない」という事実には驚いた様子であった。

○最後に

日本に来たいと思っている難民がいくらでもいると考える人が多いが、これは間違いで、外国人にとって日本は決して住みやすい環境ではない。さらに、日本に住む外国人の方が、外国人であることを理由に入居を断られるケースや、就職を断られるケースなどについても報告されている。また、日本が移民を受け入れていないという印象を持つ人も多いが、実際はそうでもなく、在留外国人の数は年々増加傾向にある。また、移民を受け入れる事によって「犯罪が増える」や「失業者が増える」といった話もよく聞くが、実際はそうではないということに言及されていた。



○生徒の感想

- ・移民や難民の人たちが普段の生活で何を必要としているのか、また何に困っているのかを考えることが大切だと思いました。また、日本は外国の方から見たら住みにくい国だということに驚きました。
- ・班での話し合いでは、「外国に行くときに何を重視するか」という問いに対して、人権や食事が大切だと考える人が多かった。そして、外国の方から見た日本の評価は思っていたよりも低く、解決しなければならない問題があると思いました。

8 2年国際科 課題研究への助言

神戸市外国語大学 教授 野村和宏先生 准教授 中嶋圭介先生

日 程： 令和2年10月27日(火) 5・6限、29日(木) 6限、11月5日(火) 6・7限 対面
対 象： 第2学年 国際科 78名
概 要： 各発表時間に5～6チームの生徒が、約5分で課題研究の発表を行なう。その後、助言者から約3分の助言をもらう。学校から5日前に助言者にパワーポイントを送付し、見ていただく。助言者から返信してもらったコメントは、当日の発表時に生徒全員に配布することで、研究の流れやデータの集め方、タイトルの付け方、発表の仕方など気をつけるべき点を全員で共有した。

助言概要：

タイトルの付け方について

* 発表者の問題意識、解決策に向けた提案の方向性が伝わるつけ方が望ましい。

「客観的重要性」について

* どうしてその問題に注目し、この課題研究で取り組むことが、社会的に重要性をもつのかの説明が十分か。

RQ (Research Question) について

* 言葉の選択に工夫が必要。誰の立場からどのような取り組みなのかを含めよう。“We”を使わない方が良い。

データの使い方について

* 何を示すために用いるデータなのか。データは最新か。

Discussion・Suggestion について

* 課題研究の「典型的な失敗例」となっているものがある。問題性を理解した後、すぐ解決策の提案に入っているが、既存の取り組みとしてだれがどのようなことを行なっているか、「ホップ・ステップ・ジャンプ」の「ステップ」の段階を経ることが必要。

* 課題研究で医学などの専門的内容に立ち入ってしまうと、根拠のある提案は不可能に近い。専門分野で既によしとされている改善策の導入、普及拡大策の議論や提案に焦点を当てるのが現実的である。

* 国内の問題を海外事例で解決しようとするのではなく、まず、国内で既に行なわれている取組がどこで行き詰まっているのか、その打開策を海外事例から解決案が得られるのであれば、その導入や活用の際してクリアする方法を発表の提案とする。

* 具体的な行動についての提案があるとよい。提案の現実性を示すためにかかる費用も考慮に入れて論じたい。

発表について

* 説明はわかりやすく、聴衆に語りかけるように話そう。

スライドについて

* レイアウト、文字サイズ、イラスト・写真の大きさ、グラフ、説明の文字などバランスと統一感が大切。

* 文章を長々と書くのではなく、要点をまとめて書こう。



10 海外の大学との連携 アテネオ デ マニラ大学

(1) 概要

葺合高校を拠点校とする WWL コンソーシアム構築支援事業で、一番深いつながりを持っている海外の大学は、フィリピンのマニラ市にある私立のアテネオ デ マニラ大学である。国際開発学と宗教学を専門とする社会学者の Dr. Jayeel Cornelio を招き、7年前から毎年3月上旬に葺合高校で、1・2年生対象に、3日間にわたって特別講義・ワークショップを開催している。エネルギーで表情豊かなコルネリオ先生は、わかりやすい英語でフィリピンの問題やSDGsに関する講義をされる。生徒の意見に”Why do you think so?”と質問し、じっくり生徒たちの考えを聞き、多角的な視野で社会の現状を説明してくれる。生徒だけではなく教員にも、「この先生からたくさんのことを学びたい。この先生と議論をしたい」と思わせる研究者である。生徒の課題研究についても、より適切なりサーチクエッションの立て方や論理的な思考へ進めるために不足している点を指摘し、生徒の成長を全力で応援してくださっている。



コルネリオ先生による講義



さらに、本校生徒は、海外フィールドワークとして毎年3月下旬にマニラを訪れる。その際には、大学を訪問し、フィリピンの抱える問題とその改善策について、葺合高校生がアテネオ デ マニラ大学の学生たちの前で発表し、大学生と意見交換ができる機会を設けている。コルネリオ先生には当日つきっきりで指導していただいた。

左はアテネオ大学にて発表を終えて大学生と本校生の記念撮影

(2) 令和元年度・2年度のフィリピン・フィールドワーク・ツアー

令和元年度から WWL の活動の一つとして、16名の普通科・国際科生徒と3名の教員が参加する運びで、防災、経済、環境、人権のチームに分かれて12月からグループによる課題研究が進められてきた。ユニカセとアクセスという2つのNPOを訪問することになっていた。ところが、新型コロナウイルス感染症感染の拡大予防のために、政府より全国の小学校・中学校・高等学校に臨時休業の要請がなされ、本校も3月3日より臨時休業に入った。その結果、残念なことに、コルネリオ先生の本校訪問によるワークショップもフィリピン・フィールドワーク・ツアーも中止となった。引き続き海外への渡航が認められないので、令和2年度の3月に計画していたフィリピン・フィールドワーク・ツアーも中止となった。

(3) コルネリオ先生によるオンライン授業

令和2年度はコルネリオ先生に、フィリピンからオンラインで国際科の1年生・2年生を対象に講義をしていただいた。3月5日(金)と8日(月)13:00~15:30にZoomを使って行った。1年生は、"Introduction to Sociology (社会学の基礎)"という題で、社会課題の背景を知り、原因を探って分析し、政策を提案する流れの中で、多角的に現状を見る手法を、具体例を交えて指導してもらった。2年生は、来年度のWWC(ワールドワイドコンファレンス)に向けて、意見交換をしながら考えを深めていく方略を体験的に学んだ。来年度は対面で授業をしてもらえるよう、新型コロナウイルスの感染が収束していることを祈りたい。



オンラインによるコルネリオ先生と2年生の discussion

VI オンラインによる参加

1 オンラインによるプロジェクト参加

(1) 高校生国際交流の集い2020 online

日程 : 8月11日、12日

主催 : 関西学院大学

内容 : 高校生、留学生、大学生がグループディスカッション、文化体験などを通して交流

参加者 : 国際科2年1名 国際科1年1名

(2) 2020年度夏季 高校生グローバルスクール

日程 : 9月20日～21日

主催 : 東京外国語大学・東京農工大学・電気通信大学

内容 : SDGsの3番 Good Health and Well-being 選考を経た36名の参加者は大学の講義や演習グループディスカッションに参加

参加者 : 国際科2年1名

(3) 第3回全国高校生SRサミット FOCUS

日程 : 11月14日、15日

主催 : 立命館宇治高等学校・立命館大学

内容 : 全国の高校生、日本に留学中の大学生、企業が集い、SDGsにかかわる各校のプロジェクトの課題について協働で取り組む

参加者 : 国際科2年4名 普通科1年1名 国際科1年1名

本校のプロジェクト : スマートフォンによる教育改革

参加生徒感想

私は「FOCUS」に参加して課題研究の深さや面白さを知ることができました。私たちのチームは「ICT教育」を題材に研究を進めました。最初の頃は少し難しいなど感じていましたが、徐々に進歩することを楽しさを感じるようになりました。また、他校の研究への参加も題材が類似していたこともあり、積極的に議論できました。全く違う地域で、公立私立でICT教育の進行状況がとても違っていたので比較もしやすかったですし、新たな視点での発言が参考になる場合もありました。今回を通して、私たちが目指す社会にどう貢献していくのか、様々な視点から聞き、自分自身で考える良い機会になりました。課題研究をより深く取り組んでみたいと思いました。

(4) MIND THE GAP

日程 : 11月17日

主催 : カナディアンアカデミー Google

内容 : 女子学生のキャリア支援・Googlerによるキャリア紹介(英語)

参加 : 国際科1年4名

(5) MIND THE GAP オンライン冬季ワークショップ

日程 : 令和3年1月12日、18日

主催 : Google

内容 : 情報科学に興味がある女子中高生を対象とした、プログラミング初級者向けオンライン・ワークショップ。JavaScript(Processing.js)を使ってゲーム開発に挑戦

参加者 : 国際科1年3名

(6) 第5回神戸コミュニティフォーラム The 5th KOBE COMMUNITY FORUM

日程：令和3年1月23日

主催：神戸市 公益財団法人神戸国際協力交流センター

参加者：神戸市民 外国人を含む

本校参加者：国際科3年2名 2年2名 1年2名

テーマ： やさしい日本語～「やさしい日本語」を神戸に普及させ、神戸を外国人が住みやすい街にする～
～Promoting “simple Japanese” to make Kobe a livable city for foreign residents ～

当日プログラム：

オープニング 市長挨拶（ビデオメッセージ）

基調講演 神戸大学准教授 斉藤先生

取組紹介 神戸市国際課

グループワーク 「やさしい日本語」についてディスカッション

クロージング 全体総括、閉会の言葉

参加生徒感想：

オンライン特有の「議論の間の取り方」が非常に難しかったです。しっかりと画面外の参加者の様子に気を配りつつ、発言を妨げないように、また話すことがありそうな人に発言の機会が回るように、意識しました。とはいえ、神戸フォーラムそのものの良さは全く変わらず感じられました。参加された方々はとても温かく、常に気を配って頂きました。私は神戸出身ではないですが、神戸に育てられた1人として、地元への愛を再確認できた良い機会でした。

(1) 高校生国際交流の集い



(3) Focus 参加メンバー



(4) MIND THE GAP



(6) 神戸コミュニティフォーラム



2 オンラインによる課題研究発表会参加

関西学院大学 リサーチ・フェア 2020

日 程： 令和2年11月21日（土）9:30～17:00

主 催： 関西学院大学

参 加 者： 国際科 1年生3名 2年生3名

目 的： 関西学院大学総合政策学部主催で、研究成果を発表する『知』の祭典に参加することで、目標を持って各自が関心のあるテーマに取り組んで研究を進める。また、大学生や他の高校生の研究の口頭発表やポスター発表を見ることで、多くの課題研究に触れ、自分の課題研究の参考にする。

審査基準：

独創性	着眼点のオリジナリティを評価＝ユニークか
サーベイ	先行研究を十分に踏まえているか
内容	研究内容の評価
方法論	適切な方法を使っているか
論理性	論理整合性や展開力の評価
形式・スタイル	表現力、スライド・ポスター等のデザイン等

発表内容：

○国際科1年3名 「失われている日本語」

「やばい」「エグい」「スゲー」。若者は、これらの言葉を嬉しい時、驚いた時などあらゆる状況で使用している。母国語こそが私たちの思考、情報の源であると言われているにも関わらず、語彙の少ない若者の思考、情緒は乏しくなっているのではないだろうか。日本語には物事を表現する美しい言葉が豊富で独自の感性が溢れている。それなのに若者言葉を使用し続け、美しい日本語が失われていくのはもったいない。本研究では、学校の授業や課外活動などで、美しい日本語に触れ、楽しみながら、正しい日本語を保持する機会を作ることを提案する。

○国際科2年1名 “Involving Young People in Disaster Assistance Volunteer Activities”

近年増え続ける自然災害により、日本の被災地では災害ボランティアが不足している。しかし諸外国に比べると、日本は災害ボランティアだけでなくボランティア活動の参加率も低い。高校生など若い時期のボランティア経験が、後年ボランティア参加に繋がるというデータもある。日本のボランティア参加率の低さは高校時代のボランティア経験の少なさによるものだと考え、将来的に災害ボランティア参加を増やすためにどうすればよいかをリサーチクエストとし、高校生がボランティアに参加しやすい地方自治体等の連携も視野に入れた仕組み作りを提案する。

○国際科2年2名 “What is the Most Effective Way to Close the Education Gap inside Cambodia?”

※実行委員会特別賞 受賞

1990年頃に発展途上国と先進国間で問題になっていた教育格差は近年グローバル化が進んだことにより、国内の農村部と都市部間での教育格差へと問題が変容しつつある。先進国、発展途上国にかかわらず、十分な教育を受けなかった人の多くが、生活に支障が現れ、安定した職につくことができないため、貧困に苦しんでいる。この負のサイクルから抜け出し、すべての人が平等な権利を持つことを保障するためには、初等教育の普及が不可欠であると私たちは考える。そこで本研究では、私たちはカンボジアの現状を例に、教育格差を縮める解決策を提案する。



生徒の感想：

○（本番の発表では）データに関する質問や意見が多かったので、それぞれのデータが自分たちの立てた課題にどう関係するのか明確にできるといいということを学びました。また、解決策を自分たち高校生ができることを視点に考え

るのは大切だなとも感じました。

○初めてオンラインで発表したし、去年参加した発表会とはちがって質疑応答の場面もしっかりと設定されていたのでとても緊張しました。本番はトラブルなく終わることができ、質疑応答も何とか自分の言葉で対応することができました。そして発表に備えて、色々な人にアドバイスを戴いたり、話しを聞かせてもらったりとたくさんの良い経験ができました。元々興味のあるトピックについてリサーチをすすめてきたけれど、この課題研究の発表を通して、より興味が沸いたし、次の発表に向けても頑張っていこうというモチベーションの向上につながりました。

甲南大学 リサーチフェスタ 2020

日 程： 令和2年12月20日（日）10:00～16:20

主 催： 甲南大学

参 加 者： 国際科 1年生1チーム3名 2年生7チーム14名

目 的： リサーチフェスタは、分野を問わず、理系、文系の高校生と大学生、大学院生が集まり、自分たちの行なってきた「調査活動」や「研究活動」について、自由討論形式で発表、議論する甲南大学独自のイベントである。発表を通してさまざまな参加者と交流することで、調査活動や研究活動の進め方や効果的な発表方法などを学ぶ。

審査基準： テーマ -- 研究課題の設定が明確であり、その研究を遂行することに大きな意味があるか、または、その研究を進めることで多くの人とその研究成果に関する興味を強く掻き立てられるか。着眼点、独創性、将来性、魅力などを総合的に評価する
手法 -- 課題を解決するために適切な手法で研究を計画しているか。主観ではなく、調査（アンケート）、実験、引用などを使って、客観的、多面的な分析をもとに研究がなされているか。結果が出ていなくても、研究の道筋がしっかりしているものは高く評価する。
結果、内容、考察、仮説、提案 -- 得られた結果をもとに、その考察、またそれをもとに立てられた仮説や提案を評価する。そのデータ量に加えて、客観性や多面的な解析、独自の観点から仮説や提案を行っているものを高く評価する。
プレゼンテーション -- その研究課題を専門としない人に対しても、わかりやすく説明がされ、聞き手の質問に対して適切に答えられた発表を高く評価する。又、構成や色遣いなどが論理的で適切な配置でデザインされた資格資料などを駆使し、聴衆に伝える様々な工夫を行った発表も高く評価する。

コロナの影響で今年は、オンラインで実施された。ウェブページ上にリサーチフェスタ特設サイトを設置し、そのページ上に75部屋の発表会場（Zoomを利用）が用意された。葺合高校からは8チームが発表を行った。その結果、2年生国際科の2チームがクリエイティブテーマ賞を受賞した。

- ・「日本におけるトランス脂肪酸に対する意識の向上を目指して」
- ・「ファストファッションストアが設置するリサイクルボックスを利用する前に高校生と学校が取り組めること」

生徒の感想：

- ・他の人の発表を聞くことでその分野の知識だけでなく、調査方法、提案等、工夫されているものが多く、見ていて楽しかったです。
- ・フィードバックの大切さを学びました。私たちは発表に際して練りに練った準備をしたのですが、まだまだ穴があって質問に答えられなかったこともありました。アドバイスも沢山もらうことができよかったです。

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2020 Online

日 程： 令和2年12月20日（日）10:00～16:00

主 催： ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 運営委員会、特定非営利活動法人 関西 NGO 協議会

参 加 者： 国際科 2年生3名

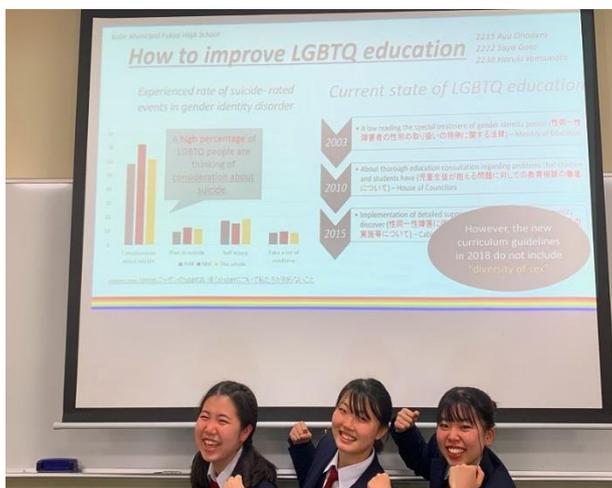
全体テーマ： 私たちが描く持続可能な社会の未来図

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth は、2014年に高校生を中心とする若い世代と NGO、CSO（市民社会組織）が連携し協働する目的で始まった。SDGs を達成するためには、若者の活躍こそが重要であるという考えの下に、高校生が主体となって、貧困、紛争、差別、格差、ジェンダー、環境などの社会課題を自分たちの問題としてとらえ、ともに考え、行動を起こすための場として立ち上げられたイベントである。葺合高等学校では、2015年から生徒の課題研究の発表の場として「高校生のためのポスターセッション」に参加し、その後、本校が主催する国際会議や生徒たちが取り組む国際貢献活動を紹介する場として「ブース展示」を行ってきた。さらに昨年度は「高校生助成プログラム」の最終審査に臨み、また、高校生実行委員会のメンバーとしてイベントの企画運営に携わる生徒も出てきて、運営側と発表側という双方からこのイベントに取り組んできた。6,000名を超える高校生が集い、国際支援に関わる関西の多くの NGO がブースを出したりワークショップを開いたりするので、志を同じくする高校生たちが出会い、SDGs 達成を目指す様々な活動を知ることのできる学びの多い会である。

2020年度はコロナ禍の中、12月20日（日）に、「私たちが描く持続可能な社会の未来図」をテーマにオンラインで開催された。ポスターセッションの部では、本校2年生の3名のチームが予選を経て最終審査に残った。11月14日（土）に行われたオンラインでのブラッシュアップ交流会では、国内・海外の支援現場で実務を行っている NGO 職員の方々から、様々な視点の助言をいただき、最終審査までの1か月で、自分たちで何度もパワーポイント発表資料を改訂してきた。当日は「LGBT Education Now and in the Future」というタイトルのもと、英語でプレゼンテーションを行った。内容は、日本だけではなく世界で大きな問題になっている LGBT の方々への差別問題を取り上げ、小中高高校生に向けての教育に着目し、地域目線での解決策を探ったものであった。



校内からオンラインで行った最終審査会での発表



優秀賞を授与され大喜び

3人は、「最初はどの様なデータを集めて、提案を説得力のあるものにするか手掛かりがつかめませんでした。助言をいただき、チームメイトと議論を重ね、研究を進めることができました。」
「大会で課題研究を発表するというのは初めての体験でしたが、しっかり考え、練習を重ねたので、達成感がありました。」
「ふたりの積極的な姿勢に感化され私も頑張ることができ、人と協力することの大切さがよくわかりました。」と述べている。最終審査の結果、優秀チーム3校の1つに選ばれた。審査委員からは、「今後もテーマをさらに深め、他チームの発表者から得た学びを織り交ぜて、国際協力/SDGs/多文化共生社会の実現に向かってアクションを続けてほしい。」とエールを送られた。

3 イオンワンパーセントクラブ アジアユースリーダーズ 2020

日 程： 令和2年12月17日（木）～19日（土）3日間

開催形式： 各国高校生参加者をインターネットでつなぐオンライン形式

テ ー マ： 「コロナ禍に伴う学校教育上の課題と改善点・打開策について」

主 催： 公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

参 加 者： インドネシア、カンボジア、タイ、中国、ベトナム、ミャンマー、ラオスの高校生各国7名、マレーシアから高校生2名及び日本から高校生21名（本校からは2年生3名）、計72名

- 目 的：
- ・社会、経済、環境等の問題について英語でディスカッション、発表を行い、多国間交流を通じて価値観の多様性を学ぶとともに同世代の友人ネットワーク構築の機会を提供する。
 - ・次代を担う若者の社会や環境問題に対する意識の向上、並びに、グローバルリーダーを育成する。
 - ・現実的な社会、環境問題についての講義受講やチームディスカッションを通じ、解決に向けたロジックを磨く。

プログラム構成：

月 日	活動内容
12月17日	オリエンテーション、基調講演（講義Ⅰ）、チームビルディングアクティビティ、サポーターとのディスカッション講義Ⅱ ・講義Ⅰ 「コロナ禍が経済、社会、教育に与えた影響」 国際大学 学長 伊丹 敬之 氏 ・チームビルディングアクティビティ グローバル教育推進プロジェクト 木村 大輔 氏 ・サポーターを交えてのディスカッション 各チームにイオンスカラシップ生およびアジアユースリーダーズOGにメンターとして付いてもらい、コロナ禍における教育上の問題・課題について実際に工夫した事例等をチーム内で共有。 ・講義Ⅱ 「ニューノーマルの時代におけるSDGs実現のための教育」 東京大学大学院教育学研究科 准教授 北村 友人 氏
12月18日	講義Ⅲ、チームディスカッション ・講義Ⅲ 「発展途上国から世界に通用するブランド創り」 株式会社マザーハウス 代表取締役副社長 山崎 大祐 氏
12月19日	成果発表、クロージングセレモニー

各チーム成果発表内容（概要）

※本校生徒所属チームのみ抜粋

■チームC 3つの“A”

1. アクセシビリティ：

インターネットの普及およびハード面（タブレット等の無償提供）を促進することで、デジタル格差を縮める

2. 能力：

学習効果向上と生徒間での双方向コミュニケーションの機会を増やし、メンタル面を改善する

3. 適応性：

長期的で持続可能な教育システムを構築することで、生徒と教師が変化に適応できるようにする

■チームF

1. 持続可能な開発目標：

政府は、テクノロジーへのアクセスと適切な学習資料不足を補うため、地方の学生を支援する

2. 教師の質を向上させる：

教員研修を強化することで、教師に技術的スキルを身に付けさせる

3. カリキュラムを調整する：

各学生が自分の可能性を活用できるように、各学生が興味を持つ分野に対し、効果的で柔軟なカリキュラムを作成する

4. ストレスを和らげる：

農村部の学生や金銭的に恵まれない学生への財政援助

高速な Wi-Fi 設備を整備し、タブレット等の電子機器の提供

電波受信可能範囲強化によるラジオまたはテレビ番組の全国放送

5. 勉強をもっと面白くする：

より多くのコミュニケーションと双方向のやり取りができるように学生を奨励する

より多くの活動を提供することで、誰もがアイデアを共有して社会的スキルを向上できるようにする

ゲームなどの活用で講義を充実させる

生徒のプレッシャーを緩和するためのアクティビティを考案する

メンタルケアを提供する

■チームH 新型コロナウイルス感染症における包括的教育のための解決策

1. テクノロジープロジェクトとの協働によるインターネット接続プラントの構築

2. 柔軟なカリキュラムの確立

3. 教師に必要なトレーニングの提供

生徒の感想

・ I'm very honored to be a member of this amazing program and be able to meet amazing friends.

At first, I was very nervous to engage in discussion, but our leader told me not to feel pressure and be relaxed. They are matured and have a great leadership so that I can't believe they are same age as me. Also, I was fascinated by them speaking English fluently as a second language. I realized that my effort is never enough to reach the point where I want to be.

- ・この3日間を通して、オンラインを通してでも積極的になることができる自分を見いだせるようになりました。オンラインは人同士が直接会うことができないから、自分の気持ちをダイレクトに伝えることが難しいけれど、そんな中でもしっかりと自分の意見や気持ちを伝えることができたように思います。とても貴重な3日間で私にとって忘れられない思い出であり、一生記憶に残り続ける友達ができたと感じています。
- ・この3日間を通して、僕の英語力の伸びしろをまじまじと感じました。特に即興力と高度なリスニング力を今後は重点的に学習すべきだと思いました。それに加え、たくさんの情報をまとめて、専門的なトピックについて話すという経験が著しく乏しいと感じました。特に、他のメンバーの子たちは自国のことについて詳しく知っている反面、僕は日本について知識が少なすぎると感じます。今後は、日本について深く学ぶとともに、ディスカッションスキルを身に付け、小さな意見でも積極的に発言をすることに慣れていきたいです。英語でのオンラインディスカッションというのは大変難しい経験でしたが、世界には多角的な考えと高度な英語力を持ち合わせた人がたくさんいるのだと知り、自分のモチベーションを刺激するものとなりました。それと同時に、そのような機会を与えてくださったイオンワンパーセントクラブの方々、サポートしてくださった方々に本当に感謝したいです。このプログラムに参加し、やり遂げたということを糧に、今後も様々な場で還元できるように頑張りたいです。



【チームディスカッションの様子】



【講義の様子】



【参加証明書を手に記念撮影】



Ⅶ 成果と課題

1 WWL プログラムの検証

(1) 令和2年度の概要

WWL 事業では「学際的学び」「高度な学び」「協働グローバル創造活動」の取組を通じて Neo MAKS 力の育成を図っている。しかし、本年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、学校は6月から再開され、本事業の活動内容も大きく制限を受けた。令和2年度のプログラムの検証として、令和元年度に作成した Neo MAKS 力に関する質問に学際的科目や WWL 行事に関する項目を加えた質問紙調査を拠点校の3学年に行った。3年生は12月に実施し、国際科回答数77、普通科英系回答数74、理系回答数42、文系回答数13であった。2年生は2月に実施し、国際科回答数77、普通科英系回答数44、理系回答数65、文系回答数163であった。1年生の1回目は6月、2回目は2月に実施し、1回目の回答数は国際科79、普通科269、2回目は国際科76、普通科264であった。

3年生は1年次には SGH（国際科対象）の最終年度、2年次からは、普通科も含めて WWL 事業の対象となった。国際科生徒に関しては、2年次までは SGH 時とほぼ同じプログラムを体験したが、新型コロナウイルス感染拡大のため、2年次の年度末に予定されていた海外研修は全て中止となり、3年次の海外姉妹校と共同開催する高校生国際会議はオンラインによる実施となった。普通科生徒の中には2年次に課題研究に自主的に取組み、英語による発表に挑戦した生徒もいた。3年次は WHO 神戸センターの医務官によるオンラインの英語講義に理系の生徒も参加するなど、SGH から WWL 事業となり、広がりを見せた。2年生は、学際的科目である「学際国語」と「学際リサーチ」が開始された。本来海外研修などによる「グローバル創造協働活動」の中心となる学年であるが、1年次末のフィリピンフィールドワークや、台湾修学旅行も中止となり、海外姉妹校生徒との意見交換をする機会も減少した。課題研究発表等もオンラインによる参加となった。1年生は昨年度と同様に「情報の科学」と「家庭基礎」を学際的科目とし、1月には「探究の日」を実施した。

(2) 「学際的学び」「高度な学び」「協働グローバル創造活動」の検証

2年生対象の学際的科目の検証として、「自分の考え方や行動に影響を与えた科目や取組」について調査を行い、選択した生徒の割合を算出した（下記表①参照）。国際科2年生の「グローバルスタディーズ(GS)ⅡC」、普通科英系・文系対象の「学際リサーチ」は選択科目であり、それぞれ77人と18人が母数となる。「社会科」と「理科」が融合した科目である「学際リサーチ」の母数は少ないが、履修したほとんどの生徒の考え方や行動に影響を与えた科目であったことが示された。英語で課題研究を行う「GSⅡB」、「社会科」と「英語科」による連携科目である「GSⅡC」も、約半数の生徒が「影響を与えた科目」として選択した。「学際国語」はクラスサイズ40名の必修科目であるが、約3割の生徒が選択し、必修科目の中では高い結果となった。「総合的な探究の時間（総合）」における「学修インタビュー」は、3割の生徒が選択した。自分で主体的に取組む活動や、対話的な学びは生徒の考え方や行動に影響を与えることが示唆された。

表① 「自分の考え方や行動に影響を与えた科目」として学際的科目を選択した生徒の割合（ ）は母数

	科目(人)	総数	国際科	普通科英系	普通科文系	普通科理系
学 際 的 科 目	GSⅡB	77	49.4%			
	GSⅡC	31	54.8%			
	学際国語	200		27.3% (37)	29.4% (163)	
	学際リサーチ	16		85.7% (7)	100% (9)	
	総合 学修インタビュー	342	7.8% (77) 31.2% (77)	4.5% (37) 31.8% (37)	6.7% (163) 30.7% (163)	6.2% (65) 44.6% (65)

「高度な学び」として対面やオンラインによる講義やワークショップを実施した。2年生は、20代女性によるフィ

リピンの貧困問題の取組やオリンピックに関する講演、1年生は認知症に関する講演が生徒の印象に強く残ったことが分かった。自分たちと近い年代や、タイムリーな話題、実生活に関係するものは「影響を与える」ことが示された。WICO2020(国際コンファレンス)は、実際のオンライン会議を見学し、より直接的な関わりをした国際科2年生の割合が高い結果となった。また、WWL課題研究交流会は、ディスカッションファシリテーターを務めた普通科の6割強の生徒が選択しており、イニシアチブを取る経験は生徒の考え方や行動に影響を与えることが示唆された。比較対象の体育大会や校外学習の数値が示すように、体験的な行事は生徒により影響を与えることから、令和3年度の協働創造活動は生徒が深く関与できるように工夫が必要なが示された。

表② 「自分の考え方や行動に影響を与えた行事」として選択した生徒の割合 () は母数

	学年・科 総数	2年国際科	2年普通科	1年国際科	1年普通科
WWL 行事	講演会	10.4 %	6.8 %	9.2 %	4.6 %
	探究の日			36.8 %	14.0 %
	WICO 2020	24.7 %	5.6 %	1.3 %	2.3 %
	WWL 課題研究交流発表会	60 % (15)	66.7 % (6)	18.4 % (24)	
	WWL フォーラム	24.7 %	7.4 %	18.2 %	11.4 %
行事	体育大会	24.7 %	40.9 %	36.8 %	41.3 %
	校外学習			42.1 %	36.3 %

(3) Neo MAKS 力の分析

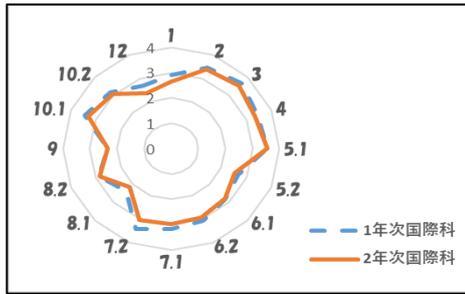
Neo MAKS 力に関する質問項目を 16 設定した。回答方法は 1～4 の 4 件法で、1 は「あてはまらない」 2 「どちらかといえばあてはまらない」 3 「どちらかといえばあてはまる」 4 「あてはまる」とした。学年内の経年比較と同時期の学年間比較を平均値と値の増減値を用いて行った。下記の表は Neo MAKS 12 の力と質問紙の項目番号と文面の対応表である。

	12 の力	項目番号と文面
Mind	①物事を多面的に見る力	1 物事を様々な角度から見ることができる
	②他者の痛みを理解しサポートする力	2 人には思いやりをもって接している
	③多様性の中で協働する力	3 複数の人数で話し合うと（一人より）良い考えが生まれると思う
	④経験と知識を融合させる力	4 何か問題が生じたとき、解決するために自分の知識や経験を生か（そうと）している
Attitude	⑤リーダーシップを取り責任をもって調整する力	5.1 議論の際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる 5.2 集団での問題解決場面では、率先してリーダー的な役割を担うことができる
	⑥柔軟性に富んだ問題解決力	6.1 複雑な問題に直面しても、問題の要点や構造を整理しながら考えることができる 6.2 問題解決などで、自分のやり方が、目的に合っているのかどうか途中で確認している
Knowledge	⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解	7.1 日本の文化や歴史について興味がある 7.2 世界各国の文化や歴史について興味がある
	⑧科学的知識を活用する力	8.1 科学的に考えたり、調べたりすることに興味がある 8.2 関心のある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を考えることができる
Skills	⑨ ICT を主体的に使う力	9 ICT(コンピューターやインターネットに関連する情報通信技術)に興味がある
	⑩コミュニケーション力	10.1 人に伝えるときに、分かりやすく説明しようとしている 10.2 よく知らない国の人たちと親しくなれる自信がある
Neo	⑪普遍的正義感	
	⑫新しい価値観を創造する	12 将来、新しい分野を研究したり、新しい産業を創り出したい

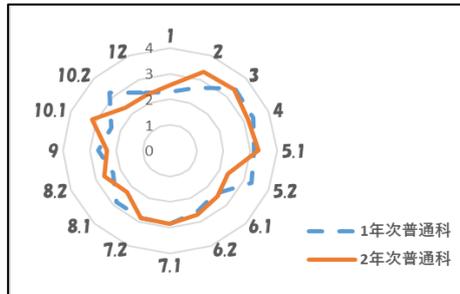
① 令和2年度2年生の変化（2年次と1年次の経年比較）

2年生の12の力を1年次と2年次の各項目の平均値の変化で検証した。グラフ1は国際科、グラフ2は普通科の1年次と2年次の各項目の数値を、グラフ3は1年次から2年次の値の増減を表したレーダーチャートである。国際科は各年次間の各項目の変化は少ないが、全項目の総数値（-2.27）は下降した。普通科の総数値は0.51下降だが、いくつかの項目に変化が見られた。グラフ3が示すように、項目2、8.2、10.1が上昇した。特に8.2と10.1に関しては総合の時間や本年度から開始された学際科目での取組の効果も考えられる。一方、項目5.2、8.1、10.2は下降しており、5.2と10.2に関しては海外修学旅行などの行事は中止となり、また部活動の活動も制限があったため、リーダーシップを発揮したり、交流する機会が少なかったことが理由として考えられる。

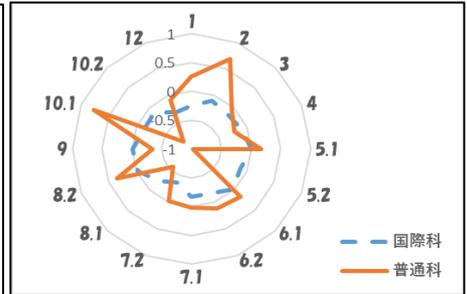
グラフ1



グラフ2



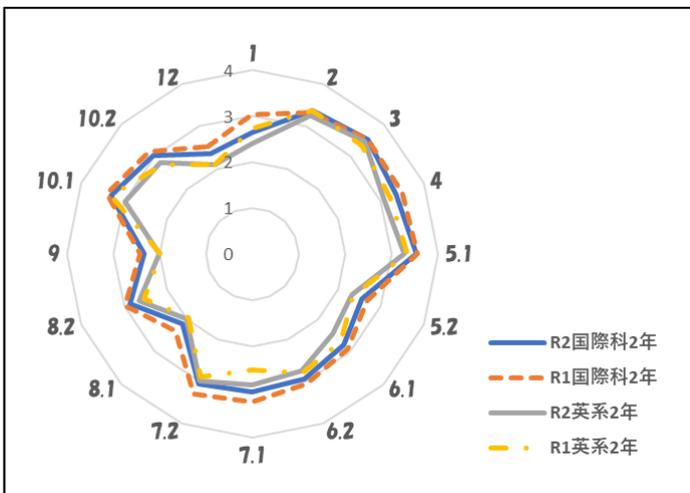
グラフ3



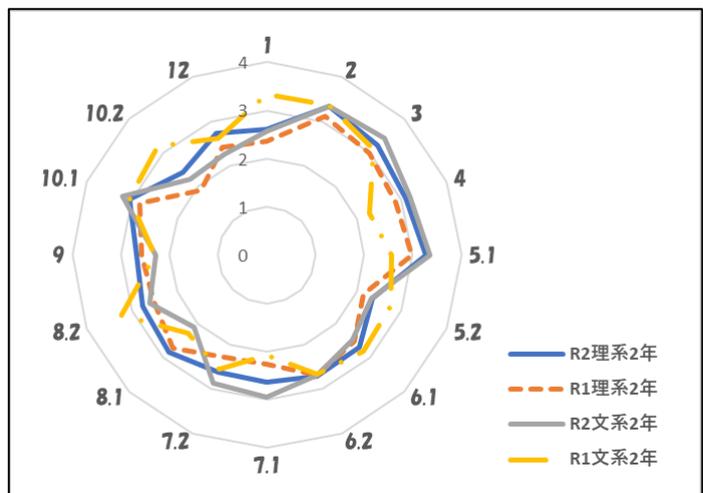
② 2年次における特徴（令和2年度2年生と令和元年度2年生の比較）

令和元年度から始まったWWL事業の2年次での効果と、新型コロナウイルス感染拡大による影響を検証するために、令和2年度2年生と令和元年度2年生の比較を国際科、普通科英系、理系、文系においてそれぞれ比較した。グラフ4は国際科と英系、グラフ5は理系、文系の令和2年度と元年度の2年次における各項目の数値を表したレーダーチャートである。国際科では項目2以外の値が下降し、総計値も2.14減少した。最も下降した項目は1（-0.39）で、物事を多面的にみる機会や経験が少なかったことが推察される。英系の総計値は微減（-0.58）であったが、項目1は国際科と同様に最も下降した（-0.34）。上昇したのは項目7.1（+0.33）であった。理系の総計値は3.87上昇し、下降した項目はなかった。理系の特徴としては項目8.1と12があげられる。専門性を活かそうとする姿勢の表れと考えられる。令和元年度2年生と比較して特に上昇した項目は10.2(0.53)7.1(0.37)7.2(0.35)12(0.3)であった。文系の総計値は微減（-0.3）だったが、変動が大きいことが分かった。顕著に上昇したのは項目4（+0.9）5.1（+0.78）7.1（+0.88）で授業や体験が影響していると推察される。下降が顕著な項目は1（-0.76）10.2（-0.95）8.2（-0.63）であり、新型コロナウイルス感染拡大のため、物事を多面的にみる機会や交流の機会が前年度よりも少なかったことも原因と考えられる。

グラフ4



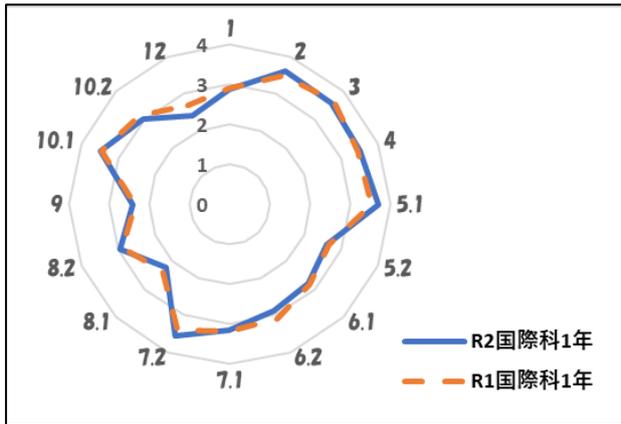
グラフ5



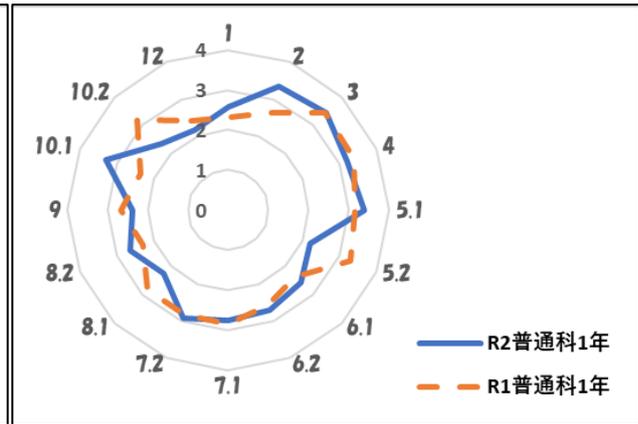
③ 1年次における特徴 (令和2年度1年生と令和元年度1年生の比較)

1年生の取組においても本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたため、令和2年度1年生と令和元年度1年生の2月の時点での調査の結果を比較した。グラフ6は国際科、グラフ7は普通科の各項目の数値を示したレーダーチャートである。国際科は総計においては-0.28の微減となったが、傾向に大きな変化はなかった。項目12の差(-0.29)が最も大きかった。普通科は、総計では-0.39の下降となったが、各年度によって数値が差がある項目が7個あり、異なる傾向が示された。令和2年度1年生の数値が高いものは項目2(+0.70) 8.2(+0.36) 10.1(+0.94)であり、総合で取組んだ探究や発表体験の影響も考えられる。令和元年度1年生の数値が顕著に高いものは項目5.2(+1.11) 8.1(+0.57) 9(+0.28) 10.2(+0.85)であり、実際にリーダーシップを発揮したり、交流したりする機会が確保されていたと推察される。

グラフ6



グラフ7

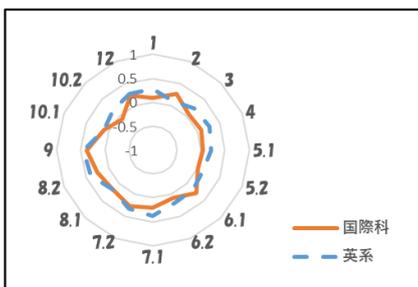


④ 3年次の特徴 (令和2年度3年生の2年次との経年比較)

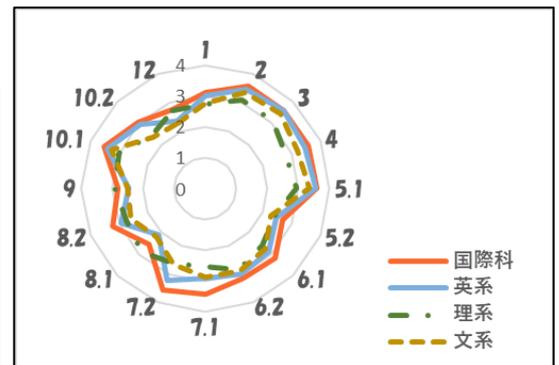
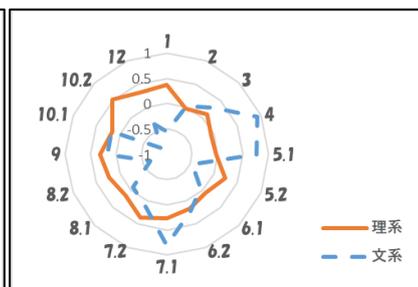
最終到達点である3年生の2年次との経年比較を通して今後の展望を考察する。国際科(+2.46) 普通科英系(+3.86)、理系(+3.22)、文系(+0.57)とも総数値においては3年次に上昇が見られた。グラフ8は国際科と英系、グラフ9は理系と文系の2年次から3年次の数値の増減を表したレーダーチャートである。グラフ8とグラフ9を比較すると理系と文系は項目によって差があり、特に文系が顕著である。グラフ10は各項目の数値をまとめたものである。MAKSの中のMind(人間力)は全般的に育成されているといえる。Attitude(実践力)では、調整力は備わっているがリーダーシップ力には課題が残る。Knowledge(知識)に関しては文理融合の取組、Skills(運用力)に関しては、ICT分野の取組の必要性が示された。

グラフ10

グラフ8



グラフ9



(4) 令和3年度の方向性

単年度のみの分析となるが、各学年において、新型コロナウイルス感染拡大による取組の制限が12の力の育成に影響を与えていることが示唆された。オンラインとオフラインを駆使した学際的協働の機会を創出することで、課題となる分野の力の育成をALネットワークを活用して図っていききたい。

2 令和2年度WWL事業取組の進捗状況の検証について

神戸大学 准教授 山下晃一（事業検証委員会）

本年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のため、教育段階の如何を問わず我が国の教育機関における国際交流の取組全般が中止や延期に追い込まれる等、非常に厳しい状況に直面しました。本事業も、当初に予定していた行事の多くが他国の学校との交流を中心とする取組であったため、事業の存続自体が危ぶまれる状態であったことと推察します。そのような中で、決して後ろ向きになることなく、こうした状況下においてもできることは何か、また、むしろこうした状況下だからこそできることは何か、拠点校である葺合高等学校の尽力はもとより、共同実施校、連携校、大学、企業が総力を結集して話し合い、知恵を絞り、当初の予定と遜色のない取組を展開されました。上記のような厳しい環境変化にあって、当初の事業計画と同等の効果を持つ代替的な企画を急遽、再立案・実施され、十分な成果を挙げたものと評価できます。主な具体的達成点として注目されるのは、以下の3点です。

第一に、国内外の複数校による取組の着実な遂行と、ネットワーク及び実施体制の拡充です。7月には「高校生国際会議（WWL International Conference Online : WICO）2020」を開催して、5カ国（地域）6校が参加してリスクマネジメント・国際協力をテーマに議論しました。臨時休業等で開催が危ぶまれていましたが、1学期のうちに迅速に開催できたことは、本事業の企画立案・実行能力の高さを示すものであり、本年度のその後の取組に関するノウハウの開発や自信につながったと推測できる点で高く評価できます。また、共同実施校・連携校や近隣のSSH校等（全12校）が参加した「第2回WWL課題研究交流発表会」も12月に開催されています。

さらに、参加校の増加も特筆に値します。9月には市内のインターナショナルスクールであるカナディアンアカデミー（神戸市東灘区）、10月には神戸市立六甲アイランド高等学校が、それぞれ連携校として加わりました。とりわけ後者の参加で、神戸市立高校（全日制）全校で取り組む体制が整ったこととなります。これにより、次年度に予定される本事業の集大成「World Wide Conference (WWC)」の実施に向けた体制が充実すると同時に、それぞれ特色を発揮してきた市立高校が相互に刺激し合い、さらに発展するための好機が作られたこととなります。事業完了後も持続的・自律的な市立高校教育の発展が神戸市全体で進むものと期待されます。

第二に、外部の産官学との積極的な連携の推進です。神戸市企画調整局つなぐラボ、(株)NTTドコモ、(株)みらい翻訳との連携の下で、拠点校の生徒がAI翻訳サービスに関する勉強会、ワークショップ、インターンシップを経験しています。1月には、神戸市（市長室国際部国際課）と（公財）神戸国際協力交流センターが主催した「神戸コミュニティフォーラム」において、拠点校の生徒複数（8名）がディスカッションのファシリテーターを務めるという榮譽に浴しました。これは外国人を含めた市民が英語で語り合う企画であり、そこで高校生が大人を相手に高校生がリーダーシップを発揮したこととなります。その他、拠点校と共同実施校（科学技術高等学校）が、神戸市とスペイン・バルセロナ市による連携国際ワークショップ「World Data Viz Challenge」に参加する等、各校の特色やこれまでの取組を活かし、さらに発展させる連携が進められました。

第三に、拠点校における学際的カリキュラムの発展です。グローバルスタディーズ、家庭基礎、情報の科学に加え、今年度から「学際国語」と「学際リサーチ」が開設されています。どちらも普通科2年生の英語系・文系の生徒を対象としています。前者は全員必修科目としてドキュメント資料の解析とプレゼンテーション作成について学びます。後者は選択科目として、人権問題・環境問題・経済問題に関する自分なりのソリューション提言を目指して学びます。これらは、既存教科の蓄積を土台として無理なく現実的に出発しながらも、従来の教科の枠に囚われず、相互を有機的に結びつけてイノベティブな発想を導き、さらにはグローバル化時代にふさわしい提案作成型の学びを目指すものです。この点で、学校の実情に出発点を置きながら、実行可能な文理融合・学際的カリキュラムを他校でも開発するための貴重な手がかりを与えてくれる経験になることが期待できます。以上より、前述のように十分な成果を挙げたと判断するものです。

「学際国語」 学習指導案

神戸市立葺合高等学校

授業者 藤井 稚津子

福岡 浩明

1. 日 時

令和 3 年 1 月 28 日 (木) 第 5 校時

2. 場 所

神戸市立葺合高等学校 国数講義室 (本館 2 階)

3. 対 象

2 年 3 組 45 名

4. 科目について

学際国語は、WWL の一環として、今年度初めて開講された。2 年生普通科英系・文系の生徒全員を対象としている。文理融合、教科横断的な学びを念頭に置きながら、テーマをリスクマネジメントに設定している。

国内外には多くの「課題 (リスク・禍)」が存在するが、それを他人ごとではなく「自分ごと」として受け止め考える姿勢を学際国語での学習を通して培いたい。

実際には、国内外における「課題 (リスク・禍)」について、日本語で書かれた文章または資料を総合的に読解し、また、新たな視点からそれらの問題を考察できるよう、多様な方法知の習得にも取り組む。主体的・対話的で深い学びとなるよう、いわゆる講義型は少なくし、ペアワークやグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等、生徒たちが活動の主役になることも目指した。

学校設定科目のため、教科書がなく、何も無いところから創っている科目であり、教科担当者もずっと手探りの状態である。しかし、逆に「何でもできる、取り組める」ことをいかして、新型コロナウイルス感染症をめぐる課題、SDGs の課題、スポーツの課題、日本語の課題など、幅広い領域の資料・文献を読み、考え、意見交換してきた。

今回の公開授業では、2 学期に取り組んだ「スポーツが抱える諸課題」の中で登場した e スポーツを巡る問題でディベートを行う。ディベートの練習は不足気味であるが、楽しんで取り組んでほしい。

5. 生徒観

「この系 (英系) に入って勉強したい」という強い意識を持って進級し、一つのクラスとなったメンバーであるためか、意欲的な生徒が多く、行動も活発である。クラスメートががんばっている姿に触発されてさらになんぼろうとする様子もよく見られる。個人差はもちろんあるが、この一年間、前向きにさまざまな活動、課題に取り組んできた。教え合ったり話し合ったりといった活動が非常に自然にできる。

難点を一つだけ挙げると、一クラスの人数が 45 人で、少し目が届きにくいことであろう。

6. 学習計画

小論文作成準備と並行してディベートに関する基礎的な事柄、ルールなどプリントを使って確認した。ルール厳守を目指す

- 1 時間目 小論文関係／ディベート予告
- 2 時間目 小論文関係／席替え（チーム作り）・「ディベートって何？」
- 3 時間目 「ディベートのルール」「フローシート」「判定」
試合の準備 ①論題の中身を分析する ②メリット・デメリットを考える
③リンクマップを作成する
- 4 時間目 ディベート第1試合／小論文関連
- 5 時間目 ディベート第2試合／小論文関連
- 6 時間目 ディベート第3試合／小論文関連・・・本時

7. 本時の指導内容

ディベート 論題「e スポーツをオリンピック競技に導入すべきである。是か非か。」

「ディベート甲子園」中学の部のフォーマットを使用して試合を行う。

	生徒の活動	教師の活動	留意点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・くじ引きで役割を決める ・試合開始のための準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・フォーマットを板書する 	<ul style="list-style-type: none"> ・試合進行は生徒の手で行う
展開① 40分	<ul style="list-style-type: none"> ・係生徒による試合開始宣告 ・肯定側立論（4分） ・準備（1分） ・否定側質疑（2分） ・準備（1分） ・否定側立論（4分） ・準備（1分） ・肯定側質疑（2分） ・準備（1分） ・否定側第一反駁（3分） ・準備（2分） ・肯定側第一反駁（3分） ・準備（2分） ・否定側第二反駁（3分） ・準備（2分） ・肯定側第二反駁（3分） ・判定・講評 ・係生徒による試合終了宣告 	<ul style="list-style-type: none"> ・見守る ・もし進行上、問題が生じた場合、フォローする ・互いの健闘を称え、ひじタッチを促す 	<ul style="list-style-type: none"> ・聴衆の生徒もフローシートを記入する ・ジャッジの生徒が判定と講評を行う
展開② 4分	<ul style="list-style-type: none"> ・進行中の小論文作成のつづき 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々に対応する 	
終了 1分	<ul style="list-style-type: none"> ・原状回復 ・次回の予告 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示し、手伝う 	

「家庭基礎」 学習指導案

神戸市立葺合高等学校

授業者 伊知地 薫

1. 日 時

令和3年1月28日（木） 第5校時

2. 場 所

神戸市立葺合高等学校 家庭科総合実習室

3. 対 象

1年7, 8組 26名

4. 題材名

家庭生活と社会

5. 題材と目標

家庭生活について家事労働分担シミュレーションを行う。また、家庭生活を取り巻く社会の現状やSDGs 17の目標の一つであるジェンダー平等について知る。これらを通じて家庭を持つか、持たないか、持つとすればどのような家庭生活を送るのかを想像させることを一つ目の目標とする。また、多様な生き方が選択できること、性別役割意識が存在すること、など人生設計に欠かせない要素を本授業を通じて気づき、考えさせることを二つ目の目標とする。

6. 生徒観

本生徒は学習意欲が高く、家庭基礎にも真面目に、また素直に授業に取り組んでいる。進学意識が高く、卒業後の進路希望を考えている生徒が大多数である。将来の社会の重要な一員になる要素を多分に持ち合わせている生徒達である。一方、将来どのような家庭生活を送りたいと考えているのか、と問われると考えたこともなかったり、考えていたとしても身近な家族などから将来を想像している場合がほとんどで、様々な選択肢、価値観が存在することに気づいている生徒は少ない。15, 16歳という年齢を考えると当然とも言える。

7. 題材の評価基準

家庭生活と社会への 関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
家庭生活について関心を持って学習活動に取り組もうとしている。 家庭生活と社会とが関わり合っていることについて関心を持つようとしている。	自己の将来の家庭生活のあり方について考えることができる。	家庭生活と社会とのつながりについて理解し、基礎的、基本的な知識を身につけている。

8. 本時の学習展開

	具体的学習活動	指導・支援・評価	Neo MAKS
導入 (2分)	2人ペアになる。夫役、妻役を決める。	男女にこだわらず、夫役、妻役を決定するように伝える。	
展開1 (10分)	渡された家事・育児一覧表を見て、どちらがその仕事をになうか話し合いを行う。 最後の家事・育児まで分担できたところで集計し、夫役、妻役の仕事の個数、時間を集計する。 自分たちのペアワークを終えて気づいたことをまとめる。	共働き家庭の設定で振り分けを行うように伝える。(フルタイム勤務かパートタイム勤務かについては各自で考えさせる) 家事の個数だけでなく、費やす時間、家事の内容にどのような特徴が出てきたかに注目するように伝える。	⑩コミュニケーション力
展開2 (15分)	6人1グループになり、それぞれのペアの発表を聞く。3グループの特徴をまとめる。グループ代表が発表を行う。 発表を聞き、メモをとる。全体を通じて家事労働分配にどのような特徴が見えるか考える。	同じような結果が揃ったか、違いがあったか、要素は何かを考えるよう伝える。 それぞれのグループごとの違いに着目し、メモをとるよう促す。	①物事を多面的に見る姿勢 ⑩コミュニケーション力
展開3 (15分)	配付された資料プリントを読み、ジェンダー平等について考える。 コロナ禍で、特に女性に顕著に表れている問題について動画資料を視聴する。	資料を提示し、解説を交えながら家事労働からジェンダーへの視点を持つように働きかける。多様な価値観があることを伝え、また、自分の価値観はどこにあるのかを考えさせる。コロナ禍で特に女性に顕著に表れている問題やSDGs 17のゴールの中にジェンダー平等の実現が盛り込まれていることを紹介する。	①物事を多面的に見る姿勢
まとめ (8分)	資料を読んで考えたこと、自分の将来の家庭生活について考え、記述する。	将来の人生設計につながるよう考えさせる。	⑥柔軟性に富んだ問題解決力

GS1A 学習指導案

神戸市立葺合高等学校
授業者 エラン ジャンセン
仲村 智子

1. 日時

令和3年1月28日(木) 第5校時

2. 場所

神戸市立葺合高等学校 CALL1

3. 対象

1年2組 39名

4. 探究活動の目的

- ・グループで探究活動に取り組む事によって来年度の個人での探究活動の進め方を学ぶ。
- ・今日問題となっている地域の環境問題について理解を深め解決策を探る。
- ・Neo MAKS (養われよう期待される力)
 - ◆ Mind
 - ・物事を多面的に見る姿勢 ・多様性の中で協働する姿勢
 - ◆ Attitudes
 - ・経験と知識を融合させる能力 ・柔軟性に富んだ問題解決能力
 - ◆ Knowledge
 - ・科学的知識を活用する力
 - ◆ Skill
 - ・コミュニケーション力 ・ICTを主体的に使う能力

5. 活動計画

時間	内容	1組	2組
1	導入 背景知識 【ミニ講義① 私たちを取り巻く環境問題】	11/2	11/12
2	モデルプレゼンテーション 情報収集	11/9	11/19
3	リサーチクエスチョンを作成する 【ミニ講義② リサーチクエスチョンの作り方】	11/16	11/26
4	リサーチクエスチョン完成	11/30	12/3
5	リサーチ 【ミニ講義③ プレゼンテーションの流れ】	12/14	12/17
6	探究活動 準備	1/18	1/14
7	リハーサル プレゼンテーション改訂	1/25	1/21
8	プレゼンテーション 1 (グループ1~5) (本時)	2/1	1/28
9	プレゼンテーション 2 (グループ6~10)	2/8	2/4
10	振り返り活動 来年に向けて	2/22	2/18

6. 本時の目標

- ・直面する環境問題と他の生徒が提案する解決策に関して理解を深めることができる。
- ・プレゼンテーション力を上げることができる。
- ・プレゼンテーションについて、内容を深めるような質問をすることができる。

7. 授業計画

時間	活 動
13:00 -	あいさつ 配置
13:05 - 13:13	プレゼンテーション 1 質疑応答
13:13 - 13:21	プレゼンテーション 2 質疑応答
13:21 - 13:29	プレゼンテーション 3 質疑応答
13:29 - 13:37	プレゼンテーション 4 質疑応答
13:37 - 13:45	プレゼンテーション 5 質疑応答 ● プレゼンテーション 6分 ● 質疑応答 2分
13:45 - 13:50	まとめ

Teaching Plan for GS1A

Date: January 28

Instructor: Aaron Jansen,

Tomoko Nakamura

Class: 1st grade Class 2

Time: 13:00 ~ 13:50

1. Objectives of the research project

1. To work on a research project with group members to prepare for the individual research project next year.
2. To understand the environmental problems we are facing today, especially those affecting the communities where we live.
3. Targeted Neo MAKS:
 - ◆ Mind Seeing things from different perspectives
 Collaborating with others with a variety of values
 - ◆ Attitudes Integrating experience and knowledge
 Improving problem-solving skills
 - ◆ Knowledge Utilizing scientific knowledge
 - ◆ Skills Communicating with others
 Utilizing ICT (Information and Communication Technologies)

2. Allotment

	Content	Class 1	Class 2
1	Introduction / Collect information [Mini-lesson 1 About environmental problems]	11/2	11/12
2	Model Presentation [Team Gandhi] Collect information / Brainstorming	11/9	11/19
3	Make a research question [Mini-lesson 2 How to make a research question]	11/16	11/26
4	Make a research question / Research	11/30	12/3
5	Research [Mini-lesson 3 How to organize ideas and make a presentation]	12/14	12/17
6	Prepare for presentation	1/18	1/14
7	Rehearsal / Revise	1/25	1/21
8	Give presentation [Group 1 ~ Group 5]	2/1	1/28
9	Give presentation [Group 6 ~ Group 10]	2/8	2/4
10	Year-end reflection and preparation for next year (Choose the SDG you would like to focus on in next year's individual research project)	2/22	2/18

3. Aims of Today's Lesson

In this lesson, students will be expected to:

- ◆ understand the environmental problems they are now facing and the solutions their classmates offer.
- ◆ improve their presentation skills.
- ◆ ask meaningful questions about the presentations.

4. Teaching Procedure

Time	Activities
13:00 -	Greeting Setting
13:05 - 13:13	Presentation Group 1 Question-answer session
13:13 - 13:21	Presentation Group 2 Question-answer session
13:21 - 13:29	Presentation Group 3 Question-answer session
13:29 - 13:37	Presentation Group 4 Question-answer session
13:37 - 13:45	Presentation Group 5 Question-answer session
	<ul style="list-style-type: none">● Presentation 6 minutes● QA session 2 minutes● Audience<ul style="list-style-type: none">◇ Listen to each presentation carefully and fill in the listening worksheet.◇ Ask questions after each presentation
13:45 – 13:50	Consolidation

情報の科学 学習指導案

神戸市立葺合高等学校

授業者 高橋 義人

尾久土 美紀

穴戸 美津子

1. 日時

令和3年1月28日(木) 第6校時

2. 場所

神戸市立葺合高等学校 第1コンピュータ室(本館3F)

3. 対象

1年1組(国際科)40名

4. 科目について

「情報の科学」は学習指導要領での教科「情報」の科目として、本校では現行カリキュラムがスタートして以来、開講をしている。教科「情報」としての教育目標は、情報社会を構成する一員として、社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育成することであり、科目「情報の科学」では、問題解決を行うために情報と情報技術を効果的に活用する学習活動やそのために必要となる科学的な考え方を身に付けさせ、さらに情報社会を支える情報技術の役割や影響の理解及び情報モラルを身に付ける学習活動を重視している。

5. 本時の学習内容に関する背景

現代社会において、今やコンピュータのない世界は考えられず、さらにニューラルネットワーク構築のディープラーニングによるAIが世界中のあらゆる分野で活用され始めている。これはコンピュータ好きの理系だけに関わる問題ではなく、文系理系を超えたすべての現代人が、今後自らの生活の中で大きく関わらざるを得ない社会変革である。日本では、新学習指導要領で小学校からのプログラミング教育が話題となっているが、プログラマーを養成するという意味ではなく、プログラミング学習を通して、この社会変革に興味関心を持ち、対応できる能力を開発・定着をはかっている。

6. 本時までの習得内容

対象クラスは、2学期に「問題解決のためのコンピュータ活用」という単元の中の「問題解決のための手段」で『アルゴリズムとプログラミング』を習得した。その中では、アルゴリズムとフローチャートの基本と、VBA(※1)によるプログラミングを習得した。(※1 VBA: Visual Basic for Applicationsの略。Microsoft Officeシリーズに搭載されているプログラミング言語)

また本時まで、『スクラッチとドリトルではじめるプログラミング』(日本文教出版社)を用いて、スクラッチの基礎とゲーム作成の基礎を学んでいる。

7. 本時の教材について

小学校のプログラミング教育でも利用されることが予想される、プログラミングツール「Scratch(スクラッチ)」を用いる。ScratchはMITメディアラボが開発したプログラミング言語学習環境で、複雑なプログラミング言語の文法が書けなくとも、準備された「ブロック」を正しく配置することだけで直感的にプログラムを作ることができる。

8. 学習計画（計8時間）

- ・スクラッチの紹介と基本操作習得（1時間）
- ・サンプルプログラムによるゲーム作成の基礎編（2.5時間）
- ・オリジナルゲーム作成のための計画書作成（0.5時間）
- ・オリジナルゲーム制作（3時間）・・・本時はその第1時間目
- ・Wordでの取扱説明書作成および、ゲーム実施による相互評価（1時間）

9. 本時の指導内容

	生徒の活動	教師の活動	留意点
導入 7分	<ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボードに書かれたことをノートに書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリジナルゲームを作る上での「ノルマ」を板書する。 <ul style="list-style-type: none"> (1)スコアの導入 (2)ゲームオーバーの導入 ・提出まで本時を含めて3時間であることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価に対する考え方も同時に伝えておく
展開 3分 35分	<ul style="list-style-type: none"> ・Scratch上のファイル保存機能を作り、自分の学籍番号を含んだファイル名で保存する。 ・ゲーム作成書を元に、自由作成をする。 ・インターネットの解説サイトやScratchのチュートリアルファイルから作成のヒントを得る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・提出用ファイルを作成させる。 ・机間巡視をし、進捗状況の確認をする。 ・生徒からの質問をうける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の質問に対し、自ら解決するように導く ・ファイルの上書き保存を促す。
終了 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・ファイルを上書き保存する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上書き保存の方法を再確認したうえで、実行させる。 ・次回予告 	

「学際リサーチ」 学習指導案

神戸市立葺合高等学校

授業者 定時 秀和

妹尾 泰明

1. 日時

令和3年1月28日(木) 第6校時

2. 場所

神戸市立葺合高等学校 2F 選択2D教室

3. 対象

2学年 英語系、文系選択者 16名

4. 科目について

学際リサーチは教科「学際」として、今年度初めて開講した授業であり、2年次の普通科英語系、文系生徒対象の選択科目である。教科「学際」の目標はイノベティブでグローバルなリーダーに必要な、新しい価値観を創造する力を複数科目で育成することである。また科目「学際リサーチ」の目標は人権、環境、経済に関するテーマについて、社会的視野と科学的視野から考察することにより、人権問題や環境課題、経済問題に対しての本質的な解決方法を考え、社会に提案することである。

日本のみならず、世界における様々な課題に対し、科学的視野、社会的背景を取り入れたリサーチや分析を行い、生徒間による議論を通して互いの価値観を認め合う。また、その問題点や課題に対する解決策についてプレゼンを通して提案したり、論文としてまとめたりすることにより、新たな価値観の創造を目指す。

5. 生徒観

生徒は英語系生徒7名、文系生徒9名の計16名である。生徒は真面目な生徒、学習意欲が高い生徒が多い。「プラスチックゴミの問題」について議論したときは比較的活発な意見交換が見られたが、「日本の移民受け入れ拡大」については具体的な解決策を出すことに苦労した。生徒たちにとって、身近でイメージしやすいものとそうでないものの差が見られた。また、授業を通してリサーチ力、特に科学的視点や歴史的背景に注意した分析ができるようになってきた。本授業では、様々な視点から課題に対する解決策を議論を通して提案することを目標にしたい。

6. 評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
与えられたテーマについて関心を持って学習活動に取り組もうとしている。	科学的視野、歴史的背景などの視点から多面的に物事を捉え、自分の意見を述べることができる。	与えられたテーマに対する基礎的、基本的な知識を身につけている。

7. 本時の指導内容

テーマ「With コロナ時代を生きる私たちに求められるもの、求められること」

	具体的学習活動	指導・支援・評価	Neo MAKS
導入 2分	本時の流れの説明		
展開①-1 社会的知見より 10分	「新型コロナウイルス感染状況とその問題について」プリントを使用し、データ等を分析しながらその問題点とあるべき社会の姿を模索する。	プリント№5およびペーパーサートを使用し、新型コロナウイルス感染拡大に伴う、世界の状況と日本の状況を分析する。また、その中で自分が最も問題だと考えるものから、with コロナ時代に必要な“何か”を導き出させる。	①物事を多面的に見る姿勢 ⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解
展開①-2 科学的知見より 10分	「細菌とウイルスの違い」 「新型コロナウイルスとは」等についての説明を聞く。	パワーポイントを用いて説明を行う。	①物事を多面的に見る姿勢 ⑧科学的知識を活用する力
展開② グループ議論 ① 15分	決められたグループに分かれる。 グループごとに議論を行う。各生徒が調べてきた情報と展開①で得た情報を元に意見交換を行う。	ファシリテーターを決めさせ、時間内に活発な意見交換ができるよう支援する。 机間巡視を行い社会的、科学的知見に基づいた話になるよう促す。	①物事を多面的に見る姿勢 ⑥柔軟性に富んだ問題解決力 ⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解 ⑧科学的知識を活用する力 ⑩コミュニケーション力 ⑫新しい価値観の創造
展開③ 発表 10分	1グループ2分でグループ代表者による発表を行う。	30秒前に告知し、2分内で発表できるように支援する。	①物事を多面的に見る姿勢 ④経験と知識を融合させる能力 ⑫新しい価値観の創造
展開④ まとめ 3分	本時のまとめを行う。		

グローバルスタディーズⅡC【GSⅡC】学習指導案

神戸市立葺合高等学校

授業者 北風 公基

森下 知美

アイザック トンブルソン

1：日時 令和3年1月28日（木） 第6校時

2：場所 神戸市立葺合高等学校 国際交流棟1F CALL2教室

3：対象 国際科2年生グローバルスタディーズⅡC選択者（男子9名女子23名 計32名）

4：科目について

グローバルスタディーズⅡCは、地歴公民科教諭、英語科教諭とALTの3名が担当する科目内連携の学校設定科目である。生徒が複眼的な視野を育成し、社会の問題解決を目指して、主体的に学び考える日本語と英語による授業を展開している。

5：本時の目標

本時まで「地球帝国皇帝・総選挙」「姉妹校オーストラリア・メルボルンの高校生との協働学習」

「News Talk」（新聞記事を各自が選択し、その内容について要約・ディスカッションを英語・日本語で行う）など様々な取り組みを通じて政治・経済・環境・人権・教育に関する諸問題をテーマに取り上げ、考察してきた。また合わせて、姉妹校であるオーストラリア・メルボルンのウエストボーングラマーハイスクールとの協働学習が、オーストラリアオリンピック委員会主催である、オーストラリアの学校と今回のオリンピック主催国である日本の学校とを結ぶ交流プログラムである「オーストラリア・オリンピック・コネクト2020」の一環として行われたことをふまえ、2学期後半から「オリンピックの歴史」「オリンピックの長所と短所（問題点）」について学んだ。

本時は夏に予定されている東京オリンピックがコロナ禍で行われるであろうことをふまえ、上記のオリンピックについての学習事項だけでなく、「コロナ禍の日本及び世界」について経済・環境・社会・文化の観点からその現状を調査・分析し、来たるオリンピックをどのような形で迎えるべきか自分の意見を持ち、グループ内で議論し、考察したものを発表する。なお、本時の発表は、日本語・英語の両方を使用して行い、両方の言語の表現力をより身につけるということも本時の目標とする。

6: 指導内容

	生徒の活動	教師の動き	指導上の留意点	Neo MAKS
[導入] 3分	<ul style="list-style-type: none"> 発表についての注意事項を確認する。 本日発表のグループは原稿、パワーポイント、役割分担等最終確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 本日の発表における注意事項を説明 本日発表の3グループを発表する。 (森下) 	<ul style="list-style-type: none"> 重要な共通理解事項は事前に板書しておく 簡潔に説明 	
[展開] 2分 10分 3分 2分 10分 3分 2分 10分 3分	<ul style="list-style-type: none"> 最初のグループは発表準備をする。 4人1グループで発表を行う。 聞き手(発表グループ以外の生徒)は質問や意見を述べる。 次の発表グループは発表準備をする。 4人1グループで発表を行う。 聞き手(発表グループ以外の生徒)は質問や意見を述べる。 次の発表グループは発表準備をする。 4人1グループで発表を行う。 聞き手(発表グループ以外の生徒)は質問や意見を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 司会進行(ALT)と計時(森下)を行う 生徒の発表及び質疑応答の様子を観察し、評価をする。(全員) 	<ul style="list-style-type: none"> 計時担当は5分・8分のタイミングで合図をする 10分を過ぎた時点で発表は終了させ、スムーズに質疑応答へ移行するようにする 質疑応答では積極的な参加をするよう生徒に働きかける 	<ul style="list-style-type: none"> ①物事を多面的に見る姿勢 ③多様性の中で協働する姿勢 ④知識と経験を融合させる能力 ⑤リーダーシップを取り責任を持つて調整する力 ⑥柔軟性に富んだ問題解決力 ⑨ICTを主体的に使う能力 ⑩コミュニケーション力 ⑫新しい価値観の創造
[総括] 2分	<ul style="list-style-type: none"> 教師のコメントを聞く 次回発表のグループについて確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 本日の発表内容や生徒の取り組みについてコメントする(全員) 	<ul style="list-style-type: none"> 「良い点」と「改善点」を両方伝え、次時の残りのグループの発表につなげる。 	

Global Studies II C 【GS II C】 Lesson Plan

Kobe Municipal Fukiai High School

Kimimoto Kitakaze

Tomomi Morishita

Isaac Tombleson

1 : Time January 28th, 2021 (Thu) Sixth Period

2 : Location Kobe Municipal Fukiai High School International Exchange Area 1st floor

Call 2 room

3 : Class International Course 2nd Year Global Studies IIC (32 students)

4 : About the subject

Global Studies II C is a special elective subject coordinated by teachers from History and Social Studies, English and an ALT. Students gain a multifaceted view on solutions to societal issues and learn independently in both English and Japanese.

5 : Today's Goals

This course has covered topics in politics, economics, environmental issues, human rights and education through class activities such as “World Mock Election”, “Educational Exchange with High School Students in Australia” and “News Talk”. As one of the activities mentioned is a part of the “Australia Olympic Connect 2020” program, which aims to connect schools in Australia with those in the 2020-Olympic-games host country of Japan, students also learned about the history and advantages and disadvantages of hosting the Olympic Games.

Today's activity is a student group presentation related to the upcoming Olympic Games in Tokyo, 2021. Currently, Japan is going to host the Olympic Games (Tokyo Olympics) in 2021, next summer. However, as world is still struggling with the COVID-19 pandemic, students have researched some factors which are related to holding the Olympic Games during such a pandemic and analyzed the situation. Considering what sensible actions / decisions should be made in planning this event, students are expected to work with their classmates and make a plausible, creative suggestion for the 2021 Olympic Games.

6 : Lesson Outline

	Students	Teachers	Notes	Neo MAKS
[Intro] 3 min	<ul style="list-style-type: none"> • Confirm points to be considered for today's presentation • Students who are going to make a presentation in today's class check their scripts, PPT slides and their roles. 	<ul style="list-style-type: none"> • Explain points to be considered for today's presentation and announce 3 groups that are going to perform in today's class (JTE) 	<ul style="list-style-type: none"> • Write points to be considered for today's presentation on the white board prior to the class • JTE explains briefly 	
[Activity] 2 min 10 min 3 min 2 min 10 min 3 min 2 min 10 min 3 min	<ul style="list-style-type: none"> • First group of students prepare for their performance. • Using PPT slides, students (4 people a group) make a presentation. (English + Japanese) • Audience members ask questions or express their opinions • Second group of students prepare for their performance. • Using PPT slides, students (4 per group) make a presentation. (English + Japanese) • Audience members ask questions or express their opinions • Third group of students prepare for their performance. • Using PPT slides, students (4 people a group) make a presentation. (English + Japanese) • Audience members ask questions or express their opinions 	<ul style="list-style-type: none"> • MC (ALT) and timekeeper (JTE) • Contribute to facilitating students' performances. (ALL) • Observe and evaluate students' performances. (ALL) 	<ul style="list-style-type: none"> • Give instructions and lead the class in English. (ALT / JTE) • Lets students know the timing (5 mins passed / 8 mins passed) (JTE) • Tell students to finish their presentation when 10 mins passed and to go on to the QA session smoothly. (ALT / JTE) • Encourage students to participate in the QA session actively (ALL) 	① ③ ④ ⑤ ⑥ ⑨ ⑩ ⑫
[End] 2 min	<ul style="list-style-type: none"> • Listen to comments from teachers • Check which groups will make a presentation in the following class 	<ul style="list-style-type: none"> • Comment about students' presentations and their performance 	<ul style="list-style-type: none"> • Let students know both good points and points to be improved. (ALL) 	

資料 1 ②

第 2 回 WWL フォーラム 発表要旨

1 年生探究

1 A	「MAESTRO～夢を見つめる自分の姿～」	1 年 4 組 笠原 優太
「大人になったらプロオーケストラの指揮者になる」と小学校の卒業式で宣言した僕は、今でもこの大きな夢を持ち続けています。では、一体この大きな夢を実現するためにはどんな「自分」になれば良いか、いろいろな視点で自分を見つめ直します。		
1 B	「無能による『脱』無能論」	1 年 7 組 丹治 和貴
私の中学時代の経験を基に、世の悩める無能達に「無能脱却」への私なりの見解をお教えいたします。無能脱却に必要な、正しく経験値を得る方法に関するリサーチです。		
1 C	「夢を追い続ける」	1 年 9 組 松田 卓也
自分には小さい頃からいつも夢があった。変わることはあっても。バカにされたりしたけれど決して諦めない。夢をもつと毎日が楽しくなり、人生の目標もできる。夢の大切さ、素晴らしさを伝えます。		
1 D	「お札の顔の向き」	1 年 1 組 古川 桔平
お札には必ずといってよいほど肖像画が描かれる。しかし、そのどれもが右なめ前を向いているのはなぜだろう。正面画ではだめなのだろうか。また、笑顔ではだめなのだろうか。		
1 E	「女子の『カワイイ』はなぜ男子と違うのか」	1 年 2 組 神山 颯太
猫や飲み物からおじさんまで、女子の「カワイイ」の対象は多岐にわたり、一部男子には理解できないものがある。どうして女子と男子の「カワイイ」は食い違うのか。身近な例を通して考えてみる。		
1 F	「睡眠時間について」	1 年 9 組 田中 仁菜
毎日の睡眠時間はどれだけ重要で、どんな影響を日常に与えるのかについて調べました。中学生から高校生になって大きく変わった睡眠時間の大切さを改めて見直す機会になればいいなと思います。		

2 年生探究

2 A	女性管理職を増やすための職場環境づくりの提案	2 年 1 組 手束 恵蘭 西村 美咲
日本のジェンダーギャップ指数は 153 か国中 121 位であり、世界的に見ても男女間格差が大きい。中でも女性管理職の少なさが大きな要因となっている。しかし、より多様な人材を集めること、多くの女性が管理職に興味を示していることなどの観点から、企業は女性管理職を増やす努力をすべきだと考えた。女性にとって職場の環境を良くするために、テレワークの活用と託児所の設置を提案する。		
2 B	日本男性の育児休暇取得を増やす仕事環境づくり	2 年 2 組 井本 久美子 辻本 玲綺
現在、日本人男性の育児休暇取得率は女性の 82.2% に比べ、6.16% である（厚生労働省、2018）。研究を進めると、日本の男性育児に対する政策は世界でもトップレベルであることが分かった。そこで私たちは、政府による政策から職場の環境に焦点を当て直した。現在いくつかの会社で行われている対策を参考に、育児後の社会復帰も視野に入れた環境を整えることを提案する。		
2 C	コロナ禍における SDG s 私もやってみた！「買い物編」	2 年 7 組 木下 真杏
コロナ禍における SDGs について、私たちの生活の基本となる買い物という点から考え、少し考え方を変えれば誰にでもできる SDGs を実践しました。		
2 D	シャンプーから始める SDG s ～エシカル消費と環境配慮～	2 年 7 組 楠本 幸樹
私は「今日から始めよう社会貢献」の理念の下、夏休み期間を利用して消費者としてできる SDGs の活動を行いました。コロナ禍におけるアフリカ諸国の貧困問題と健康問題、そして昨今、日本でも話題になっているプラスチックゴミによる環境問題。今回はこれらの問題を解決に導くために今すぐ起こせるアクションを紹介します。		
2 E	男女ともに働きやすい職場とは	2 年 8 組 内田 圭美

今の日本では、約2人に1人が出産を機に退職している。その一方、出産後も働きたいと考えている人は年々増加している。育児と仕事を両立しやすい職場を作るために、私たちにできることは。

2 F **近眼を増やさないために** **2年9組 東島 愛奈**

近年子どもの近眼が増加しており、大きな問題になっている。しかし、学校では何の対策もされていない。このままでは世界人口の半数が近眼になってしまうというデータもある。そんななか、近眼対策に最も有効な味方が身近にあった。いったいそれは何なのか。そして私たちは近眼をどのように防ぐことができるのか。

3年生・共同実施校・連携校 探究

3 A **コロナ禍における経済支援** **3年2組 赤松あおい**

現在の日本では、新型コロナウイルス流行による経済悪化が深刻である。営業時間の短縮や補助金の不足が原因で所得が減少し、失業者や倒産が増加している。この現状を踏まえ、私たちは、学生も参加できる小規模投資を提案する。具体的には、「未来の食券」や「神戸市まちの元気応援プロジェクト」というプラットフォームを利用し、実際に私たちが飲食店に投資する。同時に、動画やポスターによる広報活動で、投資を促進することも目標としている。

3 B **コロナ禍における「家庭内暴力と児童虐待」問題** **3年1組 小島 あづみ**
高藤 莉子

新型コロナウイルスの流行に伴う外出自粛により、家族と過ごす時間が以前より大幅に増えた今、児童虐待や家庭内暴力の相談件数が全世界的に増加している。日本も例外ではないものの、政府による目下の対策は十分であるとは言えない。では、どのような対策が効果的であるのか、コロナ前・コロナ後の日本と海外諸国における家庭内問題への対応をそれぞれ比較した上で考察した。

3 C **ドラマの主題歌がもたらす経済効果について** **須磨翔風高等学校**
後藤 夢葉

皆さんは普段、どんな視点でテレビドラマを見ていますか？この研究では、「ドラマ

の主題歌」をテーマとして取り上げ、視聴率やCDの売り上げを調査し、テレビドラマを取り巻く「経済効果」について掘り下げてみました。テレビドラマに関する「商売」としての側面を知ってもらうことで、皆さんに新しいテレビドラマの見方を提案したいと思います。そして、社会全体が利害関係によって機能していることを実感して欲しいです。

3 D **台湾と神戸のスイーツを通じた友好** **神港橋高等学校 谷崎 亜海**

国際都市神戸と言いながら、京都・大阪に比べインバウンドは今一歩の思いがあります。特に親日で神戸とも関係の深い台湾への認識は若い人たちの間では低いように思います。タピオカはブームになりましたが、台湾にはまだまだ知られていないスイーツがあり、これを神戸の人たちに知ってもらい、少しでも台湾と神戸との友好に使えたらと思います。単なる紹介でなく、商業科らしくより実務的な部分についても考察し提案しました。

3 E **マツモと廃木材より合成したバイオエタノールを用いた塩害解決法**
科学技術高等学校 小松 花実 辰巳 恭一朗

学校で廃棄されるマツモや廃木材を再利用してバイオエタノールを製造した。また、自分たちが製造したバイオエタノールを用いて、植物の耐塩性を高め塩害解決に有効であるか検討した。結果、70%を超えるバイオエタノールを製造することに成功した。さらに、海水と希釈したバイオエタノールの混合液中でも種子を発芽させることができた。研究より災害後の塩害解決方法としてバイオエタノールを活用することが可能であると考えた。

3 F **Learning from disasters ～Reconstruction～** **六甲アイランド**
高等学校 陳 偉鑫

2011年3月11日に歴史に刻む東日本大震災が起きました。今年でちょうど十年経ちます。今の東日本、この大災害の後にできた復興庁と言う政府機関のおかげでほとんどの人々は一般生活に戻っています。このプレゼンテーションでは皆さんに復興庁についての紹介と、復興活動の取組と現状、また我々一般市民ができる復興活動について紹介します。自然災害は避けられないが、少しでも災害について知ってもらえたら嬉しいです。

資料 2

令和 2 年度 葦台高等学校 WVL の取組

A 高度な学び 大学・企業・国際機関等との連携授業 生徒対象

No	日時	場所	対象生徒	講師 使用言語 (日・英)	内容	12 の力
1.	6月18日(木) 6・7限 オンライン	フェニックス スホール	6限2年国際科 80名 7限3年理系 43名 国際科 77名	WHO 神戸センター テクニカル オフィサー (健康危機管理担 当) 医師 茅野龍馬先生(英)	“Global Health Development and COVID-19 Pandemic’	1,3,6, 10
2.	7月6日(月) 3限 対面	選択2D	2年普通科学際リサー チ選択者 16名	神戸市環境局 環境政策課 企 画推進係長 濱住康弘氏 企画 推進係 松尾良子氏 (日)	「プラスチック削減に向けて ～ごみ問題をして注目荒れる プラスチックは本当に悪なの か～」(日)	1,12
3.	7月10日(金) 6限 対面	選択2D	2年普通科「学際リサー ーチ」選択者 16名と 「子どもの発達と保 育」選択者 12名	アジア福祉教育財団 難民事業 部 関西支部中尾秀一氏(日)	「難民問題について～日本の 移民受け入れ拡大は是が非 か」(日)	1,6,11, 12
4.	9月10日(木) 6・7限 対面 16:10~17:30	フェニックス スホール	1年国際科 80名	神戸市外国語大学准教授 中嶋圭介先生 (日)	『課題研究のホップ・ステッ プ・ジャンプ』	1,6,12
5.	9月17日(木) 6限7限 対面	フェニックス スホール	6限2年1・2組 80名 7限 2年3～9組 280名	株式会社 OPTiM ビジネス統括 本部 ゼネラルマネジャー 徳田整治氏 (日)	「IoT・AI を使って実現する 新しい未来像」	1,3,4,6, 7,10
6.	9月23日(水) 7限 対面	フェニックス スホール	2年生全員 360名	NPO 法人 DEAR ME 代表理事 西側 愛弓氏	「アパレルブランド事業につ いて」	1,3,4,6, 7,10
7.	10月9日(金) 11月13日(金) 3限 対面	フェニックス ホール	3年 GS3C 選択者 50 名	神戸市外国語大学教授 Lori Zenuk Nishide 先生 (英)	「模擬国連入門」 「Draft Resolution の書き 方」	1,5,6,7, 10,11
8.	10月22日(木) 15:00～ 16:20～ 対面	フェニックス スホール・ コンピュー タ室	1年全員 360名 2年有志	兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀先生(日)	「リスクマネジメント」 課題研究に対する助言(バル セロナ他)	1,6,12
9.	10月27日(火) 5・6限 対面	フェニックス スホール	2年国際科 5限2-1 6限2-2	神戸市外国語大学教授 野村和宏先生 (英)	課題研究に対する評価・助言	1,6,12
10.	10月29日(木) 6限 11月5日 (木)6・7限対面	フェニックス スホール	2年国際科 80名	神戸市外国語大学 准教授 中嶋圭介先生 (英・日)	課題研究に対する評価・助言	1,6,12
11.	11月6日(金) 5限6限対面	選択2D 国数講義室	2年 学際リサーチ学 際国語	兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀先生(日)	研究活動への助言	1,6,12
12.	11月25日(水) 27日(金) 30日 (月) 12月2日 (水) 対面	フェニックス スホール 視聴覚室	2年学際国語受講生徒 普通科英系文系 214名	特定非営利活動法人多文化セン ター まんまるあかし 理事長 久保美和氏 (日)	「外国にルーツの子どもたち の現状と望む未来」	1,6,12
13.	12月1日(火) 3日(木) 21日 (月) 対面	フェニックス スホール	1年 360名 各日2～3組ずつ	神戸親子療育サークル (日)	「知ること、そしてその先へ」	1,2,11, 12
14.	1月15日(金) 5・6限 対面	フェニックス スホール	1年全員 360名 「生き方、キャリアを	アシックス、UCC、神戸新聞 社、フードピクト、レアジョッ	探究の日 プログラム 13 講座程度開催	1,2,3,6, 7,8,12

	オンライン	他	考える」	ブ、スカイライトコンサルティ ング、理化学研究所、JICA、 Future Code、DEAR ME、 PALAFOOL, がくボ会、ガールズ ヘルスエデュケーション プロジェクト		
15.	1月26日(火) 7限オンライン	フェニックス スホール	2年全員	中京大学スポーツ科学科 教授 來田 享子先生 (日)	「スポーツの光と影」	1,6,12
16.	2月1日(月) 3, 4, 6, 7限 オンライン	フェニックス スホール	1年360名 各日2~3組ずつ	神戸市社会福祉協議会 (日)	認知症サポーター養成講座	1,2,11, 12
17.	3月5日(金) 13:00~15:30 オンライン	フェニックス スホール	1年国際科 80名	アテネオ・デ・マニラ大学 教授 コルネリオ先生 (英)	Introduction to Sociology ~多角的な観点から社会的課 題を見る フィリピンの現状	1,3,5, 10
18.	3月8日(月) 12:30~14:30 オンライン	フェニックス スホール	2年国際科 80名	アテネオ・デ・マニラ大学 教授 コルネリオ先生 (英)	Introduction to Sociology 課題研究についての助言	1,3,5, 10
19.	3月8日(月) 14:40~15:40 オンライン	フェニックス スホール	2年国際科 16名	アテネオ・デ・マニラ大学 教授 コルネリオ先生 (英)	World Wide Conference 2021の準備・Discussionの練 習 質疑応答	1,3,6, 10,12

B 協働創造活動・課題研究発表 (コンテスト) (校内外)

有志生徒参加

No.	日時	開催場所・主催	参加者	コンテスト・発表会	内容	12の力
1	7月7日(火)7 限 オンライン	葺合高等学校 家 庭総合実習室・視 聴覚教室・大会議 ・国数講義室・地歴 公民教室	3年国際科生徒・2 年生国際科生徒参 加 海外姉妹校生 徒・留学生・ Canadian Academy 生徒他	WWL International Conference Online 2020 at Fukiai	「新型コロナウイルスによる世界危機 におけるける国際協力のあり方」 Communication “Economy” “Education” “Health” “Human Rights” の5分野から 海外姉妹校生 徒15名との意見交換	1,3,4,5, 6,9,10, 12
2	7月8日(水) 放課後 オンライン	葺合高校 代表生 徒自宅 (警報発令 のため)	3年国際科生徒・海 外姉妹校生徒・留学 生・Canadian Academy 生徒他	WWL International Conference 2020 online at Fukiai	5分野に分かれて、提案原稿を作成	
3	7月9日(木) 7限 オンライン	葺合高等学校 家 庭総合実習室・視 聴覚教室・大会議 室・国数講義室・地 歴公民教室	3年国際科生徒・ 1・2年国際科生徒 参加 普通科生徒	WWL International Conference Online 2020 at Fukiai	「新型コロナウイルスによる世界危機 におけるける国際協力のあり方」 5分野から海外姉妹校生徒 15名との 意見交換	
4	8月11日(火) 12日(水) オンライン	関西学院大	2年国際科 内田 (2位入賞) 1年国際科 金子	高校生国際交流の集 い2020 online	高校生、留学生、大学生が グループデ ィスカッション、文化体験などを通し て交流	1,3,4,5, 6,7,9,10
5	*9月11日 (金) 消印	JICA 関西	1年 国際科渡辺菜	JICA 国際協力高校 生エッセイコンテス ト(日)	1600字以内 「世界とつながる自分ー 私たちが考えること、できることー」	1,4,6,7, 10,11
6	9月3日(木) 16:30~17:00	神戸大学 太田和宏教授	2年国際科 金丸・橋本橋	課題研究のため Zoomによるインタ ビュー	「フィリピンの経済格差および教育格 差について」	1,6,10

7	9月20日 (日)・21日(祝) オンライン	東京外国語大学・ 東京農工大・電気 通信大	2年国際科 渡辺純	2020年度夏季 高校 生グローバルスケー ル	テーマは SDGs の3番 Good Health and Well-being 選考を経た 36名の参 加者は大学の講義や演習グループディ スカッションに参加	1,3,6,7, 8,9,10, 12
8	10月16日(金) 放課後	神戸市企画調整局 みらい翻訳	すぎな会6名 ESS 2名	AI 翻訳研修	ミライ翻訳機能を活用して、神戸市民 向けの行政書類の翻訳に取り組む	1,3,4,6, 7,9,10,
9	11月6日(金) 3限	フェニックスホー ール	3年GS3C 選択者	副市長によるWWL 授業視察	WWL International Conference Online 2020 での議論を元にした行動 計画の発表	3,4,5,6, 8,9,10
9	11月14日(土) オンライン	関西 NGO 協議会	2年国際科 小野寺、後藤	One World Festival for Youth 2020 ブラ ッシュアップ交流会	最終審査に残ったグループは、課題研 究についての助言をもらう	1,4,6, 10,12
10	11月14日(土) ~15日(日) オンライン	立命館宇治高等学 校・立命館大学	国際科2年 宇治 清水 曾山 東野 普通科1年 若山 国際科1年 長田	第3回全国高校生 SR サミット FOCUS	全国の高校生、日本に留学中の大学生、 企業が集い、SDGsにかかわる各校のプ ロジェクトの課題について協働で取り 組む	1,3,5,6, 9,10,12
11	11月17日(火) 16:00-17:00 オンライン	Canadian Academy 主催	国際科1年 岡田・金子・桑野・ 津原	Google Mind the Gap	女子学生のキャリア支援・Googlerによ る活動紹介(英語)	1,3,4,6
12	11月21日(土) 9:30~12:10 オンライン	関西学院大学総合 政策学部	口頭発表3チーム 国際科2年橋本実、 竹内・岡林 1年 齋藤・嶋本・宮嶋	関西学院大学 リサーチフェア	国際問題などの課題研究口頭発表 審査基準 独創性、サーベイ、内容、方 法論、論理性、形式 口頭発表 実行 委員会特別賞 2年竹内・岡林	1,4,6,10
13	11月27日(金) 15:30~17:00	みらい翻訳 NTT ドコモ	すぎな会6名 ESS 2名	AI 翻訳ワークショッ プ	AI 翻訳を知り、語学と翻訳を生かした グローバルな人になるには	1,3,4,6, 7,9,10, 12
14	12月11日(金)	神戸市企画調整局 みらい翻訳	すぎな会6名 ESS 2名	AI 翻訳 オンライン インターンシップ	オンラインによる東京のミライ翻訳 officeの見学、模擬会議体験	1,3,4,5, 6,7,10
15	12月17日(木) ~19日(土) オ ンライン	イオン	国際科2年3名 小西・小野寺・ 渡辺純	イオン1%アジアユ ースリーダーズプロ グラム	アジア9か国の高校生が、「食生活の考 察と改善点の提案」についての意見交 換	1,3,5,6, 7,9,10, 12
16	12月20日(日) オンライン	関西 NGO 協議会	ポスター発表2年 小野寺・後藤・山本 春	One World Festival for Youth 2020	ポスターセッション・課題研究発表 優秀賞2年小野寺・後藤・山本春	1,3,4,6, 7,10,12
17	12月20日(日) オンライン	東京国際フォーラ ム	国際科2年 上原 渡辺純 科学技術 高校・フェニックス 高校	全国高校生フォーラ ム	分野別 Discussion ポスターセッション審査発表	1,3,4,6, 7,10,12
18	12月20日(日) オンライン	甲南大学 岡本キ ャンパス	ポスター発表8チ ーム(2年13名 1年3名)	甲南大学リサーチフ ェスタ	ポスターセッション・課題研究発表 クリエイティブテーマ賞 2年大平・ 梶山、菊池・杉本	1,4,6,7, 10,12
19	12月25日(金) 14:00~17:00 オンライン	フェニックスホー ル・GS ルーム・視 聴覚教室・大会議 室・地歴公民教室・ 選択C・D・小会議 A	口頭発表5チーム (2年7名 1年 4名) ディスカッション 報告 運営	WWL 課題研究交流 発表会	横浜サイエンスフロティア高校・神戸 市立科学技術高校・六甲アイランド高 校・神港橋高校・須磨翔風高校・県立御 影高校・県立神戸高校・神戸大学附属中 等教育学校・神戸龍谷高等学校・武庫川 女子大学附属高等学校・Canadian	1,3,4,5, 6,8,10, 12

					Academy 高校生 160 名、教員 55 名	
20	1月12日(火) 18日(月) オンライン 16:30~18:30	Google	国際科1年 岡田・金子・桑野	Google Mind the Gap	女子学生のキャリア支援・Java Scriptを使ったプログラミング	1,3,4,6,9,10
21	1月22日(金) 15:30~17:00	NTTドコモ	すぎな会6名 ESS 2名	NTTドコモワークショップ	AI翻訳ツールを活用したワークショップ	1,3,4,6,7,9,10,12
22	1月23日(土) 14:00~17:00 オンライン	神戸市国際課 KIITO	国際科 3年梶原哲 角田 2年笹木 ウィリアムソン 上原 内田 1年渡邊 渡辺菜	第5回神戸コミュニティフォーラム	「やさしい日本語」を神戸に普及させ、外国人が住みやすい街にするための議論を神戸に住む外国人と日本人が意見を交換するフォーラム。8名の本校生徒が4つのグループにわかれ、ディスカッションのファシリテータとして、会を運営し報告する。使用言語は英語	1,3,4,5,6,7,10,12
23	1月28日(木) 5~7限 対面	葺合高校 各教室	1・2年約200名 3年25名、共同実施校生徒4名	2020年度WWLフォーラム	公開授業・課題研究発表会・WWL 2年次 取組発表 共同実施校生徒の発表も実施(一部の発表はオンライン)	1,3,4,6,7,8,9,10
24	2月13日(土) 14:00~17:00 オンライン	立命館宇治高等学校・立命館大学	2年 清水、東野、 1年 若山、長田	第3回全国高校SRサミット After FOCUS	Insight high ワークショップ FOCUS 活動報告	1,3,5,6,9,10,12
25	3月21日(日) オンライン	関西学院大学	2年 内田、望月、 中嶋	WWL・SGH × 探究甲子園	高校生による課題研究の口頭・ポスター発表 2年内田・望月・中嶋	1,4,6,7,8,9,10
26	3月27日(土) 9:30~15:30 オンライン	広島県教育委員会	2年 清水 前田 トラバリー	広島県におけるWWLコンソーシアム構築支援事業国内フォーラム	グローバルな視野と強い使命感をもって持続可能な社会の構築や国際社会の平和と発展に貢献する人材の育成を図る。	1,3,4,5,6,10,11,12
27	3月28日(日) 8:00~20:00 オンライン	アントレプレナーシップ開発センター	2年有志 2チーム 16名	The Global Enterprise Challenge	提示された課題に対しチームで協力して取り組み、解決策として英語で事業プラン・動画プレゼンテーションを提出する競技	1,3,4,5,6,8,9,10,12

C. 英語・外国語関係 コンテスト・発表会など(日程・詳細は要確認) 有志生徒参加 教員引率 *投稿締切日

No	日時	場所	参加者	コンテスト発表会名	タイトル	結果
1.	*8月13日 (木) 必着	地区予選:関西学院大学 本選:関西学院大学	1年国際科 弟子丸・奥田 2年国際科 井本・金丸・笹木・渡辺	第69回チャールズ杯争奪全日本高等学校英語弁論大会	内容自由、5分以内スピーチ原稿および録音音声データの送付	
2.	*8月24日 (月) 消印	上智大学	1・2年国際科有志	ジョンニッセル杯英語弁論大会	“Breaking the Chains that Bind Us” 4分以上5分以内スピーチ原稿および録音	
3.	8月26日 (水)放課後 28日(金) 放課後	フェニックスホール	本校生徒26名	葺合高校校内スピーチコンテスト フェニックスカップ予選・本選	自由	1部優勝内田 2部優勝東野 2位井本萌 3位岡林 4位濱田 5位宇治

4.	* 9月1日 (火)	京都ノートルダム女子大学	2年国際科有志	京都ノートルダム女子大学 英語スピーチコンテスト	自由 5分以内 女子に限る	
5.	* 9月4日 (金) 17:00		有志	第12回 IIBC エッセイコンテスト	「私を変えた身近な異文化体験」 501語以上 700語未満	
6.	* 9月10日 (木) 必着		1校あたり10編まで	第59回全国高等学校生徒英作文コンテスト	1年: The Book that Opened My Mind” (251~500語) 2・3年: ”What I Am Passionate about” (301~600語)	
7.	* 9月10日 (木)		1学年5篇まで	第24回兵庫県高校生英文エッセーコンテスト	1年: “ How I will make my high school life mearningful ” (350~400語) 2・3年: “ What attending school means to me ” (350~400語)	
8.	9月12日 (土) 対面	葺合高等学校	2年内田、東野 井本萌	第35回兵庫県高等学校英語スピーチコンテスト 市高大会	内容自由	優勝井本萌 2位内田 3位東野
9.	10月4日 (日)オンライン	関西学院大学	2年 渡辺純	第69回チャーチル杯争奪全日本高等学校英語弁論大会西日本大会	内容自由、5分以内スピーチ原稿 および録音	
10.	10月10日 (土) 12:30 ~16:30	兵庫県学校厚生会館	1年 井本萌・ 内田・東野	第35回兵庫県高等学校英語スピーチコンテスト神戸支部大会	内容自由 5分	優勝東野 2位井本萌 5位内田
11.	10月11日 (日)	京都ノートルダム女子大学	2年 梶原杏・バック	第10回英語スピーチコンテスト	内容自由 5分以内	優勝バック
12.	11月1日 (日) オンライン	兵庫県高英研	2年 バック 東野、宇治、中西、西村	第15回全国高校生英語デバートコンテスト 兵庫県予選会	Resolved: That the Japanese Government should ban production and sales of fossil-fueled cars, including hybrid cars, by 2035.	3位 宇治、バック、東野、中西、西村
13.	11月7日 (土) 対面	福崎エルデホール	2年 東野、 井本萌	第34回兵庫県高校生英語スピーチコンテスト	内容自由 5分 Content 50点 English 20点 Delivery 30点	3位井本 5位東野
14.	11月14日 (土) 対面	加古川東高等学校 清流館	1年井上、猪上	第24回兵庫県高校生英文エッセーコンテスト	1年生と2・3年生それぞれに当日与えられた題について書く。	優秀賞井上、 佳作 猪上
15.	11月23日 (祝)	アシックスホール	1年 濱田彩	第28回 高校生英語暗誦大会	Teacher who changed my life (Les Brown)	1年 濱田予選通過
16.	12月19日 (土) 20日 (日)	パラメンタリーディベート人材育成協議会 (PDA)	1年 森田、桑野、岡田	第6回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会	① Wearing a mask should be mandatory ② The media should not report on suicide 他	POI 賞 森田 カレン洋輝
17.	12月下旬	全英連	国際科1年5名	第59回全国高等学校生徒英作文コンテスト	1年: The Book that Opened My Mind” (251~500語) 2・3年: ”What I Am Passionate about” (301~600語)	入選 1年 橋田・岩崎
18.	1月24日 (日) オンライン	日米協会	1年濱田彩	第28回 高校生英語暗誦大会 本選	Find Your Own Donut (Akio Toyota)	3位 濱田彩

19.	2月14日 (日) オンライン	兵庫県高英研	国際科2年 バック・宇治・松下・滝口・土居・西村 1年 金子・高橋・松沢・長田・古川・木村	第14回兵庫県高校生英語ディベートコンテスト オンライン交流大会	Resolved: That the Japanese Government should ban production and sales of fossil-fueled cars, including hybrid cars, by 2035. (日本政府は、(ハイブリッド車を含む)化石燃料車の製造と販売を2035年までに禁止すべきか)	3戦全勝 2年バック・宇治・松下・滝口・土居・西村
20.	3月20日 (祝) オンライン	HDPU 日本高校生パーラメンタリーディベート協会	1年6名	HDPU 西日本オープン	議題は当日公開	

D 学校行事他 12の力を育てる活動 (生徒会・すぎな会・GSS 他による国際・社会貢献活動も加える)

No	日時	場所	参加者	行事	内容	12の力
1.	7月28日(火)	都賀川	すぎな会2年1名	都賀川水難事故犠牲者を偲ぶ会	都賀川水難事故犠牲者を偲ぶ会への参加	1,2,3
2.	9月1日(火)~ 9月4日(金)	葺合高等学校 3F エントランス		課題研究発表ポスター展示会(文化祭の代替の展示発表会)	昨年度受賞したポスター作品など35枚の課題研究展示、WWLのイメージ図、短期海外研修、海外フィールドワーク、国際貢献活動のパネル発表	4,10
3.	10月3日(土) 8:30~16:00	葺合高校	国際科1・2年生 34名	オープンキャンパス	中学生への学校紹介、体験授業案内補助、葺合高校の魅力紹介、35枚の課題研究ポスター展示・説明、WWLのイメージ図、短期海外研修、海外フィールドワーク、国際貢献活動のパネル説明	5,10
4.	10月5日(月) 17:00~	葺合高校 フェニックスホール	水泳部3名 共同 実施校水泳部3名	NZ水泳オンライン交流事業	ニュージーランド競泳 Lewis Clareburt選手と高校生がビデオ通話を行う	1,3,7,10
5.	11月14日(土) 8:30~15:30	葺合高校	普通科1・2年生 30名 生徒会 12名	中学3年生対象 学校公開日 3部構成	中学生への学校紹介、葺合高校の魅力紹介、課題研究ポスター展示、WWLのイメージ図、短期海外研修、海外フィールドワーク、国際貢献活動のパネル展示	1,5,10
6.	11月28日(土) 15:00-16:00	中央区社会福祉協議会	2年 古賀 王 笹木	支え合いミーティング	高齢者の方にスマホの使い方を教える	1,2,3,4, 10
7.	12月11日(金)	神戸税務署	1学年全員	税に関する高校生の作文	神戸税務署長賞 1-1 パナトーニ 1-2 得平 津原	1,4,6
8.	12月13日 (日)・1月10日 (日) 14:00-16:30	コンソーシアムひょうご神戸	1・2・3年有志	English Village 英語村(地域連携プログラム)	オンライン Zoom で留学生と価値観ゲームをするワークショップ	1,4,6,7, 10
9.	1月18日(月) ~2月5日(金) 2/11・2/12・ 2/18	葺合高校食堂	TFT定食 410食 スープ 294食 サラダ 150食	TABLE FOR TWO	校内食堂にて2年『栄養』選択生徒が考えたスープメニューを導入	2,4,7
10.	2月11日(祝) 14:00~15:30	NGO 神戸外国人救援ネット	有志	オンライン学習セミナー	「難民と共に入管施設の長期収容問題を考える」	1,4,6
11.	3月7日(日)	兵庫県ユニセフ	有志	ユニセフのつどい オ	国際協力団体の活動紹介リレートーク	1,4,6

	13:30~15:30	フ協会		ンラインミーティング	&ワイワイ交流会 ルワンダの教育を 考える会、ミャンマー関西他	
12.	3月13日(土) 10:00~12:30	兵庫県ユニセ フ協会	有志	ユニセフのつどい レクチャー	「子どもたちを取り残さないように」 ～ベトナム、東日本大震災でのユニセ フ活動」近畿大学教授 安田直史先生	1,4,6

E 研修講座

No	日時	場所	参加者	講師	内容
1.	11月26日(木) 13:00~17:00	葺合高校	全職員	麻布教育研究所特別研究 員 学びの共同体スーパ ーバイザー永島孝嗣先生	永島先生による各授業見学 本校教員の研究授 業、授業研究協議、講話

F 他校の研修発表会に参加

No	日時	場所	参加者	内容
1.	2月20日(土) オンライン	京都教育大学 附属高等学校	茶本	令和2年度 課題研究生徒発表会

G 文部科学省主催の連絡協議会

No	日時	場所	参加者	講師	内容
1.	7月29日(水) 13:00~	オンライン GS room	大野校長・山内 教頭・村上・中 嶋主事・茶本・ 後藤・安岡	文部科学省 拠点校 管理 機関 他	「令和2年度 第1回 WWL コンソーシアム構築支援事業に 関する事務局説明」「関西学院高等部・静岡県立三島北高等学 校実践報告」「トビタテ！留学 JAPAN2020年の現状と施策に ついて」「高校生の国際交流の促進について」「平成31年度 『スーパーグローバルハイスクール事業の成果検証』の調査 結果について」
2.	10月29日(木) 14:00~16:00	オンライン 応接室	大野校長・山内 教頭・村上・中 嶋主事・茶本・ 後藤・塚本	文部科学省 拠点校 管理 機関 他	「令和2年度第2回 WWL コンソーシアム構築支援事業に関 する事務局説明」「高槻高等学校・立命館宇治高等学校・愛媛 大学附属高等学校・大阪府立北野高等学校実践報告」「情報活 用能力を高めるための活用方法の開発」
3.	2月25日(木) 9:50~10:50	オンライン	蔵本課長・大野 校長・山内教 頭・村上・中嶋 主事・茶本・ 中尾	文部科学省	地域との協働による高等学校教育改革推進事業地域協働推進 校及び WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校とのオンラ イン意見交換 令和2年度の進捗状況、令和3年度の事業計画及び構想調書 から変更した取り組み内容について

H 本校職員による外部への記事・論文

No	発行日	雑誌名	出版社・発行団体	タイトル	著者
1.	10月8日(木)	兵庫教育 10月 号	兵庫県教育委員会	Society 5.0 を牽引するグローバルリーダー育成 の取組み ～共創を生み出すネットワークの形 成を目指して～	村上教諭

I 新聞・雑誌・テレビなどのメディア取材・掲載記事

No	発行日	雑誌新聞名	タイトル
1	7月2日(木)	神戸新聞 朝刊	「WHO 神戸センターの茅野医官 新型コロナなど解説 葺合高でオンライン講義」

2	7月11日(土)	神戸新聞 朝刊	「葺合高生、海外の生徒とオンライン会議」「コロナ対策で国際協力 教育や人権など意見交換」
3	10月8日(木)	神戸新聞 朝刊	「高校水泳部員7人交流～NZ 競泳五輪候補とオンラインで」「トップ選手の心構えなど質問」
4	12月26日(土)	神戸新聞 朝刊	「AI、防災、原発・・・世界の課題 12校の160人交流発表会 葺合高校を拠点にオンラインで」
5	1月23日(土)	神戸新聞 朝刊	「AI 翻訳 外国人と会話 葺合高生8名 ホテル予約体験」
6	1月31日(日)	神戸新聞 朝刊	「講師招き水墨画挑戦 葺合高校で花のラン描く」
7	2月24日(水)	毎日新聞 朝刊 広告	「アジアユースリーダーズ」オンラインで開催 「コロナ禍から見た学校教育の課題はアジアの9か国の高校生が国境を越えて討論」
8	3月11日(木) 7:30～	日本テレビ	「星星のベラベラ ENGLISH」 葺合高等学校の紹介 英語が得意な生徒出演

J WWL 関連来校者受け入れ (オンライン会議などを含む)

No	日時	来校者	内容
1	7月7日(火)・9日(木) 両日7限 対面	大学教員、WWL 運営指導委員、教育委員会関係者、学校関係者、生徒保護者 27名	WWL International Conference Online 2020 at Fukiai
2	8月6日(木) 10:00～12:00 対面	兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀先生 教育委員会関係者、共同実施校教頭、本校担当教員、	令和2年度のWWLの取組計画 ALネットワーク、課題研究交流発表会、WWL フォーラム概要
3	8月6日(木) 14:00～15:00 オンライン	愛知県立千種高等学校 教頭先生、黒川先生、国際科長 3名	WWL の取組について
4	9月10日(木) 15:30～15:50 オンライン	Canadian Academy 学長 Mr.Jon Schatzky Ms. Satoko Endo-Crum Ms. Monica Qua Hiansen	WWL の概要、連携校の説明、今後の連携の予定 WWL International Conference Online 2020 online 参加のお礼、
5	10月15日(木) 対面・オンライン	対面：文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事務局長 小澤大心氏 オンライン：IB 機構日本担当地域開発マネージャー 星野あゆみ氏	国際バカロレアの推進について 国際バカロレアとは？ 学校・自治体でのIB導入の動き IB導入方法・支援制度について
6	12月25日(金) 14:00～17:00 オンライン	横浜サイエンスフロンティア高校・神戸市立科学技術高校・六甲アイランド高校・神港橋高校・須磨翔風高校・県立御影高校・神戸高校・神戸大学附属中等教育学校・神戸龍谷高等学校・武庫川女子大学附属高等学校・Canadian Academy 12校 160名	WWL 課題研究交流発表会
7	1月28日(木) 5～7 限 対面 オンライン	大学教員・WWL 運営指導委員、教育委員会関係者、学校関係者、生徒保護者	令和2年度 WWL フォーラム

K WWL 運営指導委員会・検証委員会

No	日時	場所	会合名	内容	発表者 出席者
1.	10月15日(木) 14:00～	葺合高校大会議室	令和2年度 第1回 WWL 運営指導委員会	令和2年度の取組 課題	教育委員会・運営指導委員・WWL 委員 (共同実施校代表を含む) 17名
2.	1月28日(木) 7限後	葺合高校大会議室	令和2年度 第2回 WWL 運営指導委員会	令和2年度取組の振り返りと来年度の方向性	教育委員会・運営指導委員・WWL 委員 (共同実施校委員を含む) 16名
3.	1月29日(金)	神戸大学山下研究室	令和2年度 第1回 WWL 検証委員会	令和2年度 WWL 取組の検証	検証委員・教育委員会・葺合高校検証委員他

資料4 令和2年度第1回WWL運営指導委員会の記録

日時：令和2年10月15日 14:00～15:20

- 参加者：【運営指導委員】 浅野 良一 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授
伊藤 卓郎 (株)アシックス スポーツマーケティング統括部 事業管理チーム マネジャー
金居 光由 神戸新聞社 阪神総局長
古賀 英貴 神戸市立中学校長会進路指導対策委員長 (神戸市立押部谷中学校長)
丹沢 靖 神戸市市長室国際部国際課長
- 【管理機関】 蔵本 朗 教育委員会事務局学校教育部担当課長 : 西山 敏弘 学校環境整備課担当係長
松浦 新法 教科指導課担当係長 : 中嶋 秀 学校教育課指導主事
- 【拠点校】 大野 毅 葺合高等学校 校長 : 山内 紫乃 葺合高等学校 教頭
村上ひろ子 葺合高等学校 国際科長 : 仲村 智子 葺合高等学校 教諭
茶本 卓子 葺合高等学校 教諭
- 【共同実施校】 中野 由章 科学技術高等学校 教頭
清家 豊 神港橋高等学校 教頭
片山 健史 須磨翔風高等学校 教頭
- 【連携校】 津村 真人 六甲アイランド高等学校 教頭

1. あいさつ (蔵本担当課長)

- 令和2年度はコロナウイルス感染症対策の中、思うように事業が進まなく、本当に歯がゆい思いをしている。
- 葺合高校は、すでに何年にもわたって国際会議を実施しており、令和3年度はそれにどんなことをプラスしようかと考えている状況であり、葺合高校の経験値と伝統を感じている。
- 令和2年度は六甲アイランド高校が連携校に参加し、全日制の市立高校5校全校で取り組むことができる状況となった。またカナディアンアカデミーも連携校に加わり、コンソーシアムを一步前進させることができた。
- 本日は、各校からの報告や運営指導委員の皆様からの助言、忌憚のない意見をいただきたいと思っている。

2. 運営指導委員紹介 (中嶋)

3. 拠点校・共同実施校・連携校教職員紹介 (中嶋)

- 令和2年度運営指導委員・教職員の紹介、運営指導委員会開催要綱について説明。委員長依頼。

4. 協議事項 ～今年度の取組報告及び今後の予定～ (浅野委員長)

- WWLは全国で非常に数の少ない研究指定である。WWLにコロナ感染症が重なり難易度が高くなっている。逆に考えれば新しいことにチャレンジできるということになる。是非みんなで盛り立てていきたいと思う。

(1-1) 葺合高校 (村上先生)

- 構想名を「Society5.2を見据える超未来型グローバルリーダーの育成」とし、12の力をWWLで育成した。その12の力を育成するためのアプローチとして、「学際的な学び」、「高度な学び」、「国際協働活動」を設定した。
- 「学際的な学び」ではWWLを機に「学際科目」を設定し、3学年共通の必修科目として「総合的な探求の時間」、1年生に「家庭基礎」「情報の科学」、国際科に「グローバルスタディーズIA」を設定した。2年生には「学際国語」「グローバルスタディーズIIB」、選択科目として「学際リサーチ」「グローバルスタディーズIIC」を、3年生には「グローバルスタディーズIIIC」「学際フードデザイン」を設定した。2年生対象の学際科目を令和2年度より実施している。授業開始が6月となり大幅な計画変更があったものの、うまく実施できている。

(1-2) 葺合高校：大学・企業・国際機関との連携授業について (茶本先生)

- 令和2年度はコロナウイルス感染症の影響があり、なかなかスタートが切れなかった。Web会議やOnlineでの取組は、管理機関等の協力で進めることができていると考えている。
- 6月にWHO神戸センターのテクニカルオフィサーの茅野先生にオンラインで“Global Health Development and COVID-19 Pandemic”という題目で英語による講演をしていただいた。WHOが令和2年度初めて高校生を対象にオンラインで行った事業である。7月に「学際リサーチ」で神戸市環境局と難民事業部の方に来ていただき、対面でのワークショップを2回実施した。9月には、葺合高校の科学的な講演の第一歩として、9月に神戸市出身の方が立ち上げたAI企業である、OPTIMの方に「AIイノベーション戦略」というテーマで2学年の生徒全員を対象に講演をしてもらった。その他NPOや神戸市外国語大学教授のワークショップなど年間計30講座を企画している。1月には1年生対象には「探究の日」を設定し、グロー

バルな課題解決に取り組み国際機関、企業、NPO や自治体による対面やオンラインでの講座を企画する。3月に予定しているフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学教授の講演は、来日が無理ならば、オンラインで実施する計画である。海外研修等は実施できていないが、海外渡航が許されるようになれば再開したい。

(1-3) 葺合高校：協働活動（連携機関、共同実施校、連携校とともに行うもの）（村上先生）

- インターナショナル・コンファレンスは、7月にオンラインで開催することができた。
- 9月からオーストラリアの姉妹校であるウェストボーンスクールと「オリンピック精神を祝うための若者間の交流」に、国際科2年生選択者が取組む。10月には神戸市の文化スポーツ局主催のニュージーランド東京オリンピック代表選手と拠点校と共同実施校、連携校の水泳部生徒とのZOOMを使ってのオンライン交流が実施された。神戸新聞に掲載された。神戸市企画調整局と国際部からの提案で「AI翻訳プロジェクト」を始める。「神戸市」「NTTドコモ」「みらい翻訳」の協力を受け、3月まで事業を続ける。令和元年度から実施しているバルセロナ市との「World Data Viz Challenge」には、審査を通過したチームがビデオで出場する。
- 文部科学省主催全国フォーラムに、葺合高校とフェニックス高校生徒がZOOMでテーマ別分科会に参加する。
- 12月25日はWWL課題研究交流発表会、1月28日にはWWLフォーラムを実施する予定である。

(1-4) 葺合高校：教員研修について（大野校長）

- 授業力向上のため、麻布教育研究所特別研究員による授業参観や研究授業といった研修を予定している。

(2) 科学技術高校（中野教頭）

- WWLのリスクマネジメントというテーマで取組んでいる授業は「課題研究」「都市防災」が中心になる。
- 課題研究は3年生で3単位であり、各科がグループで年間を通して一つのテーマに取り組んでいる。
- 例年であれば、1学期末に全体像が見えてくる。中間発表、軌道修正、そして最終発表会を実施する。しかし令和2年度は3月から5月まで臨時休校であったため、10月時点で中間発表できるレベルに達していない。また例年なら夏休みに「モノづくり」や「アイデア」などのコンテストに参加、発表し、評価をいただく。それを参考にその後の取組みを実施するが、令和2年度はそれらが中止となり、外部評価もなく、不安に感じている。
- 課題研究発表会は4科が別日に実施、3年生が同じ科の1、2年生に発表する。一般の方にも公開している。
- 「都市防災」は学科横断で全科履修できる形を取っており、神戸市消防局や外部団体・組織の協力をいただき、防災士を育成するという授業を展開している。令和2年度はオンラインや講師に来ていただく回数を減らしている。高等学校で防災士養成機関になっているのは全国で科学技術高校だけである。
- 本校は専門高校であるため、様々な外部機関（大学や企業など）と連携し指導を受けるということが多くある。一例では、科学工学科が白鶴酒造の研究所と連携し醸造学について研究したり、ASICS・NTTドコモと連携し部活動の部員の行動に関するデータを集め、それを可視化する取組をしている。
- 様々な事を従前から実施しているが、令和2年度は遅れている。

(3) 神港橋高校（清家教頭）

- 本校の課題研究は商業の専門科目という枠組みの中での授業であり、商業科の先生のみが担当している。時間割等の工夫により様々な教科と商業の味わいがmixした課題研究を実施できる可能性を感じている。
- キャリア教育として、1年生「神戸ディスカバー（地域を知る）」、2年生「橘タウンミーティング」、3年生「課題研究」を実施している。この流れを「橘プロジェクト」と呼ぶ。「橘タウンミーティング」では、地域で活躍している方を招待し、高校生に考えて欲しい地域課題について話をする。令和2年度はWHOの茅野先生にオンライン講演の講師を依頼している。「橘プロジェクト」の校内中間発表の評価をもとに、WWL課題研究発表会などへの参加グループが決定する。他の優秀なグループは「マイプロジェクトアワード」という研究発表会に参加する。これは近畿、全国大会に繋がり、全国大会の出場枠は個人ではなく学校に与えられる。そのため3年生が研究してきたものを2年生が引き継ぎ発表する形になる。令和2年度から、こちらにも取り組む予定である。
- 「RESAS de 地域探究」発表会に防災のグループが初めて参加する。近畿大会に繋がるので頑張りたい。
- NPO団体の「ブレンヒューマニティ」が実施している「課題探究プログラム Seeker」という、大学生が自分の研究分野を活かして高校生に課題研究の補助・支援をするという事業を利用して研究を進めている。
- 本年度から文部科学省指定事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に応募し、アソシエイト校に承認された。この事業のコンソーシアムに神戸市教育委員会事務局、兵庫区まちづくり課が入っている。
- 兵庫区の「神戸市高校生市内就職を目的とした支援事業」で助成、支援を受け課題研究の充実を図っている。
- 兵庫区で新たに立ち上がる「兵庫区未来会議」に、教員も参加している。企業、行政、商店街代表、NPO、病院などの方と兵庫区の課題について話し合う。子育て支援、他地域からの転居支援、空き地、空き家等の兵庫区の課題は、まさに課題研究のテーマに直結する。区と連携・協力のもと、課題研究に反映させていきたい。行政との連携は課題研究に有効であると感じた。

(4) 須磨翔風高校 (片山教頭)

- 総合学科の学校であり、特徴として「産業社会と人間」という2単位の授業を履修しなければならない。この2単位を利用し1年次に「キャリアプランニングⅠ」、2年次に「キャリアプランニングⅡ」、3年次に「キャリアプランニングⅢ」を設定し、3年間を通してキャリア教育を展開している。
- 単位制であるため、1年次は自分自身と社会との繋がり、関係性をしっかり理解することを目指し、それに基づき自分自身の2年次以降の時間割を作成する。
- 1年次より「職業インタビュー」「フューチャープラン」などの作成、発表、また2年次に行うディベートなどを通し、自分自身の将来像・未来像を考えさせる。
- 夏休みには、卒業後の進路を踏まえ、大学や専門学校のリサーチを行い、自分の進路についての発表を行う。
- 2年次の後期から3年生の前期の終わりまでの一年間、課題研究を実施する。一つのテーマにグループで取り組むのではなく、自分自身で興味関心のあるテーマを見出し、必要な調査等を通して探究し課題研究を進める。
- 3年生の前期の終わりに課題研究発表会を行う。おおまかなテーマに分かれ、各代表一名を選出、優秀作品は兵庫県総合学科発表会で発表する。
- 11月12日には、兵庫教育大学大学院 西岡教授の事前指導を実施予定である。

(5) 六甲アイランド高校 (津村教頭)

- 普通科単位制の学校で、選択科目がたくさん用意されている。1年次の間に進路プランニングとして科目の選び方、自分の将来の事等を考えさせ、それぞれの興味関心・希望の進路に応じて、9つの系・コースに分かれ、系の選択をさせる。
- 系とは興味関心・希望の進路に応じ出来上がった緩やかな枠組みで、系に入ればある程度学びやすいように選択科目の幅が絞られたりするが、進路と直結しているわけではない。社会科学、国際人文、総合科学等々9つあるが、2年次よりすべての系による活動の中で「神戸学」を探究のテーマとし、さまざまな経験・体験・学びをしながら最終的には2年次の後半より3年次にかけて課題研究をチームまたは個人で行う。SSHの指定を受けているので、いろいろな学びを探究活動に活かし学びを深めていけるように、それぞれの系が協力している。
- 東灘区と連携協定を結んでおり、そちらからも探究活動に活かせるヒントがあるのではないかと期待している。
- 令和元年度から、WWL 課題研究交流発表会のポスターセッションに参加している。

5. 質疑応答、協議 (運営委員の方々より)

(伊藤委員)

- コロナの中ではあるが、前を向いて進んでいる。
- 長田区や東灘区など行政との対応・連携が進んでいる。学校だけではなく、行政、区が連携していろいろなことを実施し、その活動が校内から校外に広がっている。その先端に先生方が立って水先案内人となっている。
- 六甲アイランド高校の「神戸学」とは、六甲アイランドの言葉になるのか、元からそういった授業があるのか。
- (津村教頭)「神戸」をテーマに歴史、自然を学び探究している活動である。六甲アイランド高校の立ち上げのときから「神戸学」という名前で授業を行っている。総合的な探究の時間を使って取り組んでいる。

(金居委員)

- 7月のWICOで海外生徒とのオンライン会議を見た。非常にモニター越しの相手とうまく交流していた。新型コロナのことをテーマとして、いろんな方面から生徒がそれぞれ自分たちのこととして、海外の高校生と同じように話をしていたのが印象的であった。オンラインの授業、進行は非常に難しい。生徒たちの様子を見ていると非常にうまく、先生方の苦労も大変だったと思う。全国にも自慢できるようなやり方をやっている。
- 他の高校でも同じようなことができるかといえば、設備の問題があり一度には進まないと思うが、是非先行事例として学校教育に広めて行けたらと思う。
- 神戸新聞としても教育担当に葺合の取組を紙面で紹介し、できるだけ多くの人に関心を持って知ってもらえるような活動を今後も続けていきたい。ニュージーランドのオリンピックの選手とのオンライン交流などは、どんどん紙面を通じて市民の皆様にお知らせしたいと思う。

(古賀委員)

- 7月のWICOはすごいと思った、あの時に中学校はなかなか機器の問題であるとか語学の問題があり難しいと思っていた。ところが環境が激変し、GIGAスクール構想が前倒しになり、1年生から3年生まですべての生徒が令和3年度の4月時点で生徒は1人1台PCを持ち、校内のネットワークの環境も無線のWi-Fiとなる。今、高等学校でしていることが中学校でもできるようになる、中学校で慣れた生徒が高校に行く。したがって中高の連携は大切である。今紹介していただいたことも是非中学校でも取り入れていきたい。
- 本校1年生で、SDGsに学年をあげて取り組んでいる。
- 進路指導の立場としては、全ての中学校が実施できるわけではないが、中学校と高校が何かを実施するとか、7月の葺合高校の様子を興味のある中学生に見せることでできれば、広がりが出る、ワイドになるのではないかと。

- 僅か2か月でこれだけ環境が変化した。1年後はもっと変化すると思う。各高等学校の取組が楽しみである。

(丹沢委員)

- WWL で取組んでいるオンラインは海外との交流方法として非常に有効である。
- コロナは簡単には治まらない感じである。したがってオンラインや今までと違った発想で交流を考えていくことが非常に大切である。これが WWL 事業と国際課の共通の課題であると思っている。
- 行政との連携は、非常に有効であると思っている。行政とは「課題の塊」みたいなもので、どこの部署にも様々な課題がある。そのため課題研究のテーマのヒントとなるものを手に入れやすいのではないかと。
- 国際課ではコミュニティフォーラムというのを実施しており、そこで出てくる非常に斬新な高校生の知見というのは考慮すべき点があるので、行政側にとっても非常に有効である。
- 神戸市はフランスのストラスブールに拠点・本部がある、「インターカルチュラル・シティーズ・ネットワーク」に加盟している。インターカルチュラルは汎文化主義と捉えており、多文化共生と似ているが、少し理解度が違う。世界の多文化共生、多様性などといった先進的なことについて意見交換・情報交換をしながら神戸市も施策を高めていきたいと考えている。このような機会を将来的に活用すること、いろんなレベルでいろんな世界の国々と議論をすることは可能である。

(浅野委員長)

- 葺合高校や神戸市立高校が取組んでいる、課題研究・探究はかなりのレベルにあると感じる。全国的に見て、課題研究の取組みを検討しているという声が多い中、当たり前のように進めているのは非常にレベルが高い。
- 特に今回コロナの関係でオンラインが急速に進んだ。計画が遅れたというデメリットもあるが、スピード感やワイド感が急に3倍速になった感じである。だからチャンスである。コロナでオンラインになったのは、課題研究あるいは WWL にとって追い風(メリット)の方が多くかもしれない。スケジュール的に苦しい部分もあるが、テーマの広がりや地域の広がり、専門家の呼びやすさなどの追い風(メリット)の部分をうまく使って欲しい。
- 葺合高校に対する文科省からの評価の高さの一つは、教科横断的なカリキュラムマネジメントの観点である。それを学際国語などにうまく盛り込む必要がある。
- 指導要領が変わり社会に開かれた教育課程となった。神戸市立高校は社会に上手に開いていると感じる。地域の課題や区役所とのやり取りの中からヒントを得やすい。WWL の会議に行政部局の方が出席するなど、この点は全国の公立高校の中でかなりのアドバンテージである。その辺を強みにしていくべきだと思う。
- 各校の課題研究は、上手にそれぞれの専門性ですみ分けしている感じである。科技高は工業系、神港橋は商業、須磨翔風は総合学科のキャリア、そして六アイは神戸学ということで、住み分けているおかげで団体として力が出てくる。「住み分け」と「深掘り」を上手に利用し、葺合は様々なことに挑戦、試行する。上手くいったことを活用し、他校はそれをうまく取り込むというのが、今回の WWL をチームで行っていく意義だと思う。
- 特に WWL というのは全国でそれほど指定校がない。ハードルの高い研究をやっている。その分われわれ運営委員もいろいろなアドバイスをしながら、かつ行政部局の意見も交えながら前に進んでいくのがいい。

(西山担当係長)

- 学校環境整備課は主に学校の施設整備、ハードウェアの面を管轄する所である。WWL と直接、間接的に支援ができればと考えている、遠慮なく相談して欲しい。いろんな所で WWL や市立高校の宣伝をしていきたい。

(松浦担当係長)

- 委員長が言われたように、共同実施校や連携校がこれだけ多い点は、全国でも目に付く、「チーム神戸」と呼んでいいのかわからないが、言い得て妙だと思う。葺合高校が中心となり、積極的に取り組んで欲しい。
- オンラインにより、これまでに交流がなかった国や地域との交流が目玉になってくるのではないかと。

6. おわりのあいさつ (大野校長)

- 本校は、生徒たちが海外に行く、また海外から人が来ることにより様々な国際教育活動を進めることを特色としているが、全てストップになった。委員より WWL は難しい、コロナでさらにハードルが高くなったという話があった、実感している。しかし多くの方に協力いただき、オンライン化など事業を進めることができた。
- 例年より身近な「コロナ」という課題での5回目となる高校生国際会議を実施できたことは有意義であった。
- SDGs は学校教育で取り上げ、21世紀を生きる子供たちが身近に考え、身に付けなければならない力だと思う。
- WWL はいろんな所と連携しながら、生徒たちの力をさらに伸ばすいい機会である。
- これからあと半年続くが、よろしくお祈りします。本日はありがとうございました。

7. 今後の予定 (中嶋)

- 第6回目となる国際会議【WWC】ワールド・ワイド・コンファレンスを、令和3年7月9日(金)神戸文化ホールで予定。

令和2年度第2回WWL運営指導委員会の記録

日時：令和3年1月28日 16:00～17:00

- 参加者：【運営指導委員】 浅野 良一 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授
伊藤 卓郎 (株)アシックス スポーツマーケティング統括部 事業管理チーム マネジャー
金居 光由 神戸新聞社 阪神総局長
古賀 英貴 神戸市立中学校長会進路指導対策委員長 (神戸市立押部谷中学校長)
丹沢 靖 神戸市市長室国際部国際課長
- 【管理機関】 蔵本 朗 教育委員会事務局学校教育部担当課長 : 中嶋 秀 学校教育課指導主事
- 【拠点校】 大野 毅 葺合高等学校 校長 : 山内 紫乃 葺合高等学校 教頭
村上ひろ子 葺合高等学校 国際科長 : 茶本 卓子 葺合高等学校 教諭
- 【共同実施校】 中野 由章 科学技術高等学校 教頭
清家 豊 神港橋高等学校 教頭
片山 健史 須磨翔風高等学校 教頭
- 【連携校】 津村 真人 六甲アイランド高等学校 教頭

1. WWL 1年間の成果と課題

(管理機関：中嶋)

- SGH から WWL の流れを維持しつつ、7月の「International Conference」でオンラインのきっかけを作ることができた。
- 今年度より六甲アイランド高校が連携校に加わり、神戸市立全日制5校によるコンソーシアムを形成し、「住み分け」と「深掘り」によるALネットワークが深まった。交流を通して、多様性と専門性の高いALネットワークの構築を今後進めたい。
- カリキュラム開発の中心となるものは「学際的学び」、「探究活動」。各校の「課題研究」や「総合的な学習の時間」において「学校の枠を超えた協力体制」の構築。事業委託期間終了後も、WWL 事業の成果として残したい。
- 各校の取組を中学校へ有効に発信すること。以上が成果と課題である。

(葺合高校：村上教諭)

- 校外のほとんどの事業がオンラインとなり、校内実施の第2回WWL 課題研究交流発表会(12月)もオンライン開催であった。
- 本日のフォーラムは公開を限定して実施し、学校間の交流を継続した。
- 海外研修やフィールドワークなど、本校の強みを十分生かすことができない状況である。
- 令和3年度は集大成となるWWC(ワールド・ワイド・コンファレンス)が予定されているが、令和2年度の実践を基盤に海外とはオンラインでの開催も視野に入れる必要があると考えている。またフィールドワークなどにおいてもオンラインでの導入を検討する必要がある。
- 「学際的学び」について、本日のWWLフォーラムでは、6つの学際的科目を公開、7限目に本校生徒、共同実施校、連携校生徒による探究活動の発表の場を設定した。また、本年度より始まった「学際国語」と「学際リサーチ」の授業を11月にカリキュラムアドバイザーに視察していただき、その後研修会を設けた。12月の交流発表会には、連携校や近隣の高校12校が参加し、パワーポイントを使ってオンラインでプレゼンテーションを行った。令和元年度より、発表テーマもより多様化し、英語での発表の割合も高くなった。また、2校の共同実施校の生徒たちが、8分野中4分野のディスカッションのファシリテーターを務めるなど、協働が進展した。
- 「高度な学び」について、令和2年度後半も対面とオンラインによる講義やワークショップ、プログラミングや産官学プロジェクトである「AI翻訳プロジェクト」のオンラインワークショップなどを推進した。また1年生を対象に「探究の日」を設定(1月)し、グローバルな課題の解決に取り組む国際機関・NPOなどによるワークショップを対面やオンラインで実施した。
- 協働グローバル創造活動については、7月のInternational Conferenceの結果を受け、2学期から会議で話し合った解決策を具体的に行うAction Planを作成、高校生による経済支援やDVの防止策についての提案を英語で発表した。また、国内外で行われる課題研究発表会や国際会議のオンラインプログラムを生徒に紹介、参加に向けて指導、オンライン環境の整備をした。1月には神戸コミュニティフォーラムが行われ、8名の生徒が英語によるディスカッションのファシリテーターを務めた。

(葺合高校：茶本教頭)

- 後半はオンラインがどんどん増えてきた。課題研究発表と協働創造活動は、全てがオンラインになり、それぞれの発表会がオンラインの可能性と課題を抱えて行われた。

(科学技術高校：中野教頭)

- コンソーシアムでの活動研究を推進する機運が学校全体・生徒間で非常に高まっている。
- 発表する機会を求めており、自分たちが発表したいという主張が強くなっている状況である。
- コロナ禍でデジタル・トランスフォーメーションが進んでいる中、今年は従来の形に囚われることなく、よりよい環境だからこそできる「こと」「もの」に取り組むことができた。
- ICTに強い教員、強い生徒がたくさんいるので、コンソーシアムを進める生徒・教員の連携を今後も進めていきたい。また、そういう環境が構築されていることを大変うれしく思う。

(神港橋高校：清家教頭)

- 令和2年度は連携をどんどん進め、令和3年度に向けてさらに広げていく取組みを行った。
- 葺合高校の「探究の日」とよく似た取組として、「橋タウンミーティング」を行っており、WHOの茅野医官に来ていただき、初めてWHOと連携の事業を実施した。
- 12月からは、令和3年度の連携を深めるために各団体や大学を訪問、企業との連携もさらに広げる準備を進めている。
- WWLを通して、生徒の興味関心の持ち方や担当教員の課題研究への取組が大変熱心になった。今回、台湾との交流を深めるテーマで発表した生徒の担当教員は、昨年度葺合高校で課題研究交流発表会を見学し、「自分もこんな課題研究の指導したい」と思うようになり、学校外で他者の発表を見るなどして学び、今回このような学校代表生徒を指導することができるようになった。これが一番大きな影響であり、こういったことを広げていきたい。これが令和3年度の課題である。

(須磨翔風高校：片山教頭)

- キャリア教育を中心とした教育活動を軸として、3年間独自の課題研究を行っている。
- 3年次の夏休み後、課題研究の集大成として、年次毎に校内での発表会がある。
- 県立高校も含めた県内総合学科15校による、第22回研究発表会が須磨友が丘高校で行われ、本校から1名が発表した。対面形式の発表で堂々と発表する様子を見て、1年生からの指導と経験の積み重ねの大切さと、3年間の成果を感じた。
- 令和元年度「課題研究メソッド」という書籍を全職員に配布し、課題研究を指導する際のテキストにした。先生方一人ひとりの課題研究の指導に対する意識も変わり、テキストの手法に沿って発表のプロセスがなされていることをすごく感じた。
- 来年度7月のWWCに向けて、教科横断的な取組みも視野に入れながら、英語の授業での外国人講師とのティーム・ティーチングなどを活用していきたい。

(六甲アイランド高校：津村教頭)

- 1年次に進路プランニング、2・3年では「神戸学」で総合的な探究の時間の学びをしている。開校以来20年以上の蓄積をもって実施しているが、今年は最初の2か月の休校の影響が大きく、今年の3年次生は「神戸学」の最後のまとめが非常に弱く残念である。
- 1・2年生に関しては、総合科学系SSHの生徒を中心に、12月の交流発表会に参加するなど、使用言語を問わず、自分の取組を発表したいという意欲的な生徒が多く、今年の活動を支えられた感がある。
- 開校から23年が経ち、系独自の蓄積が増えてきたため、9つの系・コース同士のつながりにやや弱さが出てきている。それぞれの系だけで様々なことができてしまうため、連携の弱さとなっている。そこに気づいた教員が、1年次生において学年全体で共通教材を使い、学習に関してのスキルを上げ、探究学習につなげようという取組に、特に力を入れている。
- 11月11日には、ノーベル物理学賞の梶田博士の講演を聞き、学ぼうという意欲に火をつけられた生徒もいる。
- 先日、自然科学研究部が外来種のバッタを発見するなど、様々な場所で活躍しており、それがそのまま探究活動につながるように地域や様々な機関と連携しながらやっていきたい。
- 生徒が校外で発表したり、取り上げられたり、外部機関の方と接すると元気になる。本校の現状は、このように火をつけられてやる気の出た生徒がおり、その生徒にまた刺激を受ける生徒がいる、という良いサイクルである。総合科学系以外の系でも、こういったことを期待して今後探究学習がどんどん外に出ていくことがあるのではないかと考えている。

2. 取組に対する評価、アドバイスや支援のあり方に関する意見

(伊藤委員)

- コロナが収束してもオンラインがそのまま続いていく。学校でもオンライン活動が増えてきており非常に頼もしい。
- オンラインができないと前に進まない生活常識・様式になり、今後はオンラインがキーワードになってくる。

- 公開授業の議論で、限られた時間の中での説明は「アンサーファースト」が必要で、まず結論、反対する理由はこう、なぜならば…と言わないといけない、日本語の場合はIOCが…、例えば…、一方で…とか、説明していたら賛成か反対かわからない。英語のリサーチプロジェクトとかコロナのオリンピックに対する提言で英語は非常にクリアである。
- 家庭生活とか探究活動も「女性管理職」や「男性の育児休暇」とか「男女のくらしやすい職場」というところでは、北欧のケースはという形で、いいケーススタディーを紹介して、それを大事にという論法だったが、なぜ北欧がよいのかというところまで踏み込めていない。北欧対日本で、なぜ北欧では男女協働が進んでいるのかとか、男性の育児休暇の消化率が高いとか、高校生なのでそこまで厳しいかもしれないが、もう少し三段論法で詰めていかないといけない。
- GSICの「コロナ禍に行われる東京五輪に対する私たちの提言」の授業で、先生がデータの出典先が載っていないとか、説明とグラフがリンクしていないなど、講評をしていたのが非常に良かった。3人の先生が話し合い、アイコンタクトして話していた。声のボリュームも大丈夫とかの講評をしており、非常に良かった。
- 高校生の年代から、いろいろなことに興味を持ち、「女性の管理職が少ないのはなぜか」とか、「男女の育児休業取得率」「働く環境」「環境を汚したらどうするか」とか、15、16、17歳の時に考えておくことは非常に大事で、それをディスカッションしていることに関して非常に頼もしいと思う。「企業が託児所を作ったらいい」という案については、限られた時間で詰めていくのは難しく、企業が託児所をつくった時の状況を考えると、テレワークがこれだけ発達すれば企業の託児所はいらない。家で仕事ができる。もう少し考えを深めたら上手な思考ができるのにと思った。
- データについても数字はポンポン出るが、母集団は実際どれくらいなのか。電気自動車0.7%です、といわれたときに全体はいくらなのか。数字のマジックであるから、そこをしっかりと押さえないと100万台なのか1000万台なのか、これが0.7%といわれて多いのか少ないのか、データの裏には必ずそういうのがある。数字を丁寧に扱うと良いと思った。
- 女性管理職といわれて、どこから女性管理職というのか。そういった所まで踏み込むと、もう少し短い時間でもわかる。
- 時間内に収めるということは非常に上手にできている。先生方の教育の賜物であると思っている。

(金居委員)

- コロナ禍で、オンラインを導入することにより会場にいなくても外の人がそこに入ってくるということができた。葺合の場合は国際科があるから、世界各国の児童生徒と同じテーマで語れる。そういった素晴らしい点が、7月のオンライン会議でもあったと思う。コロナでもそれぞれの国で対応の仕方が違うから、それを自分のことのように考えることができたと思う。
- 12月のオンライン交流会では、スマホを使用して出先からオンラインで聞いていたが、非常にクリアに聞こえていて、しかもやりとりが非常にうまい、これはすごいと思った。こういうことが出来るのであれば、「外部に宣伝し、そして取組む」という仕組みを作れば、実施している取組ももっと広がっていくのではないかと思った。
- 1年生の「夢を追い続ける」という発表で、「これまでの疑問」とか、「どんなふうに見えるか」とか、生き生きと発表していて、1年生がこんなふうに参加できるのだと感じた。
- 「虐待」のテーマで家庭内暴力、児童虐待などについて、実際に生徒が質問のやり取りをしている中で、もしそういうことに遭遇したら、誰かに通報するなど、自分も積極的に関わっていかないとだめだと1年生が言っていた。この取組を続けることで、この1年通じて生徒の力がすごくレベルアップしているなと感じた。

(古賀委員)

- 大事なことが3つある。1つ目は、社会と繋がること。学校教育が社会ともっと繋がっていかねばならない。どうして学んでいるかわからないという状況が、学びを遠ざけている。2つ目は、今までは「先生が何を教えるか」であったが、これからは「子供たちが何ができるようになるか」ということに力を注がなければならない。3つ目は、生徒は持続可能な社会の「作り手」であるということ。今まで「担い手」という言葉が多かった。中学校でもそのことが非常に強く求められていると感じる。
- そういう観点で、今年度初めて知ったこの活動を見て、まさしくそれだと感じた。議論が稚拙であるとか知識が不十分であるとか、それは当たり前であって、今までの考えであれば「十分な知識をつけてから議論をしよう」であったが、そうではなく、知識が定着するかどうかではなく、やっている中で「それってどういうことなん、え、なんでそう思うの」など、「それやったらこれを調べよう」とか「知識をもっとつけていこう」等、今日の議論はそういう部分がいくつも見られたことが非常にうれしかった。
- 実は、今話した部分は中学校が一番遅れている。小学校も高校も結構取組んでいる。中学校は、なかなかその部分の教員の意識を変革することが難しい。こういった取組を中学校の教員に広く知らせていく必要がある。
- 全ての全日制市立高校の方が発表しており、それぞれ特徴のある神戸市立高校の方が同じ目標、同じステージで互いに交流していることがうれしく、是非もっと続けて欲しいと思う。

(丹沢委員)

- 神戸コミュニティ・フォーラムは、初めての試みとして、オンラインで行い、葺合高校のみなさんには、それぞれのグル

ープで議論を英語でまとめていただくファシリテートをやっていただき、非常に大変な役割を果たしていただいた。「やさしい日本語」というテーマのもと、コンパクトで完結に的確にまとまったのもこうした取組の成果である。「やさしい日本語」というのは何かというと、日本人、外国人双方がわかる共通語、共通化の日本語、日本語の国際化というような視点があり、我々が普段何気なく使っている言葉も、それは日本人のコミュニティとか今までの歴史に立脚した形の表現であったり、言い回しであったりするため、外国人の方には全然わからない。それを如何にしてわかるように伝えていくかということが非常に重要になってきている。外国との渡航制限というのもあって、そういったことを進めていくことが外国人と日本人とのコミュニケーションを日本国内において活性化させると考え、そういった取組を進めている。

- これからは国際化といったときに、もちろん他の国の文化・言語を学ぶということも大切であるが、実はこれからは自国の文化、自国の言葉をもう一回見つめなおす機会がやってきている。
- こういった場でも外国人とのコミュニケーションにおける日本語の在り方の見直しや他の国の日本語を学んでいる学生と、場を設け「伝わる日本語」「みんながわかる日本語」とはどういうものか議論して、是非我々にフィードバックしていただくと、これからの神戸市の施策にも活かしていけるとともに、神戸が外国人にも住みやすい街になっていくのではないかと。

（浅野委員長）

- このWWLの取組というのは、非常に仕組みとしてうまくいっているのではないかと。
- 一点目は共同実施校、連携校である市立高校が皆参加しており、中嶋さんが引用してくれたように多様な学校が自分の特技を活かして参加できる。科学技術校はやはり工業高校でICT、神港橋高校はもともと商業の流れを汲むので、町に出ていくとかタウンミーティングとかが得意、須磨翔風高校は総合高校なので課題研究は18番中の18番、六アイは神戸学を長年やっておられるし、SSHもやっておられ、上昇気流の高校である。
- いろんなタイプの学校が集まって全体の事業を盛り上げるというのは簡単のように聞こえるが、実は難しい。
- 他府県のWWLで進学校教員が連携校として取組んでいるが、一緒になって何かをするというのはなかなか難しい。
- 住み分けている4校の市立高校が一緒になっている。葺合もまた違うタイプの学校である。非常に上手くいっている、成功している。さらに当然ながら教育委員会事務局そして市長部局バックアップあってこそ上手くいく。
- 二点目はいろいろ授業とか発表を見たが、以前に比べるとQ&Aの質があがった。以前はもう少し教えてください、といった質問であったが、今回見ていると課題解決策をなぜ選んだか、といった質問をしていた。葺合高校は、令和元年度までは英語は上手だが課題研究の質がいまいちと思っていたが、課題研究の質も良くなってきた。非常にいい事だと思う。
- 一番感心したのは、新しく作った教科横断的な科目が素晴らしい。もともと授業が上手な先生が生徒たちと協力して一緒になってやっていく。しかも「コロナの中で何をするか」というテーマも良く、非常にいい授業だと思った。
- また今日の課題研究の発表を聞いて思ったことだが、いきなり外国の方と課題研究のやり取りをすると、背伸びをしすぎて中身が薄くなる気がする。災い転じてという感じもするが、今日の課題研究では比較的神戸であるとか身近なことを扱っており、そのおかげで内容に対する深掘りができているという気がする。
- 三点目に、やはり感心するのは、教員の取組に盛り上がりの機運がでてきたことである。非常に重要なことである。今回の取組によって子供たちの力が高まっている姿を見て、教員も「これは面白い」というサイクルになってくると思う。
- 特に最後に強調したいことは、課題研究のレベルが上がった。課題対応、課題解決の授業については、他都市より一周早い。他都市は高校独自でやる、神戸市は団体戦でやるので、課題研究のレベルも上がりやすい。授業のレベルが上がり、それが教員の身につくレベルアップにつながり、課題研究が上手くなる。ぜひ自信を持って取り組んでいただきたい。

【おわりのあいさつ】（大野校長）

- 学校行事が削られている中で、生徒が自分たちの気持ちをどう発散していくか、その場所づくりが非常に難しい。行事を変更しながら進めているが、自分たちがもっと発表したい、もっと取組みたい、そういう機運に本校もなっている。全日制市立高校は、そのような機運が盛り上がってきている。
- 事業の実施に課題はたくさんあるが、WWL最終年度の令和3年度にWWC（ワールド・ワイド・コンファレンス）を7月14・15日に行う予定である。7月15日は神戸文化ホールに本校生徒及び市立高校の参加可能な生徒が集まり、発表を行う予定にしている。コロナの状況がわからず、オンラインとなるかもしれないが、情勢には対応していかなければならないと思う。
- 今日の「学際リサーチ」の発表で、「ウィズコロナの時代に求められるもの」「自分たちの考える力がついた」「対応する力がついた」「発表の中でいろんな力がついた」「我慢の生活であるが自分の中で覚悟や自己決定力がついた」「葺合高校に来たら大学へ行くのは当たり前と思っていたが、やっぱりよく考えてどういう大学へ行くか考えるようになった」このような発表があった。こういった時代であるが、我々もいろいろな対応しながら覚悟を持っているようなことを進めていかなければならないということを、改めて生徒から学んだ。また来年も引き続きよろしく願います。

資料5 WWL 検証委員会の記録

第2回 WWL 検証委員会の記録

日時：令和3年1月29日（金）

参加者：検証委員 山下 晃一（神戸大学大学院准教授）
葺合高校関係職員 大野 毅（校長）、山内 紫乃（教頭）、
村上ひろ子（国際科長）、仲村 智子（教諭）
神戸市教育委員会 蔵本 朗（学校教育部高校教育担当課長）、
中嶋 秀（学校教育課指導主事）

1. あいさつ

2. 令和2年度の事業実施報告について（拠点校）

- 4月 ・休校のため全ての行事が中止
 - 5月 ・インターナショナル・コンファレンス準備
 - 6月 ・国際機関 WHO の講義
 - 7月 ・国際会議「インターナショナル・コンファレンス」
 - 8月 ・学際カリキュラムに関する教員研修、WWL 課題研究交流発表会の打合せ
 - 9月 ・カナディアンアカデミーと連携協定を締結。「探究」の講義、AI 企業「オプティム」による講演会
 - 10月 ・神戸市立六甲アイランド高校の連携校が正式決定。「リスク」に関する講義、産官学推進事業「AI 翻訳プロジェクト」開始、「みらい翻訳」とオンラインインターン、「NTT ドコモ」とオンラインワークショップ
 - 11月 ・「リスクマネジメント」の講義、学際教科の参観・協議、大学教授による課題研究の指導
・立命館宇治高校（WWL 指定校）によるオンライン国際会議に参加。
 - 12月 ・WWL 課題研究交流発表会、NPO、大学教授による英語での講演会、イオン主催の「アジアユースリーダーズ」
 - 1月 ・「探究の日」、神戸市国際課主催の「コミュニティフォーラム」、WWL フォーラム
 - 2,3月 ・NPO の講演会とワークショップ、海外大学教授による社会学についてのオンライン講演
- Neo MAKS 調査 ・1年生：休校期間中にオンライン実施、1,2年生：2月に実施、3年生：12月に比較調査を実施。

3. オンラインについて協議（検証委員・管理機関・拠点校）

- 今年ほとんどプログラムがオンライン実施であり、当初は慣れていないため本当に大変であった。
- 12月くらいになると生徒、先生ともにオンラインに慣れてきた。
- 7月のインターナショナル・コンファレンスは設備の準備等、管理機関にお世話になった。
- 学校のパソコンがオンライン接続できなかったため、毎回レンタルし、周辺機器の接続、ネットワーク接続設定、テスト接続など煩雑な作業が多かった。対面であれば、当日に生徒のポスタープレゼンが間に合って、リハーサルできれば良かったのだが、オンラインでは事前の準備が大変である。
- 高校は一斉授業でないと成立しないと思ったが、オンラインや個別化学習化で乗り切ることができた。
- 学校自体、案外学習に対しての「復元力が高い」。根幹の部分はそう簡単には揺るがないということが見えた。
- 通常授業ではコロナによる多くの制約を受けたが、案外遠くの人と簡単に繋がることができる良い点がある。
- オンラインによる「行かなくても行ける」という国際交流の気付きを大事にするべき。

4. コロナウイルス関連について（検証委員・管理機関・拠点校）

- コロナにより海外には行けず、落胆し「これを目当てに入学したのに」という痛切な声をよく聞く。
- WWL や葺合高校にとって海外のカルチャーなどを現地で感じるできない不自由さは、かなりの痛手である。
- コロナにより、我々が今まで、「きちんと」としてきたことをどうしたらいいのか迷う。いび形の包容力とか寛容さにつなげていくことが必要になってきていると痛感する。生徒を信じる、その信頼関係の中で何かを行う。信頼が裏切られたら裏切られたときに考える。二段構え、三段構えの仕組み、その心構えが必要であると思う。
- 今回のコロナで学校のポテンシャルが新しく開発された部分がある。
- 小学生が「休校で学校に行かなくなったら、自分が一日中何考えているかわからない。」と言う。学校に行っていたら無理にでも、何かを考えたりするきっかけがあった。今の教育は詰め込み教育とか学びの主体性がないと言われるが、その状況でも得ていたものはあった、授業の場に居て何かを聞いていることに意味がある。
- 今まで潜在的であった学校本来の意味が顕在化してきた。しかし、学校の本来の役割に疑問を持つ生徒も出てきた。ビデオで出来る、学校でなく家でも勉強できると思う生徒が結構いる。

- 生徒のニーズとかみ合う可能性があるかもしれない。ベストな状況を考え視野を広げる必要がある。
- 教育とは、『ある程度相手の生き方に介入し、時には力づくでも引っ張らなければならない』ところがある。
- 高校では、細かいことを言わずコロナに対応した結果、対応する力は生徒も教師もついてきたと感じる。
- 高校は既に日常的な光景に戻っているのではないか。マスクをつけている以外はほぼいつも通りに感じる。

5. 調査について（検証委員・管理機関・拠点校）

- 3年生を昨年と比較すると「今住んでいる地域の行事に参加した」以外は上がっている。
- 1年生は休校期間中に調査を実施したため、「興味のある分野」へのチェックが昨年よりかなり少なかった。分野への理解が不足しているかもしれない。
- 「興味がない」という回答の意味は、「無気力」なのか、「学びの欲求の反動の現れ」なのか、見極めてみたい。

6. 産官学の連携について（検証委員・管理機関・拠点校）

- 高校の段階で、こういった産官学の連携の取組をするというのは珍しい。
- 企業はオンラインの取組・対応は早い、死活問題かつ競合相手がいるから対応が早い。
- 活動を決める企業の会議に代表生徒が加わり、生徒も納得しながら話し合いを進めることができた。
- 教員は企業の方と話す機会が少なく、ディスカッションの仕方を教えてもらうなど勉強になった。
- 神戸市企画調整局と国際部、NTT、みらい翻訳と連携した「AI 翻訳」の取組を行い、ワークショップで体験した。翻訳がすごいから勉強する気がなくなる。しかしディスカッションの中で、語学力は必要という結論に至った。
- WWL での高大連携「先取り履修」は互いの立地、学習内容、大学間での科目の整備、先生への報酬等、課題が多いと感じた。令和3年度には、検討委員会の設立やオンライン利用等で高大連携のきっかけを作りたい。
- 今年度、頑張ることができたことのメリットをピックアップしておいた方がいい。
- 今年模擬国連に取り組んだ。単位ではないがこういった一つのプロジェクトに関して、一緒に指導していただき高校生にちょうど合うように大学としての実践を活かしてもらったことが良かった。
- 高大連携の問題点の一つは、入試を考えた際、特定の高校を何らかの形で優遇することは難しいという、公平性の原則である。
- 共同実施校・連携校でも産官学のプロジェクトが増えてきた印象である。

7. 運営指導委員会より内容報告（検証委員・管理機関）

- 拠点校、共同実施校、連携校の市立高校の連携が良い。
- 生徒の発表に対する取組み姿勢が前向きに変化した。指導する教員に前向きな変化があった。
- 来年度の課題研究の授業において、情報共有を行い共同でできることは共同で取り組もうという意見がでた。
- 葺合の英語力のレベルは従来から高く、今年は発表内容もかなりレベルアップをした。質問力が今後の課題だ。
- 葺合の生徒はスクリプトが決まっているものは堂々としている。しかし相手に何かを聞くということになると、すごいハードルが高いと感じる。どれくらい本質的な問いを作れるか、どれくらい自分にとって必然的な問いとすることができるかが重要なポイントである。

8. コンソーシアムの構築について（検証委員・管理機関・拠点校）

- 市立高校によるコンソーシアムの構築は、当初は相互補完的な役割や色んな視点を持つと、無いものを他のいろんな所で持ち寄ろう、というような形で始まった。
- 市立高校によるコンソーシアムの構築は、絶対実施して良かった価値のあることの一つではあると思う。お互いを知ることで、相手へのリスペクトに繋がる。
- 多くの学校と関することで、生徒は自分の当たり前とする価値観に刺激が加わっている。それが今後のコンソーシアムの面白さであり、課題である。
- 今後の情勢は予測がつかないので、それぞれの専門性や知識を寄せ合って対応、解決する必要がある。高校生段階で多様性を受け入れ、それぞれの持ち味を活かしていくような体験をして欲しい。多様性と協働性が必要。
- 生徒が自分の足りない部分を、生徒たち同士の情報・ネットワークの中で、自ら他校にお願いに行くことがあった。以前の交流発表で他校の学習内容や活動内容に関する知識があり、実際に他校に発表用アプリを作成してもらった。生徒の潜在力が発現した教師冥利に尽きる象徴的なエピソードである。
- 生徒同士の緩やかな繋がりや、これからの社会に必要な下地作りは十分達成できているように感じる。

9. おわりに

- スタンフォード大学の「Stanford e-Japan」に参加する方向で検討している。
- 「Stanford・e-KOBE Program」のようにカスタマイズし、神戸自体のブランド力につながって欲しい。

資料6 WWL 文部科学省 意見交換会の記録

日時：令和3年2月25日（木）

参加者：葺合高校関係職員 大野 毅（校長）、山内 紫乃（教頭）、
村上ひろ子（国際科長）、茶本 卓子（教諭）
神戸市教育委員会 蔵本 朗（学校教育部高校教育担当課長）、
中嶋 秀（学校教育課指導主事）
中尾幸太郎（学校教育課）

1. 拠点校から令和2年度事業説明

- 4月 ・休校のため全ての行事が中止
 - 6月 ・国際機関 WHO の講義
 - 7月 ・国際会議「インターナショナル・コンファレンス」
 - 8月 ・学際カリキュラムに関する教員研修、WWL 課題研究交流発表会の打合せ
 - 9月 ・カナディアンアカデミーと連携協定を締結。「探究」の講義、AI 企業「オプティム」による講演会
 - 10月 ・神戸市立六甲アイランド高校の連携校が正式決定。「リスク」に関する講義、産官学推進事業「AI 翻訳プロジェクト」開始、「みらい翻訳」とオンラインインターンシップ、「NTT ドコモ」とオンラインワークショップ
 - 11月 ・「リスクマネジメント」の講義、学際教科の参観・協議、大学教授による課題研究の指導
・立命館宇治高校（WWL 指定校）によるオンライン国際会議に参加。
 - 12月 ・WWL 課題研究交流発表会
 - 1月 ・「探究の日」、神戸市国際課主催の「コミュニティフォーラム」、WWL フォーラム
 - 3月 ・海外大学教授による社会学についてのオンライン講演、国内 WWL フォーラム参加（広島県）
- 令和3年度は、7月14日、15日に WWC（国際会議）実施予定。海外へのフィールドワーク実施希望。

2. 意見交換（質疑）

- Q. 令和3年度のカリキュラムについて自立活動とはどういったものか。
A. 通級指導に対応したものである。
- Q. キャリアリサーチ、学際リサーチ、学際国語など今年度より行っている授業においてコロナの影響はあったか。
A. 海外に行くことができなかった。留学生交流などは実施することができなかった。国際科の GSII B では英語の課題研究などの実施に影響が出た。1年生ではフィリピンへのフィールドワークが中止となり、生徒は目標がなくなったと言っている。
- Q. 身につけさせたい資質・能力が身につけていないのか。
A. 現地に行かないと、多角的にもものを見るといった視野が、なかなか身につかない。見えづらいが、このことが教育として大切である。だから直接の対面を求める。ただオンラインで出来ることも多い。
- Q. オンラインで全てまかなえないこと、また見えづらい中で何を学んでいるのか。
A. 3年生のデータを検証中であるが、モチベーションは低下している。
- Q. この状況をカバーする中でオンラインを利用したと思うが、オンラインのフィールドは広がったのではないか。
A. 新しい地域との交流など、新しい道が開けた。イランやインドともつながった。

- Q. オンラインの活用し、新しい学びのスタイルを構築して欲しい。
- A. キャリア教育として総合的な探究の時間や学際リサーチを活用し、自分の生き方あり方を探っている。そのためのスキルや手法を身につけさせたい。ただし時間的なことが問題となる。これに時間を使えば、ほかが足りなくなる。
- Q. 時間的に足りたのか。
- A. 与えられた時間の中でやり切った。カリキュラムの工夫を行った。国際科は具体的な目標を持っており、普通科は自分の将来や身近なところをテーマとしてリスクマネジメントを社会課題として取組んだ。
- Q. テーマの柔軟性がないといけない。
- A. 上手くいっている。
- Q. 他教科との横断はうまくいっているか。
- A. 各教科の見方、考え方を取り入れ、教科横断的な授業を持続的に行いたい。時期の前倒しや教科の検討をしていきたい。

まとめ

(文部科学省)

先生方が話し合ったり、研究会などがあったのか。多くの教科の先生方に関わって欲しいと思っている。日常の事象を捉えて、問題解決のためにどんな知識を使うのか、探究活動で培った力が問題を解くためにどのように役に立ったのかなど、教科の関連性は大切であり、重要である。教員間の指導内容の引継ぎや、校長・教頭間での情報共有が必要であろう。

(神戸市)

国際会議については、長期の活動として国際会議を実施していきたい。先取り履修について、附属高校であれば容易である。神戸市外国語大学とより密にしていきたい。令和4年度に向けて先取り履修に取り組みたい。第2外国語としてスペイン語、中国語の履修をALネットワークの中でより追求したい。

3. 高校改革について

(文部科学省) 中学生の高校選択について

(神戸市) 雰囲気がいよ、広い、などが多い。高校のアドミッションポリシーが伝わっていないのではないか。中学生へのキーワードをしっかりと明確にしていきたい。

(文部科学省) 普通科改革について

(神戸市) 普通科の中に、「地域と学ぶ」「地域で学ぶ」など、普通科の後押しをしやすい仕組みづくり。神戸市全日制5校、各校特色を打ち出している。普通科改革の必要はあると思う。新しい学科を作ることにより入試の倍率向上などにつながる。中学3年生の進路選択は重要である。

(文部科学省) カリキュラム開発についてはどうか。

(神戸市) 普通科において幅広いカリキュラム設定は難しいのではないかと。必履修の縛りが多いので、カリキュラムへの組み込みが難しい。

(文部科学省) 選択肢幅が狭いのは感じている。

(文部科学省) 令和4年度への課題はどのように考えているか。

(神戸市) 縛りの中でやり繰りしなければならない。教科横断的な多様な他者との連携を実施する必要がある。WWLの中でALネットワークを活用した連携をしていきたい。神戸市として、「Stanford e-Japan」に向けた予算要求をしている。

(文部科学省) 進捗情報をください。

令和2年度教育課程案

神戸市立葺合高等学校
令和2年度入学生（20回生）

国際科

教科	科目	標準 単位数	1年		2年					3年								類型別・教科 履修単位数計	
			共通	共通	選択				共通	選択									
					地歴1	選択1	選択2	選択3		地歴2	地歴3	選択4	選択5	選択6	選択7	選択8			
国語	国語総合	4	5																15/17/19/21
	国語表現	3							2◆										
	現代文B	4		2						2									
	古典B	4		3						3									
	◎現代文探究	2																2☆	
	◎古典探究	2										2◇							
地理歴史	世界史A	2									2△							10	
	世界史B	4			4#					4#									
	日本史A	2									2△								
	日本史B	4			4#					4#									
公民	現代社会	2	2															2/4	
	◎倫理政経	2															2☆		
数学	数学I	3	3															5/7/8/9/10 /11/12/14	
	数学II	4				3◎													
	数学A	2	2																
	数学B	2															2◆		
	◎数学I・A探究	2										2◇							
	◎数学II・B探究	2												2▲					
理科	科学と人間生活	2		2														4/6/8/10	
	化学基礎	2																	
	生物基礎	2	2																
	◎生物探究	2															2§		
	◎化学探究	2															2★		
保健体育	体育	7~8	3	2						2								9	
	保健	2	1	1															
芸術	音I・美I・書I	2	2															2	
家庭	家庭基礎	2	2															2	
情報	情報の科学	2	2															2	
英語	◎総合英語	4~8	4	1						2								22/25/27	
	◎英語理解	4~8		3															
	◎英語表現	2~8		2						2									
	◎時事英語	2~6		2						2									
	◎異文化理解	2~6	2																
	◎コミュニケーションA	2~8					3◎												
	◎コミュニケーションB	2~8															2§		
◎エクステンシブ・リーディング	2								2										
外国語	◎中国語I	2																0/2/4	
	◎中国語II	2															2▲		
	◎スペイン語I	2															2◆		
	◎スペイン語II	2															2▲		
国際	◎日本文化紹介	2																0/2/4	
	◎アジア地域研究	2															2▲		
グローバルスタディーズ	◎グローバルスタディーズⅠA	1	1															5/7/9	
	◎グローバルスタディーズⅡB	2		2															
	◎グローバルスタディーズⅡC	2															2*		
	◎グローバルスタディーズⅢC	2															2★		
教科授業数合計			31	20	4	3	2	2	15	4	2	2	2	2	2	2	2		
総合的な探究の時間	◎グローバルスタディーズⅠB		1															3	
	◎グローバルスタディーズⅡA	3~6		1															
	◎グローバルスタディーズⅢB								1										
自立活動		(※1)	0~1	0~1					0~1									0~3	
特活	ホームルーム活動	1	1	1					1									3	
総合計			33~34		33~34					33~34								99~102	

- ・科目名の前にある◎は学校設定科目、○は専門科目である。
- ・#◎*◆△◇▲§☆☆をつけた科目は、いずれか1科目の選択履修である。
- ・選択8で化学探究を選択できるものは、選択2で化学基礎を履修したものに限定する。
- ・2年での地歴の選択：世界史B・日本史Bから選択。3年は、2年と同じ科目を選択しなければならない。
2、3年で世界史、日本史の両方を履修すること。
- (※1) 標準単位数は1年あたり1~7。

令和2年度教育課程

神戸市立科学技術高等学校

令和2年度入学生

【機械工学科】

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	備考	合計	
国語	国語総合	4	2	2			4	6
	現代文A	2			2		2	
地理歴史	地理A	2	2				2	4
	世界史A	2		2			2	
公民	現代社会	2			2		2	2
数学	数学Ⅰ	3	3		f 2		3~5	7~17
	数学Ⅱ	4		2 b 2	f 2		4	
	数学Ⅲ	5			f/g/h 6		0~6	
	数学A	2		c 2			0~2	
	数学B	2			i 2		0~2	
理科	科学と人間生活	2		2			2	4~8
	物理基礎	2	2				2	
	物理	4			j/k 4		0~4	
保健体育	体育	7~8	3	2	2		7	9
	保健	2	1	1			2	
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2					2
	美術Ⅰ	2	a 2				2	
	書道Ⅰ	2	a 2					
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3	7
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		2	2		4	
家庭	生活デザイン	4	1	2			3	3
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替		
普通科目小計			19	15~19	10~20		44~58	
工業	工業技術基礎	2~4	3				3	29~43
	課題研究	2~6			3	総合的な探究の時間を代替	3	
	実習	4~21		3	3		6	
	製図	2~12	2	2	2		6	
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2	
	工業数理基礎	2~4	1	1	1		3	
	機械設計	2~8	2	2	j 2		4~6	
	機械工作	2~8		2	k 2		2~4	
	原動機	2~6		c 2	h 2		0~4	
	生産システム技術	2~6		b 2	g 2		0~4	
	自動車工学	2~8			i 2		0~2	
	電子機械	2~6			g 2		0~2	
◎都市防災	2~6			h 2		0~2		
工業科目小計			10	10~14	9~19		29~43	
科目合計単位数			29	29	29		87	
総合探究	科学技術と私	3				課題研究で代替		
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3	
自立活動	自立活動	(※1)	0~1	0~1	0~1		0~3	
合計単位数			30~31	30~31	30~31		90~93	

【注1】 同じアルファベットの中から1科目選択する

【注2】 普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注3】 「総合的な探究の時間」は「課題研究」で代替する

(※1) 標準単位数は1年あたり1~7単位

令和2年度教育課程

神戸市立科学技術高等学校

令和2年度入学生

【電気情報工学科】

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	備考	合計
国語	国語総合	4	2	2			4
	現代文A	2			2		2
地理歴史	地理A	2	2				2
	世界史A	2		2			2
公民	現代社会	2			2		2
数学	数学Ⅰ	3	3		f 2		3~5
	数学Ⅱ	4		2 b 2	f 2		4
	数学Ⅲ	5			f/g/h 6		0~6
	数学A	2		c 2			0~2
	数学B	2			i 2		0~2
理科	科学と人間生活	2		2			2
	物理基礎	2	2				2
	物理	4			j/k 4		0~4
保健体育	体育	7~8	3	2	2		7
	保健	2	1	1			2
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2				
	美術Ⅰ	2	a 2				2
	書道Ⅰ	2	a 2				
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		2	2		4
家庭	生活デザイン	4	1	2			3
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替	
普通科目小計			19	15~19	10~20		44~58
工業	工業技術基礎	2~4	3				3
	課題研究	2~6			3	総合的な探究の時間を代替	3
	実習	4~21		3	3		6
	製図	2~12		2			2
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2
	工業数理基礎	2~4	1		1		2
	電気基礎	2~10	4	3	j 2		7~9
	電気機器	2~4		2	g 2		2~4
	電力技術	2~6		b 2	i 2		0~4
	電子回路	2~6		c 2			0~2
	電子計測制御	2~6			2		2
	通信技術	2~6			k 2		0~2
	ソフトウェア技術	2~6			g 2		0~2
	ハードウェア技術	2~10			h 2		0~2
	プログラミング技術	2~6			j 2		0~2
	コンピュータシステム技術	2~8			k 2		0~2
	◎電気鉄道	2~6			h 2		0~2
◎都市防災	2~6			h 2		0~2	
工業科目小計			10	10~14	9~19		29~43
科目合計単位数			29	29	29		87
総合探究	科学技術と私	3				課題研究で代替	
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3
自立活動	自立活動	(※1)	0~1	0~1	0~1		0~3
合計単位数			30~31	30~31	30~31		90~93

【注1】 同じアルファベットの中から1科目選択する

【注2】 普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注3】 「総合的な探究の時間」は「課題研究」で代替する

(※1) 標準単位数は1年あたり1~7単位

令和2年度教育課程

神戸市立科学技術高等学校

令和2年度入学生

【都市工学科】

教科	科目	標準単位	1年	2年	3年	備考	合計	
国語	国語総合	4	2	2			4	6
	現代文A	2			2		2	
地理歴史	地理A	2	2				2	4
	世界史A	2		2			2	
公民	現代社会	2			2		2	2
数学	数学Ⅰ	3	3		f 2		3~5	7~17
	数学Ⅱ	4		2	f 2		4	
			b 2					
	数学Ⅲ	5			f/g/h 6		0~6	
	数学A	2		c 2			0~2	
数学B	2			i 2		0~2		
理科	科学と人間生活	2		2			2	4~8
	物理基礎	2	2				2	
	物理	4			j/k 4		0~4	
保健体育	体育	7~8	3	2	2		7	9
	保健	2	1	1			2	
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2				2	2
	美術Ⅰ	2	a 2					
	書道Ⅰ	2	a 2					
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3	7
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		2	2		4	
家庭	生活デザイン	4	1	2			3	3
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替		
普通科目小計			19	15~19	10~20		44~58	
工業	工業技術基礎	2~4	3				3	29~43
	課題研究	2~6			3	総合的な探究の時間を代替	3	
	実習	4~21		3	2		5	
	製図	2~12	2	2	m 4		4~8	
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2	
	建築構造	2~6		e 3	k 2		0~5	
	建築構造設計	2~8		d 2	g 2		0~4	
	建築法規	1~4			j 2		0~2	
	建築施工	2~5		b 2	i 2		0~4	
	建築計画	2~8		c 2	h 2		0~4	
	測量	2~6		d 2	g 2		0~4	
	土木施工	2~6		b 2	m 4		0~6	
	土木基礎力学	2~8		c 2	j 2		0~9	
				e 3	k 2			
	土木構造設計	2~4			h 2		0~2	
	社会基盤工学	2~4			i 2		0~2	
◎都市工学	2~6	3				3		
◎都市防災	2~6			h 2		0~2		
工業科目小計			10	10~14	9~19		29~43	
科目合計単位数			29	29	29		87	
総合探究	科学技術と私	3				課題研究で代替		
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3	
自立活動	自立活動	(※1)	0~1	0~1	0~1		0~3	
合計単位数			30~31	30~31	30~31		90~93	

【注1】 同じアルファベットの中から1科目選択する

【注2】 普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注3】 「総合的な探究の時間」は「課題研究」で代替する

(※1) 標準単位数は1年あたり1~7単位

令和2年度教育課程

神戸市立科学技術高等学校

令和2年度入学生

【科学工学科】

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	備考	合計
国語	国語総合	4	2	2			4
	現代文A	2			2		2
	国語表現	2			c' 2		0~2
地理歴史	地理A	2	2				2
	世界史A	2		2			2
公民	現代社会	2			2		2
数学	数学Ⅰ	3	3				3
	数学Ⅱ	4		4			4
	数学Ⅲ	5			b 6		0~6
	数学A	2	2				2
	数学B	2		b 2	c 2		2
理科	生物基礎	2		2			2
	生物	4			b' 4		0~4
	物理基礎	2	2				2
	物理	4			b' 4		0~4
	化学基礎	2	2				2
	化学	4			b' 4		0~4
保健体育	体育	7~8	2	3	2		7
	保健	2	1	1			2
	◎スポーツトレーニング	2		c 2			0~2
	◎スポーツマネジメント	2			c 2		0~2
	◎スポーツバイオメカニクス	2			c 2		0~2
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2				2
	美術Ⅰ	2	a 2				2
	書道Ⅰ	2	a 2				2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		3	2		5
	英語表現Ⅰ	2			2		2
家庭	家庭基礎	2	2				2
	◎スポーツ栄養	2		c 2			0~2
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替	
普通科目小計			23	19~21	16~20		60~62
工業	工業技術基礎	2~4	4				4
	課題研究	2~6			3	総合的な探究の時間を代替	3
	実習	4~21		3	3		6
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2
	工業技術英語	2~4		2	c 2		2~4
	◎理数工学Ⅰ	2~6		b 5			0~5
	◎理数工学Ⅱ	2~6			b 3		0~3
	◎科学工学	2~6		c 3	c 3		0~6
◎都市防災	2~6			c' 2		0~2	
工業科目小計			6	8~10	9~13		25~27
科目合計単位数			29	29	29		87
総合探究	科学技術と私	3				課題研究で代替	
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3
自立活動	自立活動	(※1)	0~1	0~1	0~1		0~3
合計単位数			30~31	30~31	30~31		90~93

【注1】「a」の中から1科目選択する

【注2】“「b」4科目と「b'」1科目”か“「c」8科目と「c'」1科目”かのどちらかを選択する

【注3】普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注4】「総合的な探究の時間」は「課題研究」で代替する

(※1) 標準単位数は1年あたり1~7単位

令和2年度教育課程

神戸市立神港橋高等学校

【みらい商学科】

令和2年度入学生

教科	科目	標準 単位数 (網掛は必修)	1年	2年		3年		履修する 単位数の 合計
				会計 類型	情報 類型	会計 類型	情報 類型	
				システム開発系	システム活用系	システム開発系	システム活用系	
国語	国語総合	4	3	3				6
	現代文B	4				4		4
	国語表現	3				2(選択1)		0~2
	古典A	2				2(選択2)		0~2
地理歴史※1	世界史A	2	2					2
	日本史A	2		2				0~2
	日本史B	4		2		2(選択1)		0~4
公民	現代社会	2				2		2
	◎時事問題	2				2(選択2)		0~2
数学	数学Ⅰ	3	3					3
	数学Ⅱ	4		2		2		4
理科	科学と人間生活	2	2					2
	生物基礎	2		2				0~2
保健体育	体育	7~8	2	2		3		7
	保健	2	1	1				2
芸術※2	音楽Ⅰ	2	2					2
	美術Ⅰ	2	2					2
	書道Ⅰ	2	2					2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4					4
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4		3		7
	英語表現Ⅰ	2				2		2
	◎総合英語研究	2				2(選択1)		0~2
	◎e-Challenge	2				2(選択2)		0~2
	◎英語探究	2				2(選択3)		0~2
家庭	家庭基礎	2		2				2
◎リテラシー	◎リテラシーⅠ	1	1					1
	◎リテラシーⅡ	1		1				1
	◎リテラシーⅢ	1				1		1
普通教育に関する各教科の単位数の計			20	19		17~23		56~62
商業	ビジネス基礎	2~6	2					2
	課題研究	2~6				3		3
	総合実践	2~8				2(選択2)		0~2
	マーケティング	2~6		2		2(選択2)		0~2
	商品開発	2~6		3				0~3
	広告と販売促進	2~6				2(選択1)		2
	ビジネス経済	2~6				2(選択1)		0~2
	経済活動と法	2~6				2(選択1)		0~2
	簿記	2~8	4					4
	財務会計Ⅰ	2~8		6		2(選択1)		2~6
	財務会計Ⅱ	2~6				4		0~4
	原価計算	2~8		3		2(選択3)		0~3
	管理会計	2~6				2(選択3)		0~2
	情報処理(情報の科学を代替)※3	2~8	4					4
	ビジネス情報	2~8		2		4		2(選択4)
	電子商取引	2~6				3		0~3
	プログラミング	2~8				4		0~4
	ビジネス情報管理	2~6				4		0~4
	◎簿記探究	3		3		3		0~3
	◎キャリア実践※4	6						6(選択2+3+4)
◎商業時事	2				2(選択1)		0~2	
◎秘書実務	2				2(選択2)		0~2	
◎VBAプログラミング	2				2(選択3)		0~2	
福祉	◎福祉総合	2				2(選択3)		0~2
音楽	ソルフェージュ	2~8				2(選択2)		0~2
	◎教育音楽	2				2(選択3)		0~2
美術	ビジュアルデザイン	2~10				2(選択2)		0~2
	◎総合造形	2				2(選択3)		0~2
◎書道	◎生活の中の書	2				2(選択2)		0~2
	◎総合書道	2				2(選択3)		0~2
専門教育に関する各教科の単位数の計			10	11		7~13		28~34
特別活動	ホームルーム		1	1		1		3
	総合的な探究の時間		1	1		1		3
	自立活動※5		1(選択)	1(選択)		1(選択)		0~3
合計			32~33	32~33		32~33		96~99

◎印は、学校設定教科もしくは学校設定科目。

*印は、いずれかの科目を選択。

1年で芸術選択(2単位)、

2年で3種類の類型に応じた類型選択群(計11単位)と、普通教育に関する科目の選択群[地歴選択(2単位)、

3年で選択1(2単位)・選択2(2単位)、選択3(2単位)、選択4(2単位)の選択科目群とそれぞれの類型・コースによる選択科目を配置する。

※1 教科「地歴」の必修科目は、1年で「世界史A」、2年で「日本史A」または「日本史B」を履修する。

なお、「日本史B(4単位)」を選択する場合は、2年、3年での選択科目で共に「日本史B」を選択する。

※2 教科「芸術」の必修科目は、1年で「音楽Ⅰ」、「美術Ⅰ」、「書道Ⅰ」のうちいずれか1科目を選択する。

※3 教科「情報」の必修科目「情報の科学」は、教科「商業」の「情報処理」の履修をもって代替する。

※4 「キャリア実践(6単位)」を選択する場合は、選択2、選択3、選択4のすべてで「キャリア実践」を選択する。

※5 自立活動はコーディネータとの面談等で認められた場合のみ選択可とする。

【総合学科】

令和2年度入学生

教科・科目		標準 単位数	1 年次	2 年次	3 年次	合 計
国語	国語総合	4	4			9
	現代文B	4		2	3	
地理・歴史	世界史A	2		● 2	○ 2	4～8
	世界史B	4		● 4	● 2	
	日本史A	2		● 2	○ 2	
	日本史B	4		● 4	● 2	
	地理A	2		● 2	○ 2	
	地理B	4		● 4	● 2	
公民	現代社会	2	2			2
数学	数学I	3	3			5
	数学A	2	2			
理科	物理基礎	2	▼2	▼2		6
	化学基礎	2	2			
	生物基礎	2	▼2	▼2		
	地学基礎	2		▼2		
保健体育	体育	7～8	3	3	2	10
	保健	2	1	1		
芸術	音楽I	2	■ 2			2
	美術I	2	■ 2			
	書道I	2	■ 2			
外国語	コミュニケーション英語I	3	3			13
	コミュニケーション英語II	4		4		
	コミュニケーション英語III	4			4	
	英語表現I	2	2			
家庭	家庭基礎	2	2			2
情報	社会と情報	2	2			2
選択科目				16～18	18～20	34～38
計			30	32	31	93
産業社会と人間	キャリアプランニングI	2	2			2
総合的な探究の時間	人間関係	1	1			4
	キャリアプランニングII	1		1		
	キャリアプランニングIII	1			2	
特別活動	ホームルーム		1	1	1	3
ボランティア（学校外の学修）			0～1	0～1	0～1	△0～2
自立活動（I・II・III）		(※1)	0～1	0～1	0～1	0～3
合計			34～36	34～36	34～36	◇102～107

1年次・・・芸術は■を付した3科目の中から1科目選択。理科は▼を付した2科目の中から1科目選択。

2年次・・・地歴は●を付した6科目の中から1科目選択。B科目を選択した場合は3年次も継続履修。

理科は▼を付した3科目の中から1科目選択。

3年次・・・地歴Aは○を付した3科目の中から1科目選択。

ただし、世界史は必履修。（3年次はA科目のみ、B科目は2年次からの継続履修）

ボランティアの△0～2については年間1単位で在籍中に最大2単位まで修得可能

合計単位数の◇102～107については、ボランティアが△0～2のため、最大の合計修得単位数が107となる

(※1)の標準単位数は1年あたり1～7単位

科目群別 選択科目一覧 (令和2年度入学生)

科目群	教科	選択科目		
		2年次	2・3年次	3年次
国際・文化	国語	古典B(4) ◎自己表現A(2) ◎現代文探究A(2)	古典A(2)	◎古典B探究(2) ◎現代文探究B(2) ◎自己表現B(2) ◎日本文学史(2) ◎古典A探究(2)
	地歴	世界史B①(4) 日本史B①(4) 地理B①(4)	世界史A(2) 日本史A(2) 地理A(2)	世界史B②(2) ◎日本文化史(2) 日本史B②(2) ◎世界文化史(2) 地理B②(2) ◎世界史B研究(2) ◎日本史B研究(2) ◎地理B研究(2)
	公民	政治・経済(2) 倫理(2)	—	◎公民科目研究(2) ◎時事問題(2)
	外国語	◎スピーキングA(2) ◎応用英語読解研究A(2) ◎基本英語読解研究A(2) ◎スタンダード・ライティング(2) 英語表現Ⅱ①(2)	異文化理解(2) ◎初級ハングル(2)	英語表現Ⅱ②(2) ◎スピーキングB(2) ◎応用英語読解研究B(2) ◎基本英語読解研究B(2) ◎アドバンスト・ライティング(2)
科学・環境	数学	—	数学Ⅱ(4) 数学B(2)	数学Ⅲ(4) ◎数学ⅠA探究(2) ◎数学Ⅲ探究(2) ◎数学ⅡB探究(2) ◎数学演習ⅠA(2) ◎教養数学(2)
	理科	物理基礎(2) 生物基礎(2) 地学基礎(2)	物理(4) 生物(4) 化学(4)	◎物理実験研究(4) ◎化学実験研究(4) ◎生物実験研究(4) ◎物理基礎実験研究(2) ◎生物基礎実験研究(2) ◎化学基礎実験研究(2) ◎地学基礎実験研究(2)
福祉・健康	保健体育	◎競技スポーツ(2) ◎個人スポーツ(2)	—	◎専門スポーツ(2) ◎福祉スポーツ(2)
	家庭	子どもの発達と保育A(2) ◎生活文化研究(2) ◎スポーツ栄養(2)		栄養(2) ◎生活環境(2) 子どもの発達と保育B(2)
	福祉	—	社会福祉基礎(2) コミュニケーション技術(2) ◎福祉住環境(2)	◎介護基礎(2) ◎レクリエーション学(2)
経営・情報	情報	情報デザイン(4)	情報メディア(2)	情報の表現と管理(2)
	商業	簿記(4) 原価計算(2) 情報処理(2)	◎観光基礎(2)	財務会計Ⅰ(4) 電子商取引(2) マーケティング(2) ◎秘書実務(2) 経済活動と法(2) 課題研究(2) ビジネス情報(2)
教育・人間	芸術	音楽Ⅱ(2) 美術Ⅱ(2) 書道Ⅱ(2) ソルフェージュⅠ(2)		ソルフェージュⅡ(2) ビジュアルデザイン(2) 器楽(2) 絵画(2) ◎筆の書(2) ◎実用の書(2)
	教育	◎教育入門・体験(2) ◎学内教育実習プログラム(2)	—	◎教育問題の理解と発信(2)
その他		自立活動Ⅱ(1)		自立活動Ⅲ(1)

注1 ①及び②を付した科目(地歴B、英語表現)は両方を履修すること。

注2 ◎は学校設定科目、()は単位数を表示している。選択条件の詳細についてはシラバスを参照。

